氷見市埋蔵文化財調査報告第46冊

正　保　寺　遺　跡

能越自動車道建設に伴う発掘調査報告Ⅰ

２００６年３月

氷見市教育委員会

氷見市埋蔵文化財調査報告第46冊

正　保　寺　遺　跡

能越自動車道建設に伴う発掘調査報告Ⅰ

２００６年３月

氷見市教育委員会

序

富山湾を隔てた霊峰立山を仰ぐ氷見市は、古くから海の幸、山の幸に恵まれ、人々の生活の場として、数多くの文化遺産を生み育んできました。

現在氷見市内では、富山県北西部及び能登地域と三大都市圏との交流を深め、沿線地域の産業、経済、文化の発展等を目指す能越自動車道の整備が進められています。その建設にあたっては市内の各地で新たな遺跡が発見され、大規模な発掘調査が実施されています。

氷見市教育委員会は、能越自動車道建設に伴う埋蔵文化財の調査として、平成16年度までに正保寺遺跡、粟原Ａ遺跡の本発掘調査を実施いたしました。

この報告書はそのうちのひとつ、正保寺遺跡の本発掘調査の成果をまとめたものです。今回の調査結果が今後の文化財保護の一助となるとともに、地域の歴史への関心、理解につながることを願っております。

終わりに、発掘調査にあたりましては、関係者の皆様をはじめ、多くの方々にご指導、ご協力を賜りました。この場を借りまして厚くお礼申し上げます。

平成18年３月

氷見市教育委員会

教育長　中尾　俊雄

例　　言

1　本書は、平成15・16年度に実施した富山県氷見市飯久保（とやまけんひみしいくぼ）地内に所在する正保寺（しょうぼうじ）遺跡の発掘調査の報告書である。

2　調査は、能越自動車道建設事業に先立ち、国土交通省の委託を受けて、氷見市教育委員会が実施した。

3　調査の期間・面積は次のとおりである。

本調査　　期間　平成15年８月25日より平成15年12月17日　　面積　約1,050㎡

本調査　　期間　平成16年６月１日より平成16年９月10日　　面積　約1,500㎡

4　整理作業は、遺物洗浄、注記等基礎的な作業は調査と並行して実施し、作図等の報告書作成、編集作業は平成17年度に実施した。

5　調査は、国土交通省からの委託金で実施した。

6　調査事務局は、氷見市教育委員会生涯学習課に置いた。事務担当者は次のとおりである。

平成15年度　課長：池田晃、主査：尾矢英一、主任：宮本英和、学芸員：林昭男（嘱託）

平成16年度　課長：池田晃、主査：尾矢英一、主任：宮本英和、

学芸員：大嵩崎泰明（嘱託）、河竹明子（嘱託）

平成17年度　課長：東海愼一、課長補佐：上田和弘、学芸員：大嵩崎泰明、河竹明子

7　調査は、林、大嵩崎、河竹が担当した。

8　本書の執筆・編集は大嵩崎、河竹が担当した。また遺物の実測、トレースは大嵩崎が中心となり、後述する整理補助員、整理作業員が行った。

9　調査・報告書作成に当たっては、大野究、廣瀬直樹（氷見市教育委員会生涯学習課学芸員）が補佐をした。

10　グリッド杭の設置、遺構図の空中写真測量は北陸航測株式会社に委託した。

11　第１図に掲載の２万５千分１地形図は、国土地理院長の承認を得て複製したものである。

（承認番号　平17　北複、第262号）

12　出土遺物と調査に関わる資料は、氷見市教育委員会生涯学習課が保管している。なお、正保寺遺跡の略号は「ＳＢＺ」とした。

13　土層の色調は農林水産省農林水産技術会議事務局監修『新版標準土色帖』に準じている。

14　調査参加者は次のとおりである。

平成15年度発掘調査業務　　発掘調査・遺物整理補助員：垣内勇二・宮崎美知子

平成16年度発掘調査業務　　発掘調査・遺物整理補助員：大江智志・宮崎美知子

平成17年度報告書作成業務　　整理作業員：大江智志・村中理栄

15　発掘作業員は氷見市シルバー人材センターに委託した。

16　調査、本書作成にあたり、下記の方々・機関から多大なご教示・ご協力を得た。記して感謝申し上げる。

国土交通省北陸地方整備局・富山県文化財課・富山県埋蔵文化財センター・財団法人富山県文化振興財団・氷見市能越自動車道対策室・氷見市立博物館・氷見市史編さん室・酒井重洋・山本正敏・宮田進一・町田賢一（敬称略）

目　　次

第１章：遺跡の環境…… 1
　第１節：遺跡の地理的環境…… 1
　第２節：遺跡の歴史的環境…… 1
第２章：調査の概要…… 4
　第１節：発掘調査に至る経緯…… 4
　第２節：調査の経過…… 4
　第３節：座標軸の設定…… 4
第３章：調査の成果…… 6
　第１節：基本層序…… 6
　第２節：遺構…… 7
　　（１）Ⅰ地区
　　（２）Ⅱ地区
　　（３）Ⅲ地区
　　（４）平成16年度調査区
　第３節：遺物……12
　　（１）Ⅰ地区出土遺物
　　（２）Ⅱ地区出土遺物
　　（３）Ⅲ地区出土遺物
　　（４）平成16年度調査区出土遺物
　　（５）木製品
　　（６）石造物
第４章：まとめ……20
参 考 文 献 ……21
自然科学分析……23

図・表目次

第１図　周辺の遺跡…… 2
第１表　周辺の遺跡…… 3
第２図　調査区及びグリッド配置図…… 5
第３図　基本層序模式図…… 6
第４図　Ⅰ・Ⅱ地区　遺構配置図
第５図　Ⅱ地区　ＳＤ01、ＳＤ02、ＳＸ03、ＳＸ04、旧河道01土層断面図
第６図　Ⅱ地区　ＳＸ05出土状況図・断面図、ＳＸ03周辺木材出土状況図
第７図　丘陵斜面調査前測量図
第８図　Ⅲ地区　全体図
第９図　Ⅲ地区　土塁状道平面図
第10図　Ⅲ地区　五輪塔集積地状況図、Ｔ6・Ｔ10土層断面図
第11図　Ⅲ地区　土塁状道・Ｔ5土層断面図
第12図　平成16年度調査区　全体図
第13図　平成16年度調査区　土塁状道平面図
第14図　平成16年度調査区　Ｔ11～Ｔ15土層断面図
第15図　平成16年度調査区　Ｔ16～Ｔ20土層断面図
第16図　平成16年度調査区　Ｔ21～Ｔ24土層断面図
第17図　平成16年度調査区　丘陵上平坦面平・断面図、Ｔ25・Ｔ26土層断面図
第18図　平成16年度調査区　Ｔ27～Ｔ30土層断面図
第19～33図　遺物実測図（１）～（15）

図版１　遺跡周辺空中写真（1947年撮影）
図版２　遺跡周辺空中写真（1975年撮影）
図版３　１．平成15年度調査後遠景
　　２．平成15年度調査前近景
図版４　１．平成15年度Ⅰ・Ⅱ地区全景
　　２．平成15年度Ⅲ地区全景
図版５　平成15年度調査区（１）
　　１．旧河道01検出状況
　　２．旧河道01完掘状況
　　３．旧河道01ｇ－ｇ' 断面
　　４．旧河道01ｈ－ｈ' 断面
　　５．ＳＸ05検出状況
　　６．ＳＸ05完掘状況
　　７．ＳＸ05半裁状況
　　８．ＳＸ05付近漆椀出土状況
図版６　平成15年度調査区（２）
　　１．土塁状道調査前状況
　　２．土塁状道完掘状況
　　３．土塁状道縦断面
　　４．土塁状道横断面
　　５．Ｔ５・６完掘状況
　　６．Ｔ５完掘状況
　　７．五輪塔集積地
　　８．作業風景
図版７　１．平成16年度調査区全景
　　２．平成16年度調査区
　　（土塁状道）鳥瞰風景
図版８　平成16年度調査区（１）
　　１．土塁状道調査前状況
　　２．土塁状道完掘状況
　　３．土塁状道完掘状況
　　４．土塁状道土層断面（Ｔ27拡張）
　　５．土塁状道クランク部完掘状況
　　６．土塁状道土層断面（Ｔ22）
図版９　平成16年度調査区（２）
　　１．土塁状道ａ－ａ' 断面（Ｔ24南西端）
　　２．土塁状道ｃ－ｃ' 断面（Ｔ27中央）
　　３．Ｔ28南東壁中央左（土塁状道横断面）
　　４．Ｔ28南東壁中央右（土塁状道横断面）
　　５．ＳＫ11完掘状況
　　６．ＳＸ11完掘状況
　　７．Ｔ29遺物出土状況
　　８．道直上遺物出土状況
図版10　平成16年度調査区（３）
　　１．北東側土塁完掘状況
　　２．Ｔ28南東壁（北東側土塁横断面）
　　３．Ｔ28南東壁（南西側土塁横断面）
　　４．南西側土塁完掘状況
　　５．Ｔ30北壁（北東側土塁縦断面）
　　６．土塁直上遺物出土状況
図版11　平成16年度調査区（４）
　　１．丘陵上平坦面調査前状況
　　２．丘陵上平坦面完掘状況
　　３．丘陵上平坦面北東壁中央
　　４．丘陵上平坦面中央トレンチ北壁
　　５．Ｔ13完掘状況
　　６．Ｔ14完掘状況
　　７．Ｔ15完掘状況
　　８．Ｔ17完掘状況
図版12　平成16年度調査区（５）
　　１．Ｔ21拡張トレンチ完掘状況
　　２．Ｔ21拡張トレンチ南西壁
　　３．Ｔ22・23完掘状況
　　４．Ｔ22北東壁南東端
　　５．Ｔ25南西壁南東端
　　６．Ｔ25完掘状況
　　７．Ｔ26北西壁北東端
図版13　遺物写真（１）
図版14・15　遺物写真（旧河道01土器）
図版16～18　遺物写真（旧河道01石器）
図版19　遺物写真（ＳＸ05）
図版20　遺物写真（ＳＤ01・ＳＸ02）
図版21～24　遺物写真（包含層）
図版25　遺物写真（Ⅲ地区）
図版26　遺物写真（平成16年度調査区）
図版27・28　遺物写真（木製品）
図版29～31　遺物写真（五輪塔）

第１章　遺跡の環境

第１節　遺跡の地理的環境

氷見市は、富山県の西北部に位置し、能登半島の基部東側にあたる。昭和27年の市制施行から昭和29年までに、旧太田村を除く氷見郡１町17村が合併し、現在の氷見市が成立した。面積は約230㎢、人口は約５万６千人である。

市域は、北・西・南の三方が標高300～500ｍの丘陵に取り囲まれ、東側約20kmの海岸線をもって富山湾に面している。

正保寺遺跡は、氷見市の南部を流れる仏生寺川中流右岸、仏生寺・神代丘陵から十三谷に向かって延びる小丘陵上から裾部にかけて立地し、標高約９～51ｍに位置する。現況は田地・畑地・山林である。

仏生寺川は、富山湾に注ぐ河川であり、下流にはかつて布勢水海とよばれた潟湖が広がっていた。

飯久保地区は仏生寺川をはさんで北と南の二つの集落に分かれている。北側の集落は寺飯久保と呼ばれ、ここには真宗大谷派光久寺と寺内長栄寺がある。光久寺には加賀藩御用造園師能登の駒造作と伝えられる江戸時代の茶庭がある。光久寺縁起に「浄土曼荼羅をあらわすもの」とされるように拝む庭としても特徴がある。富山県指定名勝となっている。一方南側集落は飯久保城の麓にあることから、城飯久保又は城ノ下と呼ばれている。

第２節　遺跡の歴史的環境

以下、仏生寺川流域の遺跡について布勢水海南側中心に概観する。

縄文時代の遺跡では、神代羽連遺跡で石器が採集されている。本調査の行われた惣領浦之前遺跡では旧河道から中・後期の遺物が多く出土している。惣領野際遺跡の調査では晩期の遺物が出土している。

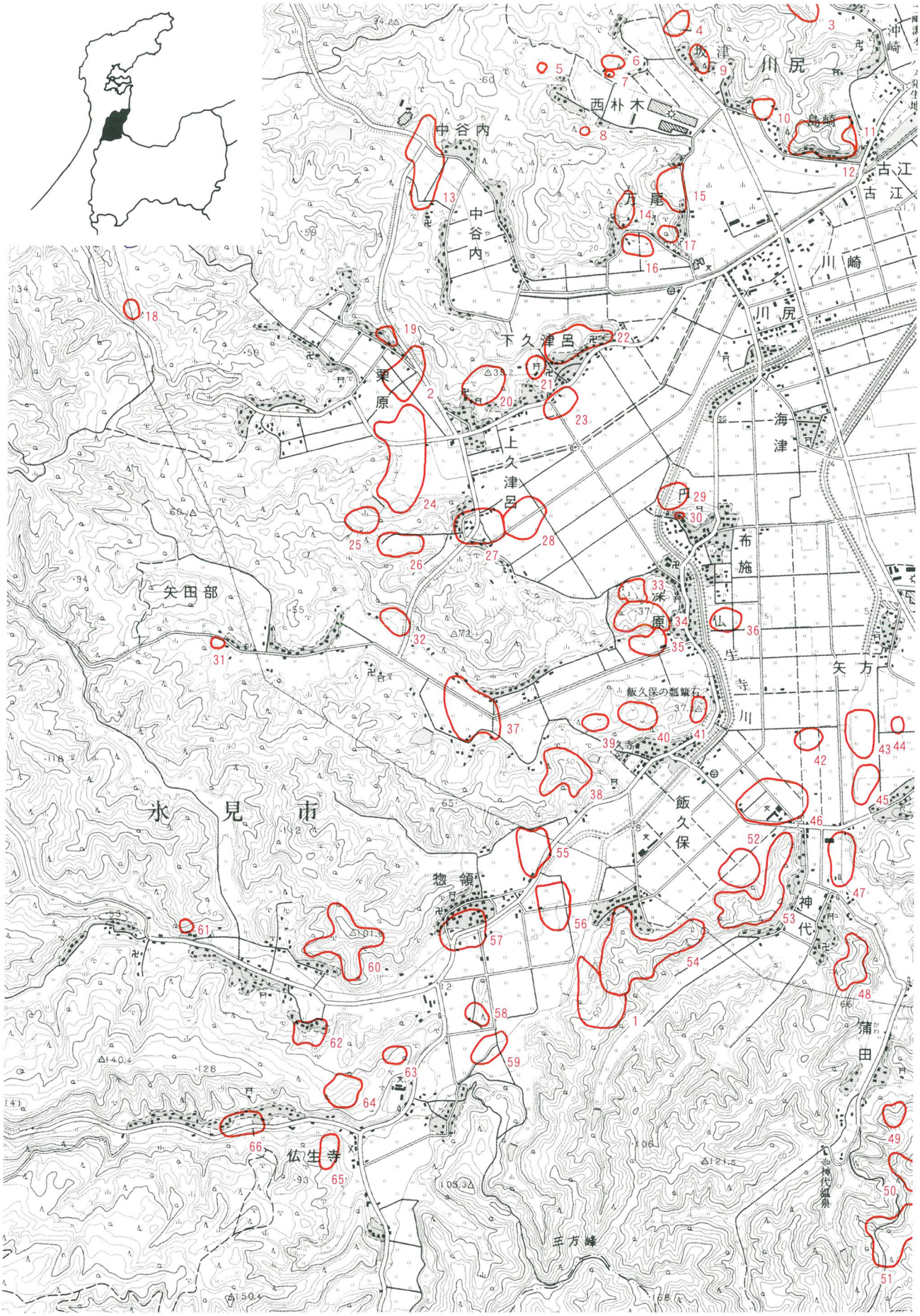
弥生時代の遺跡では、神代羽連遺跡と矢ノ方一丁目遺跡で、弥生時代終末期の遺物が出土しており、この時期から布勢水海南側の低地に生産基盤をおいた集落が営まれ始めたと考えられる。神代羽連遺跡ではわずかであるが、弥生時代中期の資料もある。惣領浦之前遺跡の調査では、弥生時代後期後半の土器に混ざって大量の木製品、朱色の漆塗りの盾が出土している。

古墳時代の遺跡では、神代羽連遺跡において前期初めの資料がある。惣領野際遺跡の調査では、古墳時代前期の流路などから土師器や木製品が出土している。中期に入ると神代羽連遺跡に矢ノ方一丁目遺跡・惣領遺跡・布施畑直遺跡が加わり、布施畑直遺跡を除いて後期まで存続する。一方、古墳では前期から後期まで長期間造営された光西寺山古墳群をはじめとして、中期と推定される惣領コツデラ古墳群、後期と推定される惣領古墳群・寺飯久保古墳群などがある。惣領古墳群、惣領コツデラ古墳群は惣領遺跡との関連が考えられる。

古代の遺跡では、惣領浦之前遺跡・神代羽連遺跡・飯久保ナガモン遺跡・飯久保山ノ下遺跡などがあるが、集落の主体は東側の堀田地区周辺に移っていた可能性がある。

中世の遺跡では、14世紀後半から15世紀前半の石仏が安置されている鞍骨岩屋遺跡がある。16世紀後半主体と考えられる飯久保城跡、神代城跡・惣領砦跡・惣領コツデラ城跡などの城郭が確認されている。惣領野際遺跡、惣領浦之前遺跡の調査では集落跡が確認されている。

※惣領野際遺跡と惣領浦之前遺跡の本調査は、文化振興財団が行った。



第１図　周辺の遺跡　（S＝1/25,000）

第1表 周辺の遺跡

No.	遺　跡　名	種 別	時　代	No.	遺　跡　名	種 別	時　代
1	正保寺遺跡	社寺・散布地	縄文・弥生・古代・中世・近世	34	深原古墳群	古墳	古墳
2	粟原A遺跡	散布地	古代・中世・近世	35	深原打越遺跡	散布地	古代
3	荒館B遺跡	散布地	縄文・中世	36	布施畑直遺跡	散布地	古墳
4	坂津遺跡	散布地	古代	37	NEJ-17遺跡	散布地	縄文・弥生・古墳 古代・中世・近世
5	西朴木ジョウコウジ遺跡	散布地	古代・中世・近世	38	惣領古戸遺跡	城館？	中世
6	西朴木古墳群	古墳	古墳	39	矢田部ナカタ遺跡	散布地	中世
7	西朴木フルヤチ遺跡	その他(埋納銭)	中世	40	飯久保後山遺跡	散布地・塚	縄文・弥生・近世
8	西朴木ドウガヤチ遺跡	墓	中世	41	寺飯久保古墳群	古墳	古墳
9	坂津横穴墓群	横穴墓	古墳	42	神代ハタケダ遺跡	散布地	中世
10	坂津B遺跡	散布地	弥生	43	神代羽連遺跡	散布地	縄文・弥生・古墳 古代・中世・近世
11	十二町島崎遺跡	散布地	弥生	44	堀田モリノ田塚	塚	中世
12	島崎城跡	城館	中世	45	石崎遺跡	散布地	古代・中世
13	中谷内遺跡	散布地・集落	縄文・古墳・古代・中世	46	飯久保ナガモン遺跡	散布地	古代
14	万尾城跡	城館	中世	47	矢ノ方一丁目遺跡	散布地	弥生・古墳
15	万尾遺跡	散布地	弥生・古墳・古代・中世・近世	48	神代城跡	城館	中世
16	万尾B遺跡	散布地	弥生・古墳・古代・中世・近世	49	蒲田B遺跡	散布地	中世
17	万尾古墳	古墳	古墳	50	堀田長尾遺跡	不明	中世
18	粟原ミナト遺跡	散布地	古墳	51	蒲田A遺跡	不明	中世
19	粟原B遺跡	散布地	不明	52	飯久保山ノ下遺跡	散布地	古代・中世
20	上久津呂C遺跡	中世墓	中世	53	光西寺山古墳群	古墳	古墳
21	下久津呂古墳	古墳	古墳	54	飯久保城跡	城館	中世
22	久津呂城跡	城館	中世	55	惣領浦之前遺跡	散布地・集落	縄文・弥生・古墳 古代・中世・近世
23	下久津呂遺跡	散布地	中世	56	惣領野際遺跡	散布地・集落	縄文・古墳・古代・中世
24	上久津呂中屋遺跡	集落・散布地	縄文・弥生・古墳・古代・中世	57	惣領遺跡	散布地	古墳・古代・中世・近世
25	上久津呂ゴタンダ山遺跡	散布地	縄文・古墳	58	惣領古墳群	古墳	古墳
26	NEJ-18遺跡	散布地	縄文・古代・中世・近世	59	惣領B遺跡	散布地	古墳～古代
27	上久津呂B遺跡	散布地	縄文・弥生・古墳・古代	60	惣領砦跡	城館	中世
28	上久津呂A遺跡	散布地	古代	61	鞍骨岩屋遺跡	社寺	中世
29	布施八ヶ田遺跡	散布地	縄文・古代	62	鞍骨オヤノヤチ遺跡	散布地	古代・近世
30	布施円山古墳	古墳	古墳	63	惣領コツデラ古墳群	古墳	古墳
31	矢田部カワベリ遺跡	散布地	中世	64	惣領コツデラ城跡	城館	中世
32	矢田部六反坪遺跡	散布地	中世	65	寺中竹端城跡	城館	中世
33	深原前田遺跡	散布地	古代・中世・近世	66	寺中向遺跡	散布地	中世

第２章　調査の概要

第１節　発掘調査に至る経緯

能越自動車道（一般国道470号）は、富山県西部・能登地域の高速交通体系の確立及び地域活性化のため、昭和62年の高規格幹線道路計画の一環として、石川県輪島市から富山県砺波市に至る延長約100㎞の自動車専用道路として計画された。

氷見市内においては、平成12年３月に高岡ＩＣ～氷見ＩＣ間の分布調査が、富山県教育委員会を主体として実施された。工事予定ルート上には、周知の埋蔵文化財包蔵地として正保寺遺跡があったが、この分布調査により範囲が拡大することが確認された。

これを受けて平成14年９月30日～10月25日に、富山県文化振興財団埋蔵文化財調査事務所によって正保寺遺跡の試掘調査が実施され、約4,000㎡について本調査が必要であると判断された（富山県文化振興財団埋蔵文化財調査事務所2003）。

国土交通省・富山県教育委員会・富山県文化振興財団・氷見市教育委員会の協議により、能越自動車道本線の埋蔵文化財発掘調査については、富山県文化振興財団埋蔵文化財調査事務所が担当することになっていたが、平成15・16年度については、本調査が必要な面積が財団事務所の調査体制の限界を超えているため、氷見市教育委員会に一部の本調査について協力要請があった。これを受けて氷見市教育委員会では、正保寺遺跡と粟原Ａ遺跡の二箇所について、平成15・16年度に調査を行うことになった。

なお、能越自動車道は当分の間２車線で供用されるため、本調査の範囲は工事の実施される２車線部分について行った。

第２節　調査の経過

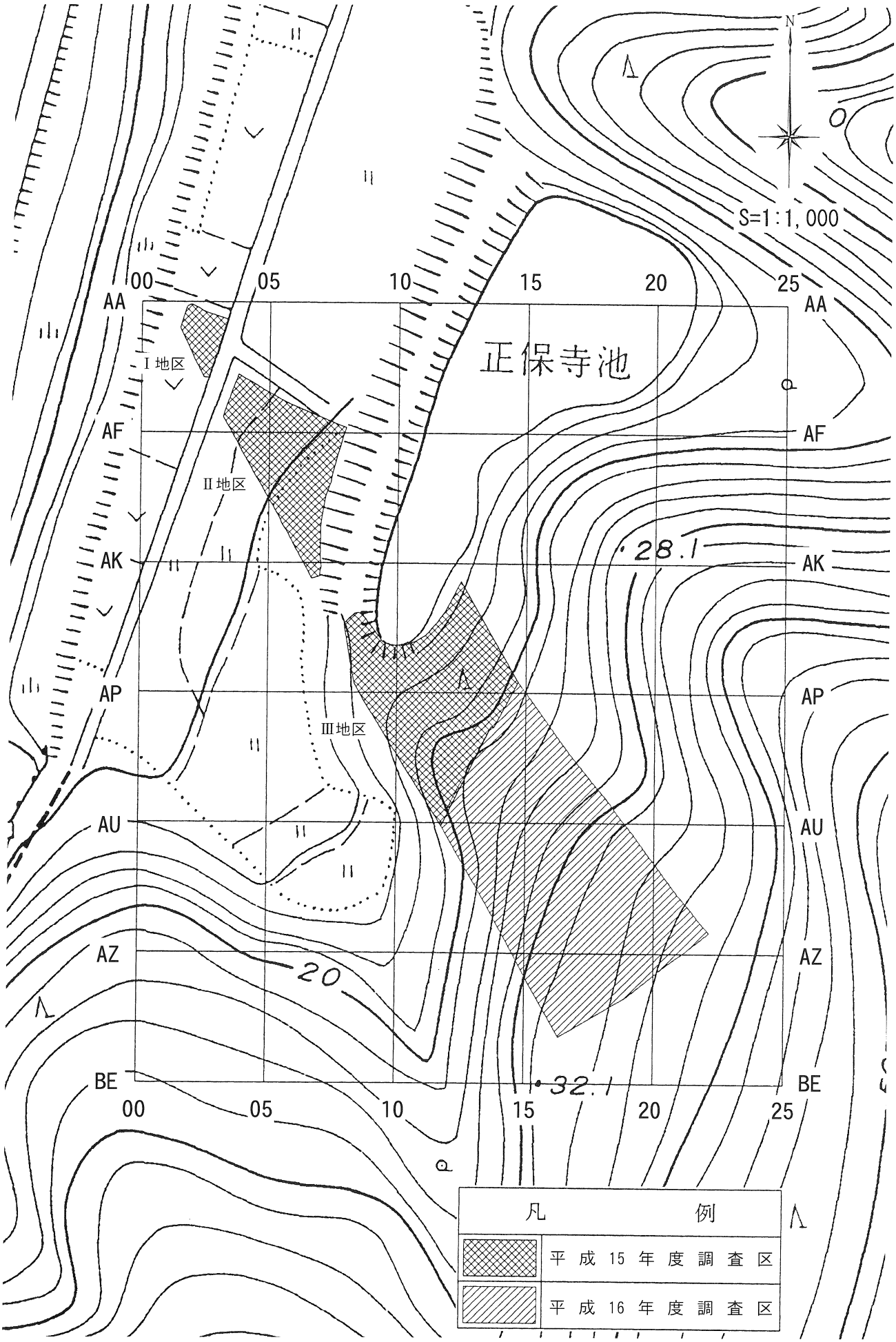
調査にあたっては、調査区を4分割してⅠからⅢまでの地区名を割り振り、平成15年度にⅠ・Ⅱ地区、Ⅲ地区の順で調査を実施し、平成16年度に残りの範囲の調査を実施した。

平成15年度調査は、８月25日よりⅢ地区の五輪塔集積地の写真撮影・図化を行った。９月８日よりⅠ・Ⅱ地区にて重機による伐採された木材の搬出と表土掘削を実施した。9月11日には発掘作業員による作業を開始、以後Ⅱ地区を中心にⅠ地区を並行して作業を続けた。10月24日に空中写真の撮影を実施した。11月15日にⅢ地区の木の伐採が開始され、17日に現況地形測量を終了した。11月19日にⅡ地区の埋め戻しとベルトコンベアーの移動を行い、20日にⅢ地区の掘削を開始した。12月11日に空中写真の撮影を実施し、その後図化作業等を終え、17日に調査を終了した。その後器材の撤収を行い、すべての作業を終了した。

平成16年度調査は、６月１日から発掘作業員による作業を実施した。9月１日にラジコンヘリによる空中写真の撮影を実施し器材の撤収を行った。その後図化作業等を終え、9月10日に調査を終了した。

第３節　座標軸の設定（第２図）

表土除去作業の終了後、国土座標（座標系第Ⅶ系）上の点（Ｘ＝89,130、Ｙ＝19,060）を基準として設定した。１グリッドの区画は５ｍ×５ｍを1単位とし、その北西隅のグリッド交点を呼称することとした。さらに、そのグリッドを4分割した区画を設定し、最小区画として遺物取り上げ時に利用した。



第２図　調査区及びグリッド配置図　（S＝1/1,000）

第３章　調査の成果

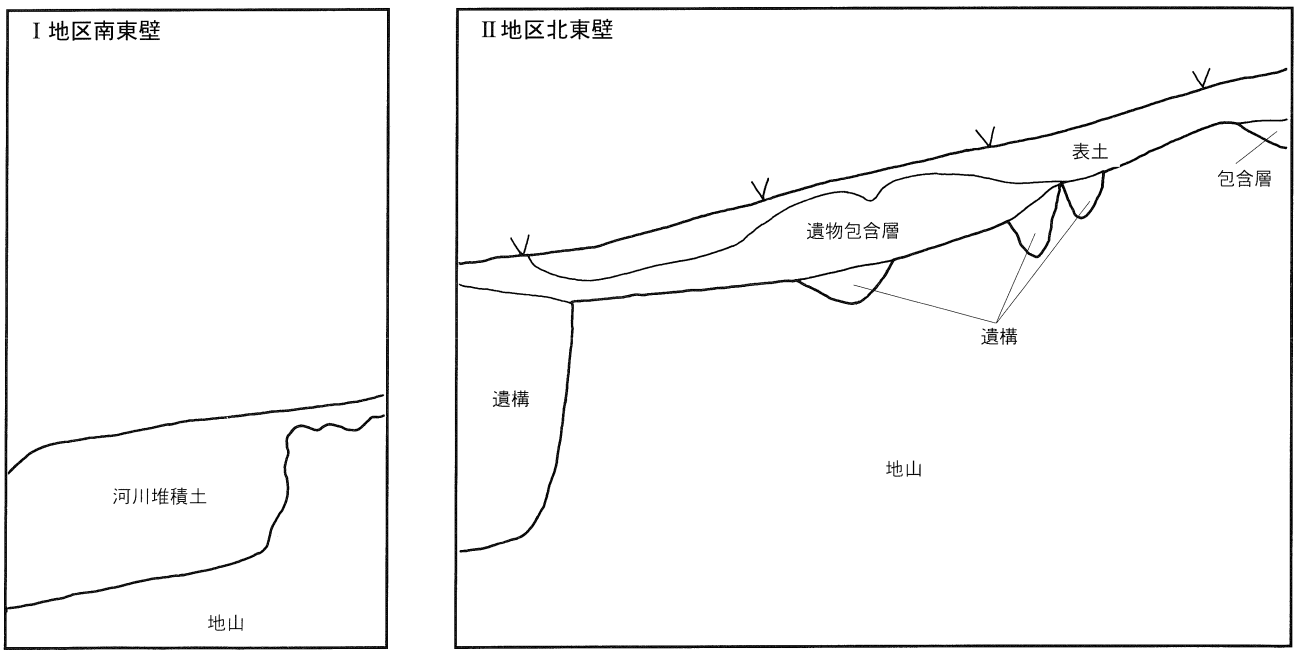
第１節　基本層序（第３図）

調査区は、仏生寺川の東側に位置する。脇之谷内川と合流した仏生寺川は調査区西側を南北に流れ、小河川と合流していく。飯久保では土地改良が行われており、おそらくその時点に河川改修が行われたと考えられる。明治時代にため池（正保寺池）の構築が行われたため、Ⅱ地区・Ⅲ地区の遺構面は一部削平、撹乱を受けている。調査区丘陵裾は河川改修と土地改良双方の影響を受けている様子が見受けられる。丘陵斜面は、杉の植林・耕作が行われていたため、整地が行われている。

基本層序は、丘陵裾のⅠ地区とⅡ地区とⅢ地区・平成16年度調査区とで様相が異なる。Ⅰ地区では、河川堆積層（砂質土～粗砂）、地山（灰白色粘質土）となる。Ⅱ地区では、表土（にぶい黄褐色～褐色粘質土など）、遺物包含層（褐灰色砂質土、灰黄褐色～暗灰黄色粘質土など）、地山（にぶい黄色粘質土しまる）となる。Ⅲ地区・平成16年度調査区では、表土（黒褐色粘質土）、自然堆積層（にぶい黄褐色～黒褐色粘質土・砂質土など）、地山（浅黄色泥岩、にぶい黄色砂質土）となる。

Ⅰ・Ⅱ地区では、遺構は地山上で検出しているが、仏生寺川の氾濫、水田耕作、ため池の堤防構築などによる撹乱・盛土・削平によって、地山・遺物包含層の遺存状態が安定していない。そのためか、Ⅱ地区旧河道01は、表土直下で検出された。以上より調査で遺物包含層として扱った層は、現代の堆積層とも考えられる。

Ⅲ地区・平成16年度調査区については、第２節（３）Ⅲ地区、（４）平成16年度調査区で記述した。



第３図　基本層序模式図

第２節　遺構

今回の調査では、丘陵裾のⅡ地区において溝・旧河道・土坑等を検出した。丘陵斜面のⅢ地区・平成16年度調査区では、中世寺院に通じると考えられる土塁状の道を検出した。

主な遺構についてはⅡ地区、Ⅲ地区、平成16年度調査区それぞれについて以下に記述した。また、土地利用の変遷確認のために設定したトレンチについても記述した。

（１）Ⅰ地区（第４図、図版４）

仏生寺川の氾濫によって自然堆積している。調査区の南端に溝らしきくぼみが検出できたのみである。

（２）Ⅱ地区（第４図、図版４・５）

前述したとおりⅡ地区で検出した遺構のほとんどは削平され浅い。

縄文～弥生時代の遺構

旧河道01（第４・５図）　調査区を南東から北西に流れる河道である。北西側はＳＸ02に切られている。長さは調査区端からＳＸ02までで約24ｍ、最大幅約7ｍ、深さは約40㎝を測る。断面形は緩やかなＵ字形を呈する。埋土は灰黄褐色砂質土、褐灰色粘質土、黒褐色粘質土などである。土層断面から、自然堆積で埋没していったものと思われる。遺物は多量の縄文土器破片・石器、天王山式系統の土器破片が出土している。

ＳＸ03（第５・６図）　ＡＩ06に位置する。平面形は円形で、直径70㎝、深さ20㎝を測る。旧河道01掘削後検出できた。埋土は褐灰色粘質土に有機物が多量に混じる。その下層からは、多量の堅果が出土した。遺物は縄文土器破片が１点出土している。堅果の分析結果からは、人々の生活残渣が破棄されたとは考えにくいが、旧河道に掘り込まれた可能性は否定できない。

ＳＸ04（第５・６図）　AH05に位置する。ＳＸ03と似た形態から、同じ性格のものと考えられる。

ＳＸ03・ＳＸ04の周辺からは、木材がまとまって出土しており、遺構に伴う遺物の可能性は否定できない。（第６図）

中世の遺構

ＳＤ01（第４・５図）　ＡＥ06からＡＧ05に位置し、北東から南西へ走る溝である。長さは旧河道01までで約11ｍ、最大幅約2ｍ、深さ25㎝を測る。断面形は緩やかなＵ字形を呈する。埋土は暗緑灰色粘質土に地山の岩盤がブロック状に混じる。上部は削平を受けていると考えられる。遺物は中世珠洲焼破片が5点出土している。

ＳＤ02（第４・５図）　ＡＥ05に位置し、ＳＤ01と平行して走る溝である。長さ約7ｍ、最大幅約2.5ｍ、深さ16㎝を測る。断面は緩やかなＵ字形を呈する。埋土は、黒褐色粘質土に地山の岩盤が混じる。上部は削平を受けていると考えられる。遺物は出土していないが、ＳＤ01と似た形態から中世の遺構ではないかと考えられる。

ＳＸ05（第６図）　ＡＧ04からＡＧ05に位置する。平面形は不定形で、遺構の性格は不明である。長軸3.6ｍ、短軸2.3ｍ、深さ20㎝を測る。旧河道01を掘削した後検出できたため、遺存していた深さは50㎝以上あったものと思われる。ＳＤ01とつながる可能性がある。埋土は黒褐色シルトである。遺物は、

古代土師器、中世珠洲焼、石製品、木製品が出土している。タモ枠と考えられる弓状木製品（194）、櫂（196）が出土している事は特徴的である。また、周辺からは地山に刺さった状態で木杭（201～207）が出土しており、遺構に伴う遺物の可能性がある。付近から漆椀（197）も出土している。珠洲焼、石製品、木製品とも被熱痕の認められる遺物が多い。13世紀後半から15世紀に比定される。

なお、文化振興財団の行った試掘で検出された遺構である。

近世の遺構

ＳＸ02（第４図） 調査区の北西端に位置する。旧河道01を切っており、平面形は不定形である。遺物は縄文土器、須恵器、中世珠洲焼、近世陶磁器が出土しており、撹乱と考えられる。

（３）Ⅲ地区（第８図、図版４・６）

Ⅲ地区では土塁状の道を検出している。

中世の遺構

土塁状道（第９・11図、図版６） 調査区の南東部分に位置している。土塁と道に直交するトレンチ（ａ－ａ'）と道の中央に斜面に直交するトレンチ（ｂ―ｂ'）を設定した。土塁の盛土は南西側で認められ、黄褐色粘質土に地山の泥岩がブロック状に混じる。道覆土は黄褐色、にぶい黄褐色粘質土などである。北東側土塁の上部は後世に削平を受けたり崩落したりして、盛土の旧状は遺存していない。遺物は須恵器がもっとも多く出土しているが、土塁上から中世土師器、道覆土から中世珠洲焼鉢の底部（161）が出土しており、14世紀後半から15世紀に比定される。

トレンチ

Ｔ５（第11図、図版６） 山の傾斜と２段の平坦面の関係を確認するために、斜面に直交するように設定した幅１ｍ、長さ16.0ｍのトレンチである。粘質土、砂質土が何層にも自然堆積しているのみで、遺構は確認されなかった。遺物は中世珠洲焼、細片のため図示しなかったが須恵器が出土している。

Ｔ６（第10図、図版６） Ｔ５と平行に設定した幅１ｍ、長さ11.0ｍのトレンチである。粘質土が何層にも自然堆積しているのみで、遺構は確認されなかった。遺物は須恵器、細片のため図示しなかったが土師器が出土している。

Ｔ10（第10図） ＡＰ09に設定した2.5ｍ×2.5ｍのマス掘りである。表土を掘削すると、すぐに地山が検出された。遺物は出土していない。ここは、ため池の堤防築造の際に大きく削平されており、土塁状道が続いていた可能性もあるが、遺存はしていない。

五輪塔集積地（第10図、図版６）

ＡＰ09に五輪塔の部材が17点集積されていた。現代に集積された二次的な遺物である。なお、丘陵上は中世寺院伝承地であり、２ヶ所で五輪塔が集積されているのが確認されている。

（４）平成16年度調査区（第12～18図、図版７～12）

平成16年度調査区では土塁状の道、土坑を検出している。

中世の遺構

土塁状道（第13図、図版８～10）　調査区の北西部分に位置している。北東側ＡＲ13 付近の土塁の上部は後世に削平を受け、盛土の旧状は遺存していない。南東方向に伸びている道はＡＵ16付近で北東方向に屈折し、さらに東に屈折する。しだいに幅は狭くなり、ＡＴ17では人一人通れるくらいとなる。地山は微砂と板状の泥岩がサンドイッチ状に堆積しているが、階段状を呈しており、これを整形したのであろうか。Ｔ27とＴ21の様子から南東方向にさらに続いて、上段で東の方向へ屈折していたことも推定される。表土を掘削していくと、北東側土塁、南西側土塁とも盛土は3段に掻揚されている事が確認できた。南西側土塁は大きく崩落しているか削平されたとみられる。遺物は須恵器がもっとも多く出土しているが、土塁上から中世土師器、道覆土から中世珠洲焼鉢（175）が出土しており、15世紀に比定される。

ＳＫ11（第13図、図版９）　土塁状道が屈折するＡＵ16に位置する。道の下端に掘り込まれており、平面形は不定形で、遺構の性格は不明である。長軸110cm、短軸75cm、深さ40cmを測る。埋土は黄褐色粘質土にしまりの強い微砂が混じる。遺物は出土していない。

ＳＸ11（第13図、図版９）　土塁状道が屈折するＡＵ16に位置する。道の下端に掘り込まれており、平面形はほぼ方形を呈する。長軸140cm、短軸120cm、深さ55cmを測る。埋土は黄褐色粘質土にしまりの強い微砂が混じる。遺物は五輪塔の火輪（177）が出土している。遺構の性格は不明である。

土塁状道の調査にあたっては、8本のトレンチ（Ｔ21・Ｔ22・Ｔ23・Ｔ24・Ｔ27・Ｔ28・Ｔ29・Ｔ30）を設定した。以下、順に述べる。

Ｔ21（第16図、図版12）　斜面に平行するように設定した幅50cm、長さ6.5ｍのトレンチと、斜面に直交するように設定した幅50cm、長さ3.3ｍのトレンチである。明黄褐色、黄褐色、にぶい黄褐色、褐色、暗褐色などの粘質土に泥岩がブロック状に混じっているが、自然堆積であると考えられる。地山は泥岩の岩盤である。遺物は細片のため図示しなかったが、中世珠洲焼、石製品が出土している。

Ｔ22（第16図、図版12）　2段の平坦面と山の傾斜を確認するために斜面に直交するように設定した幅70cm、長さ10.5ｍのトレンチである。斜面裾の平坦面では土塁の旧表土・盛土・道覆土が確認できた。旧表土は黒褐色粘質土であり、盛土は黄褐色、にぶい黄褐色、褐色、暗褐色粘質土に泥岩がブロック状に混じる。道覆土は褐色粘質土に泥岩がブロック状に混じる自然堆積であると考えられる。地山はしまりの強い微砂である。トレンチの南東端では上位道の下端が検出できた。覆土はにぶい黄褐色、褐色粘質土に泥岩がブロック状に混じる。地山は泥岩の岩盤である。遺物は中世珠洲焼、細片のため図示しなかったが土師器が出土している。

Ｔ23（第16図、図版12）　盛土であるのか岩盤が露出しているのかを確認するために斜面に直交するように設定した幅70cm、長さ5.8ｍのトレンチである。トレンチのほとんどの部分は岩盤であった。北側の斜面裾では岩盤の下層に明黄褐色、黄褐色、明褐色、褐色粘質土に泥岩がブロック状に混じっている。遺物は出土していない。

Ｔ24（第16図、図版９）　現況地形から推定されていた道の遺存状況を確認するために設定した幅70cm、長さ7.2ｍのトレンチ（ａ－ａ'）である。トレンチの北東部では土塁の旧表土・盛土が確認できた。道覆土は褐色、暗褐色粘質土に泥岩がブロック状に混じっているが、自然堆積であると考えられる。地山はしまりの強い微砂である。徐々に旧表土や盛土が自然に崩落して堆積していったのであろうか。遺

物は出土していない。

T 27（第18図、図版９） 現況地形から推定されていた道の遺存状況と平坦面との関係を確認するために設定した幅70㎝、長さ12.5ｍのトレンチ（ｃ－ｃ'）である。上段平坦面に達した所でトレンチを南西に拡張した。道覆土は、黄褐色、褐色、暗褐色粘質土に泥岩がブロック状に混じっているが、自然堆積であると考えられる。地山はしまりの強い微砂である。徐々に土塁盛土が自然に崩落して堆積していったのであろうか。遺物は須恵器が出土している。拡張トレンチ南東壁土層断面から、道とほぼ同じ幅のＵ字形のくぼみが確認でき、上位道に続くと推定される。

T 28（第18図、図版９・10） 現況地形から推定されていた道と土塁の遺存状況を確認するために直交するように設定した幅50㎝、長さ12.8ｍのトレンチである。トレンチの北東部（北東側土塁）では土塁の盛土が認められる。黄橙色、明黄褐色、黄褐色、褐色粘質土に泥岩がブロック状に混じるものと黄褐色微砂にしまりの強い微砂がブロック状に混じるものがある。南西部（南西側土塁）では土塁に盛土はほとんど認められないが、わずかに南西端に盛土が認められる。明黄褐色粘質土に泥岩がブロック状に混じる。道覆土は盛土が崩落した後、褐色、暗褐色粘質土が自然堆積したと考えられる。地山はしまりの強い微砂である。徐々に盛土が自然に崩落して堆積していったのであろうか。北東側土塁の道側は崩落したから盛り直したのであろうか。遺物は出土していない。

T 29（第18図） 現況地形から推定されていた道の遺存状況を確認するために設定した幅70㎝、長さ11.5ｍのトレンチ（ｄ－ｄ'）である。道覆土は、黄褐色、にぶい黄褐色、褐色、暗褐色粘質土に泥岩がブロック状に混じっているが、自然堆積であると考えられる。地山は主にしまりの強い微砂であるが、北西端は泥岩の岩盤である。徐々に土塁盛土が自然に崩落して堆積していったのであろうか。遺物は須恵器、中世珠洲焼が出土している。

T 30（第18 図、図版10） 現況地形から推定されていた土塁の遺存状況を確認するために設定した幅50㎝、長さ4.5ｍのトレンチである。黄褐色、褐色粘質土にしまりの強い微砂がブロック状に混じっており、盛土であると思われる。地山はしまりの強い微砂である。西端は後世の耕作のために削平を受けており、表土のすぐ下が地山であった。遺物は出土していない。

トレンチ

平坦面の堆積の広がりと、傾斜と流土との関係を確認するために、トレンチを設定した。

T 11（第14図） 斜面に直交するように設定した幅１ｍ、長さ3.8ｍのトレンチである。地山は泥岩の岩盤である。自然堆積しているのみで、遺構は確認されなかった。遺物は出土していない。

T 12（第14図） 斜面に平行するように設定した幅１ｍ、長さ5.5ｍのトレンチと、斜面に直交するように設定した幅50㎝、長さ5.3ｍのトレンチである。地山は泥岩の岩盤である。自然堆積しているのみで、遺構は確認されなかった。遺物は須恵器が出土している。

T 13（第14図、図版11） 斜面に直交するように設定した幅１ｍ、長さ3.5ｍのトレンチである。地山は泥岩の岩盤である。自然堆積しているのみで、遺構は確認されなかった。遺物は細片のため図示しなかったが土師器が出土している。

T 14（第14図、図版11） 斜面に平行するように設定した幅１ｍ、長さ4.0ｍのトレンチと、斜面に直交するように設定した幅50㎝、長さ1.6ｍのトレンチである。地山は泥岩の岩盤である。自然堆積しているのみで、遺構は確認されなかった。遺物は細片のため図示しなかったが土師器が出土している。

Ｔ15（第14図、図版11） 斜面に平行するように設定した幅１ｍ、長さ4.0ｍのトレンチと、斜面に直交するように設定した幅70㎝、長さ10.0ｍのトレンチである。地山は泥岩の岩盤であるが、西端はしまりの強い微砂である。自然堆積しているのみで、遺構は確認されなかった。遺物は細片のため図示しなかったが肥前系磁器が出土している。

Ｔ16（第15図） 斜面に平行するように設定した幅１ｍ、長さ11.0ｍのトレンチと、斜面に直交するように設定した幅70㎝、長さ2.0ｍのトレンチである。地山は泥岩の岩盤である。自然堆積しているのみで、遺構は確認されなかった。遺物は出土していない。

Ｔ17（第15図、図版11） 斜面に平行するように設定した幅70㎝、長さ7.0ｍのトレンチと、斜面に直交するように設定した幅70㎝、長さ2.9ｍのトレンチである。地山は泥岩の岩盤であるが、東端はしまりの強い微砂である。自然堆積しているのみで、遺構は確認されなかった。遺物は細片のため図示しなかったが須恵器が出土している。

Ｔ18（第15図） 斜面に平行するように設定した幅70㎝、長さ3.5ｍのトレンチである。地山は泥岩の岩盤である。自然堆積しているのみで、遺構は確認されなかった。遺物は須恵器、細片のため図示しなかったが土師器が出土している。

Ｔ19（第15図） 斜面に平行するように設定した幅70㎝、長さ6.5ｍのトレンチと、斜面に直交するように設定した幅70㎝、長さ6.0ｍのトレンチである。地山は泥岩の岩盤としまりの強い微砂である。自然堆積しているのみで、遺構は確認されなかった。遺物は中世珠洲焼、細片のため図示しなかったが土師器が出土している。

Ｔ20（第15図） 斜面に平行するように設定した幅70㎝、長さ9.5ｍのトレンチである。地山は泥岩の岩盤である。自然堆積しているのみで、遺構は確認されなかった。遺物は細片のため図示しなかったが須恵器が出土している。

Ｔ25（第17図、図版12） 山の傾斜と3段の平坦面の関係を確認するために斜面に直交するように設定した幅１ｍ、長さ15.6ｍのトレンチである。粘質土が何層にも自然堆積している。遺構は図示しなかったが、時代不明の小穴が1基確認された。遺物は須恵器、土師器が出土している。

Ｔ26（第17図、図版12） 斜面に平行するように設定した幅１ｍ、長さ7.5ｍのトレンチである。粘質土が何層にも自然堆積しているのみで、遺構は確認されなかった。遺物は土師器が出土している。

丘陵上平坦面（第17図、図版11） 調査区東部から調査区外にかけて続く整地されたテラス状平坦面である。地表面から10～20㎝掘削すると、岩盤、黄褐色粘質土岩盤混の地山、溝状のしまりの強い微砂層が検出された。中央トレンチの東半分は微砂層である。平面では岩盤と微砂層の境界線が人為的に見えたため遺構かと思われたが遺物が伴わないことから、微砂は地山であると判断した。粘質土・微砂・岩盤が混じっている層は、整地の際に埋められた可能性がある。整地面と伝承されている中世寺院との関連は明らかではない。遺物は土師器が出土している。

第３節　遺物

出土遺物はコンテナで約63箱である。内訳は縄文土器、弥生土器、古代須恵器、古代土師器、中世珠洲焼、中世土師器、土器細片、その他陶磁器、縄文石器、石造物、木製品である。そのうち222点を図示した。

なお中世珠洲焼は吉岡康暢氏の7期編年（吉岡1994）に準拠した。暦年代はⅢ期：13世紀中葉～1270年代、Ⅳ期：1280年代～1370年代、Ⅴ期：1380年代～1440年代、Ⅵ期：1450年代～1470年代と推定されている。

遺物のうち、平成15年度調査で出土した木材17個体・漆器椀1個体については、平成17年８月吉田生物研究所に保存処理と樹種鑑定を委託し、平成18年１月に分析報告を受け、完了した。石器・石造物、種実については、平成17年10月パリノ・サーヴェイ（株）に石材鑑定と種実鑑定を委託し、12月に分析報告を受け、完了した。

（１）Ⅰ地区出土遺物

細片のため図示していないが縄文土器と中世珠洲焼が出土している。

（２）Ⅱ地区出土遺物

旧河道01出土遺物（第19～23図）

１～５は縄文時代後期前葉、前田式に比定される土器片である。１・２は深鉢の底部で、１は無文地の外面に断面三角形の貼り付け突線文を施す。２は縦走する細沈線が引き下される。１・２と同様のものは立山町岩峅野遺跡からも出土しており、「岩峅野式」と言えるかもしれない。３～５は浅鉢の口縁部で、口縁にブリッジを持つ。

６～９は縄文時代後期後葉、井口式から八日市新保式に比定される土器片である。６は浅鉢で、ゆるく内屈する平縁口縁を持ち、頸部に３条の沈線を巡らす。７は口縁を欠損するが、ゆるく内屈する頸部に２条の沈線が確認でき、６と同様のものと考えられる。８は八日市新保式の浅鉢の口縁部で、縄文の施された波頂部が沈線で区画され、その中央に楔形文が施される。９は深鉢の底部である。

10・11は縄文時代晩期中葉、中屋式に比定される土器片である。10は深鉢の口縁部で、縄文が頸部の無文帯で区分されたくの字状口縁を持つ。口唇は交互の斜行する刻みで飾られる。11は口縁を欠損するが、頸部の無文帯の上下に縄文を施しているため、10と同様のものと考えられる。

12・13は縄文時代晩期後葉、下野式に比定される土器片である。12は深鉢の口縁部で、ほぼ直立する口縁を持ち、縦走する条痕が２条の幅広の沈線で切られる。口唇は上部からの押圧で小波状に飾られる。13は浅鉢の口縁部で、眼鏡状隆起帯を持つ。

14～28は粗製土器片である。ただし、旧河道01からは弥生時代後期の天王山式系統の土器が出土しているため、縄文時代晩期以降の条痕文土器が混入している可能性もあるが、判別が困難なため一括して図示している。14・15は縄文時代後期の縄文を施した粗製土器の口縁部である。16～19は縄文時代晩期の条痕を施した粗製土器の口縁部で、口唇は上部からの押圧で小波状に飾られる。20・21は荒い条痕を施す粗製土器の口縁部で、ほぼ直立する平縁口縁を持つ。22～25は条痕を施す粗製土器の口縁部で、ゆるく外傾する平縁口縁を持つ。26・27は条痕を施す粗製土器の底部で、底に網代の圧痕を持つ。28は無文の粗製土器で、底部から直線的に外傾する器形のものである。下部２ヶ所に輪積み痕が確認できる。

30～55は弥生時代後期、天王山式系統の土器に比定される土器片である。東北南部の弥生時代後期標式土器である天王山式土器の特徴として、器形は口縁部が内湾・肥厚し、頸部界がはっきりする。頸部は筒状で胴部界は不明瞭、胴部半ばに最大径を有する。文様帯は上からⅠ・Ⅱa・Ⅱ・Ⅲ文様帯と3あるいは4単位で構成され、Ⅰには上開きの連弧文や交互刺突文、Ⅱaには無文、Ⅱには弧線を組合せた磨消縄文、Ⅲには下開きの連弧文が施される。その他にRL縄文が卓越し、条が縦走ないし横走する。文様の端部を巻き込むように沈線を書き込む。口縁部は段を有するほど明瞭で、口縁部幅が制限されるが、限られた口縁部に特定の文様（上開き連弧文）が施される。Ⅱ文様帯は多様でⅡa文様帯まで発達する個体がある。以上の特徴に当てはまるもの、あるいは胎土が類似するものを図示している。

30は粗製の甕か壷の口縁部である。肥厚させた口縁上端に押圧による交互の列点を施す。下部は磨耗しているが、縄文が横ナデの無文帯で切られる。31～34は粗製の甕の口縁部で、貼りつけた又は折り返した隆帯に棒で右方向から押圧した刻みを施し、下部はLRの縄文帯が頸部の横ナデの無文帯で区画される。33と34は同一個体である。35・36は甕か壷の口縁部である。屈曲して内湾する口縁を持つ。35は口唇に刻みが施され、LRの縄文帯が頸部の段と横ナデの無文帯によって区画される。37・38は粗製の甕の口縁部で、口縁上端の内外面に上部からの刺突による列点を施し、下に1条の沈線を巡らす。37の下部はLRの縄文帯が頸部の段と無文帯によって区画される。39・40は同一個体と思われる甕の体部である。縦位の縄文の上に沈線文やゆるい上開き連弧文が施される。41は甕の体部である。外面は横位のハケメ調整の上からLRの縄文を施し、内面は斜位のハケメ調整が残る。42は精製の甕の口縁部である。口唇に1条の沈線と斜位の細かい刻み目を施し、沈線を挟んで口縁上端から順にLR縄文帯、平行沈線間の交互刺突文、横ナデの無文帯が施される。交互刺突文と段が区画界となる。43は甕の口縁部である。口唇は斜め方向からの交互列点を施し、退化した沈線だろうか、破線状の沈文を口縁界に配し、上端から順に平行沈線間の斜め方向からの交互刺突文、上開きの連弧文を施す。内面は口縁上端に1条の沈線が巡る。44は甕の口縁部で、口唇を上部からの刺突による交互及び反転する刻み目で飾る。内外面にLRの縄文を施す。

45～47は同一個体の壷破片である。口縁は内面のみにLRの縄文が施されるが、頸部の屈曲部から入れ替わるように底部まで縦位に近いLRの縄文が外面全面に施される。底に木葉の圧痕を持つ。48・49は45と同様の壷口縁部である。48の口唇には磨耗しているが斜位の細かい刻み目が残る。50～52は同一個体の壷破片である。頸部下に区画界となる平行沈線間の交互刺突文と1条の沈線を施し、縦走する縄文を地文に2本3条の下開き弧文が引かれる。条間には弧文が上下1対ずつに配される。52は部位は分からないが上開き弧文に反転している。53は壷の底部だろうか、無文である。54は縦走する縄文が施される底部付近の破片である。55はLRの縄文が施される底部である。

56は弥生時代後期、猫橋式に比定される高杯の杯部である。内面は剥落が激しいが、外面はヘラミガキで調整される。

57～63は剥片である。石質は57・58が珪質頁岩、59～63が頁岩である。57は削器だろうか。端部に刃こぼれのような使用痕がある。64は未製品の石鏃だろうか。使用痕はない。石質は赤玉様の流紋岩である。65は凹基無茎石鏃である。石質は珪質頁岩である。66は細身長身の縦形石匙である。先折れしている。石質は珪質頁岩である。

67・68は打製石斧である。67は縄文時代晩期の分銅形のもので、使用痕だろうか刃部は部分的に摩滅している。石質は輝石安山岩である。68は縄文時代晩期の短冊形のもので、石質は火山礫凝灰岩である。

69～71は磨製石斧である。69は縄文時代中期末葉、定角式短冊形のもので、基部を欠損している。石質は輝石安山岩である。70は定角式短冊形のもので、刃部を欠損している。二次利用痕だろうか表裏両面に薄い窪みを持つ。石質は蛇紋岩である。71は定角式撥形の磨製石斧で、刃部が欠損し摩滅が激しい。石質は輝石安山岩である。

72～74は敲石である。72と73は周縁部に敲打痕がみられるもので、74は上下端に敲打痕がみられ、腹部には握痕だろうか窪みを持つものである。石質は72が流紋岩、73が変質凝灰岩、74が砂岩である。

75・76は磨石である。75は周縁部に磨耗痕と敲打痕がみられる。石質はデイサイトである。76は周縁部に磨耗痕が表面に敲打による凹みがみられる。

77・78は凹石である。77は表裏両面に一対の敲打痕がみられ、78は片面にのみ敲打痕がみられる。石質は共に砂岩である。

79～84は礫石錘である。長軸の両端に打ち欠きを持つ。79・80は楕円形のもので、81～84は紡錘形のものである。石質は安山岩・デイサイト・凝灰岩等の火山岩質のものが選択されている。

85～87は砥石である。85・86は片面に複数の溝を持つ筋砥石で、裏面には敲打による凹みがみられる。石質は凝灰質砂岩である。87は欠損しているが、２面に擦痕がみられる。石質は砂岩である。

88は不明石製品である。石棒の頭部だろうか、瘤状にふくらむ形を持つ。石質は砂岩である。

89は玦状耳飾である。半分欠損している。円形の切れ目が細い、古い型である。時期は縄文時代前期前葉から中葉に比定される。主に右方向からの擦痕がみられる。石質は滑石である。

ＳＸ03出土遺物（第19図）

29は埋土から出土した粗製土器の口縁部である。条痕が施され、口唇がゆるく外反する小波状の口縁を持つ。２ヶ所に輪積み痕が確認できる。

ＳＸ05出土遺物（第24図）

90は古代土師器の底部破片である。内面に黒色処理を施す。磨耗が著しいが外面底部に回転糸切り痕が残るか。胎土に海綿骨針を少し含む。外面はにぶい橙色、内面は暗灰黄色を呈する。

91～94は中世珠洲焼である。91・92は壺甕類体部破片である。91は外面に降灰、内面に被熱痕が認められる。Ⅲ～Ⅳ期のものと考えられる。93・94は擂鉢である。93は胎土に海綿骨針を含み粗い。Ⅴ期のものと考えられる。94は内面底部の卸目は磨耗している。外面底部に静止糸切り痕が残る。外面に被熱痕が認められる。胎土に海綿骨針を含みやや粗い。Ⅳ～Ⅴ期のものと考えられる。

95・96は石製品である。95は縄文時代の敲石が中世に転用されたものであろうか。被熱痕が認められる。石質は砂岩である。96は両面に金属で刻んだような溝がある。砥石の未製品であろうか。片面に被熱痕が認められる。石質は頁岩である。

ＳＤ01出土遺物（第24図）

97～99は中世珠洲焼である。97は甕口縁部であるが、ほとんど残存していないため口径は不明である。口縁の形態と胎土が密で叩き目が細かいことからⅢ期のものと考えられる。98は壺甕類体部破片である。99は擂鉢体部破片である。いずれも胎土にわずかに海綿骨針を含み、焼成は良好で灰色を呈する。

ＳＸ02出土遺物（第24図）

100は須恵器の瓶類底部であろうか。焼成は良好で灰色を呈する。

101は中世珠洲焼の壺甕類体部破片である。胎土に海綿骨針を含む。

その他には細片のため図示していないが縄文土器、近世陶磁器が出土している。

包含層他出土遺物（第25図）

102は条痕を施す粗製土器片である。103は弥生時代中期の羽状刺突文を施す甕か鉢の体部である。104と105は同一個体だろうか弥生時代後期、天王山式系統に比定される土器片である。104は甕の口縁部で、口縁は無文だが、頸部割れ口に沈線が確認できる。105は甕の体部で、頸部下に平行沈線間の交互刺突文と上開き連弧文を施す。

106・107は古代須恵器である。106は瓶類底部である。外面底部に回転糸切り痕が残る。高台は貼り付けである。焼成は良好で灰色を呈する。107は双耳瓶の耳部破片である。

108～111は古代土師器である。108は中世土師器皿であるかもしれない。調整は外面が指頭圧痕、内面が横ナデである。胎土にわずかに海綿骨針を含み、橙色を呈する。109は椀である。ロクロ成形で、底部に回転糸切り痕が残る。にぶい橙色を呈する。110は椀底部であろうか。磨耗が著しく、調整は不明である。にぶい黄橙色を呈する。111は甕口縁部破片である。

112～116は中世土師器皿である。112は胎土に海綿骨針を含み、橙色を呈する。13世紀のものと考えられる。113は口縁部に煤が付着しており、器壁が一部剥落している。胎土に海綿骨針を含み、浅黄橙色を呈する。13世紀後半のものと考えられる。114は胎土に海綿骨針を含み、にぶい黄橙色を呈する。中世前半のものと考えられる。112～114の調整は横ナデである。115は胎土に海綿骨針を含み、浅黄橙色を呈する。15世紀前半のものと考えられる。116は浅黄色を呈する。中世後期のものと考えられる。

117～139は中世珠洲焼である。117～120は甕口縁部である。117は口縁が長頸でくの字状に深く屈曲し、端部は丸く収められやや垂下する。肩部が若干張り出す。118はくの字状に屈曲し、肩部の張り出しはない。119は直角に近いくの字状に屈曲し、端部は方頭を呈する。いずれも胎土は密でわずかに海綿骨針を含む。焼成は良好である。120は短頸で直角に屈曲し、端部は方頭を呈する。胎土はやや密で海綿骨針を含む。焼成はやや良好である。口縁形態から、117はⅢ期、118・119はⅣ期、120はⅤ期のものと考えられる。

121～125は壺甕類底部である。外面底部はいずれも砂底である。121・122は細かい叩き目を施す。焼成は良好である。123は底部に横ナデが施されており、叩き目は下端まで達していない。胎土に海綿骨針を含む。焼成は良好だが灰白色を呈する。124の焼成は酸化硬質であり、褐灰色を呈する。125の焼成は良好である。

126～128は壺である。126は口縁基部直下より外面に平行叩きを施す。胎土はやや密である。Ⅳ～Ⅴ期のものであると考えられる。127は内面にロクロ調整痕が、外面底部に静止糸切り痕がよく残ることから壺底部とした。胎土は密である。128は内面にロクロ調整が見られるが、外面底部は調整不明である。胎土はやや粗く砂粒を含む。いずれも焼成は良好である。

129～139は擂鉢である。129の口縁端面はシャープで平直に仕上げられている。卸目は細い波状文である。胎土は密でわずかに海綿骨針を含む。焼成は良好である。Ⅲ期のものであると考えられる。130の口縁端部は三角頭を呈し、内端面に波状文を施す。胎土は密であるが海綿骨針を多く含む。焼成は良

好でやや青灰色を呈する。Ⅴ期のものと考えられる。131は片口鉢である。口縁端部は三角頭を呈し、内端面に波状文を施す。卸目は溝が深く幅広い原体を用いる。胎土に砂粒、海綿骨針を多く含みやや粗い。焼成は良好である。Ⅴ期またはⅥ期のものと考えられる。132の口縁端部は三角頭の内傾口縁が退化したものである。胎土に砂粒、海綿骨針を少し含む。焼成は良好である。Ⅴ期のものと考えられる。133～135は体部破片である。133は卸目に2.3㎝幅に7条の原体を用いる。内外面とも被熱痕が認められる。胎土に砂粒、海綿骨針を含みやや粗い。焼成はやや良好で灰白色を呈する。134は卸目に2.3㎝幅に8条の原体を用いる。内外面に被熱痕が認められる。胎土は密でわずかに海綿骨針を含む。焼成はやや良好である。135の胎土は密でわずかに砂粒、海綿骨針を含む。焼成は良好である。136は底部の卸目は磨耗している。外面底部に静止糸切り痕が残る。胎土はわずかに砂粒、海綿骨針を含む。焼成は良好である。137は卸目に2.9㎝幅に12条の原体を用いる。外面底部に静止糸切り痕が残る。胎土は密である。焼成は良好で堅緻に焼締められている。Ⅳ～Ⅴ期のものと考えられる。138は磨耗が著しく卸目と静止糸切り痕はかすかに確認できる。胎土はわずかに砂粒、海綿骨針を含む。焼成は不良で軟質、灰白色を呈する。Ⅳ～Ⅴ期のものと考えられる。139に卸目は確認できないが内面底部が磨かれてなめらかになっていることから鉢底部とした。外面底部に静止糸切り痕が残る。胎土はやや密で砂粒、海綿骨針を少し含む。焼成はやや良好である。Ⅴ～Ⅵ期のものと考えられる。なお、136と138は、文化振興財団の試掘（T12）出土遺物と同一個体であるかもしれない。

140は越前焼の甕底部である。内外面底部に付着しているのは漆であろうか。内面底部に砂粒が多く付着している。胎土は灰白色で内外面は鉄釉がかかり暗褐色を呈する。15～16世紀のものと考えられる。

141は青磁の壺か碗であると考えられる。肩に段が認められる。

142は中国製白磁碗あるいは肥前系磁器碗であろうか。

143は染付皿であろうか。16世紀のものと考えられる。

144は香炉である。外面はにぶい橙色、内面は明赤褐色を呈する。中世か近世のものである。

145は近世越中瀬戸焼の擂鉢破片である。卸目はかすかに3条のみ確認できる。胎土は粗く砂粒を多く含み浅黄橙色、内外面はにぶい赤褐色を呈する。17世紀のものと考えられる。

146・147は唐津焼皿である。147は体部がやや内湾しながら立ち上がり、口縁部が一度外に折れて、さらに端部が内湾して短く立ち上がる。胎土はにぶい橙色で白色の釉を施す。17世紀前半のものと考えられる。

148～150は石器である。148は剥片であり、石質は珪質頁岩である。149は打製石斧である。基部を欠損しているが撥形のものである。石質は砂岩である。150は磨製石斧である。縄文時代中期末葉の定角式短冊形もので、基部と刃部を欠損している。石質はドレライトである。

151・152は石製品である。時代は不明である。151は金属用の砥石であろうか。石質は流紋岩である。152は砥石であろうか。平たくすべすべの面がある。石質は輝石安山岩である。

（3）Ⅲ地区出土遺物

土塁状道出土遺物（第27図）

153・155・156は古代須恵器である。153は瓶類底部である。遺構面直上から出土した。胎土は密であり、焼成は良好でやや青灰色を呈する。155・156は体部破片である。156は外面に平行叩き痕、内面に同心円状当て具痕が残る。どちらも胎土は密であり、焼成は良好で灰色を呈する。

157・158は中世土師器皿である。どちらも調整は横ナデである。胎土は密で海綿骨針を少し含む。焼成は良好で橙色を呈する。15世紀前半のものと考えられる。

159・161は中世珠洲焼である。159は壺甕類体部破片である。胎土は密であるが海綿骨針を多く含む。焼成は良好でやや青灰色を呈する。Ⅳ期のものと考えられる。161は鉢底部破片である。遺構面直上から出土した。胎土は砂粒を少し含む。焼成はやや良好で灰色を呈する。

162は砥石であろうか。石質は砂岩である。

トレンチ出土遺物（第27図）

154はＴ6から出土した。古代須恵器の横瓶破片であろうか。外面はカキメ調整である。胎土は密であり、焼成は良好で灰色を呈する。

160はＴ5から出土した。中世珠洲焼の鉢口縁部破片である。胎土はやや密で海綿骨針を少し含む。焼成はやや不良で灰白色を呈する。Ⅳ期のものであると考えられる。

（4）平成16年度調査区出土遺物

土塁状道出土遺物（第28図）

163～169は古代須恵器である。163・164は双耳瓶体部破片である。163は耳部が欠損しているが、痕跡が確認できる。外面に自然釉がかかる。164は耳部の一部が残存している。どちらも焼成は良好で灰色を呈する。165は瓶類底部である。166は壺甕類肩部である。外面に格子状叩き痕、内面に同心円状当て具痕が残る。胎土はやや密で砂粒を含む。どちらも焼成は良好で灰色を呈する。167～169は体部破片である。168・169は外面に縄目状叩き痕が残る。いずれも焼成は良好で灰色を呈するが、169の外面は降灰のためオリーブ黒色を呈する。

170～173は土師器である。170・171は口縁部、172・173は底部であるが、細片のため古代か中世かは不明である。170・172は土塁上から出土した。胎土は密で171以外は海綿骨針を含む。いずれも橙色を呈する。

174・175は中世珠洲焼の擂鉢破片である。175の卸目は確認できない。どちらも砂粒、海綿骨針を少し含む。焼成は良好で灰色を呈する。

176は八尾焼の体部破片である。土塁盛土直上から出土した。調整は外面は板状工具によるかき上げ痕、内面は横ナデであるが一部に指頭圧痕を残す。胎土は灰色で内面はにぶい黄褐色を呈し、外面に灰オリーブ色の釉がかかる。焼成は堅緻に焼締められている。

177は五輪塔火輪である。ＳＸ11上から出土した。石灰質砂岩であり、非常にもろく砂粒が剥落するため、残存しているのは幅16.2㎝、高さ7.6㎝である。15世紀のものであろうか。

トレンチ他出土遺物（第28図）

178・179は古代須恵器である。178はＴ18から出土した。甕口縁部である。焼成は良好で灰色、外面は降灰のため黒色を呈する。179はＴ12から出土した。体部破片である。外面に平行叩き痕、内面に同心円状当て具痕が残る。焼成は良好で灰色を呈する。

180～182は古代土師器椀である。180はＴ26から出土した。胎土はわずかに砂粒を含む。焼成はやや不良で軟質、橙色を呈する。181はＴ25から出土した。椀か小型甕底部である。回転糸切り痕がよく残

る。焼成は良好でにぶい黄橙色を呈する。182はＴ25から出土した。黒色土器有台椀である。内面はミガキ後黒色処理を施す。高台は貼り付けである。焼成は良好で外面は浅黄色を呈する。

183は丘陵上平坦面から出土した。中世土師器皿であろうか。胎土は密で海綿骨針を少し含む。焼成はやや不良で橙色を呈する。

184は須恵器か珠洲焼であろうか。Ｔ25から出土した。内面に平行押圧痕が認められる。

185・186は中世珠洲焼の体部破片である。185はＴ25から出土した。胎土は密でわずかに海綿骨針を含む。焼成は良好で灰色を呈する。186はＴ19から出土した。細密な叩きが施される。胎土はわずかに砂粒を含み、焼成は良好で堅緻に焼締まっている。Ⅲ～Ⅳ期の骨壺であろうか。

187は古瀬戸平碗である。浅黄色の灰釉がかかる。15世紀前半のものであると考えられる。

188は不明土製品である。七輪五徳か、脚か、小型行火であろうか。煤が付着している。中世か近世のものであろう。

189はＴ22から出土した。不明石製品である。地山の泥岩をハケ状工具で加工したものであろうか。

（５）木製品

ＳＸ05出土遺物（第29・30図）

190・191は杭であろうか。190は長さ約135㎝である。大きく反っており歪である。191は87㎝遺存している。どちらも節を落とし先端部のみ削って加工を加えている。上半分は炭化している。樹種はどちらもマツ属である。

192・193は加工木である。どちらも先端に加工痕が残り、上部は欠損している。192は全体が、193は一部炭化している。樹種は192がケヤキ、193はカキノキ属である。

194は弓状木製品である。漁労具のタモ枠であろうか。直径1.5㎝以上、長さ190㎝の木をたわめて整形し、直径75㎝ほどの弓状に加工している。直径2.5㎝以上ある部分については、削って細く整形している。両先端にＶ字状の切り込みを施している。明確ではないが、他2ヶ所に切り込みが施されている可能性がある。細い方の先端は切り落とされているのに対し、太い方の先端は削られ尖っている。樹種はカヤである。

195は円形板の部材であろうか。一方には円孔が穿たれる。他方にも円孔があった可能性がある。樹種はアスナロ属である。

196は櫂であろうか。水かきは20㎝以上、柄は35㎝以上のものであるが、水かき3分の1と柄の上部は欠損している。水かきの先端は片面を多く削って薄くしている。柄も丁寧に削って整形している。樹種はクリである。

包含層出土遺物（第30図）

197は漆椀である。底径4.6㎝を測る。高台は１㎝なく、器高は低いものと思われる。内外面とも黒色漆塗りである。内面は赤色漆で文様が描かれているが、欠損しており判読できない。樹種はブナ属である。

198は円形板材である。非常に薄いが、孔のような加工痕が認められる。樹種はアスナロ属である。

199は板材である。長さ11㎝、幅５㎝である。反っている。樹種はスギである。

200は加工木である。先端に削った加工痕が残り、上部は欠損している。一部炭化している。樹種はトネリコ属である。

ＳＸ05周辺木杭（第31図）

201は上部が欠損している。先端を削って尖らせている。残存している部分のうち3ヶ所に7cmほどの切り込みがある。樹種はマツ属であることから、簡易的な梯子であった可能性がある。

202は上部が欠損している。先端を削って尖らせている。203は上部も下部も欠損している。細いキザミらしきものが認められる。大部分が炭化している。204の上部は一方から切られたような痕跡があるが、下部は欠損していると思われる。205の上部は欠損、下部は一方から切られたような痕跡がある。欠損口の部分に炭化が認められる。206は腐敗が著しい。上部は一方から切られたような痕跡があり、下部は少し削って尖らせてあるが、細くなっているのは、加工であるのか欠損であるのか不明である。一部表面を削って平らにしてある。207も腐敗が著しい。上部は欠損、下部は少し削って尖らせてある。一部表面を削って断面方形にしてある。いずれも樹種はクリである。

樹種より、201以外は同時性が考えられる。

（6）石造物

五輪塔集積地（第32・33図）

集積地から17点とりあげたが、内２点は風化が激しかったため、残りの15点を図示している。すべて五輪塔の部材であった。磨耗しているのか梵字が彫られたものは認められなかった。

208～216は空風輪である。208は空風輪の残欠で、宝珠のみが残る。209・210は宝珠が丸みを帯び、磨耗しているのか頂部のつまみはない。宝珠と請花の間のくびれはややゆるく、そのため請花上端の屈折はゆるい。211・212は宝珠がつぶれた球形を成し、頂部にはつまみの跡が残る。宝珠と請花の間は強くくびれ、請花の半球形はしっかりと形作られる。212は底部に足を持たず、逆に刳られた凹みを持つ。213～216は簡略化が進み、瓢箪形になったものである。213・214は形骸化した頂部のつまみと底部の足がみられる。216は磨耗しているが、円形の線刻が残る。成形痕がくびれ部に残るものがあり、209・213は敲打後の横方向の削り痕がみられ、212・215は横方向の削り痕のみがみられる。

217～219は火輪である。217は厚い軒口を持ち、軒反りする。218は器高に比べた軒口は薄く、軒反りもゆるい。底面中央がやや盛り上がる。219は軒口が薄く、軒反りはゆるい。

220・221は水輪である。楕円球形の上下端を切り取った形であり、最大径がほぼ中位にくる。

222は地輪である。一部欠損しているが方形を成す。上面はほぼ四角に刳り貫かれ、支えだろうか隅は刳り残されている。

石質は通称「やぶた石」と呼ばれる微粒砂岩（流紋岩質凝灰岩）のものが、208・209・210・212・214・216・219・220・222の９点、やや粗粒の砂岩（凝灰質砂岩）のものが、213・215・217・218の４点、灰白色の粗粒砂岩（軽石質凝灰岩）のものが211の１点、灰黄色の粗粒砂岩（凝灰質礫岩）が221の１点であった。全体に15世紀後半の形態を持つようである。

第4章　まとめ

調査で得られた見解を整理しまとめにかえたい。

1．土塁状道について

同様の遺構例が少なく、推測の域を出ないが、土塁は掻揚で構築されており、土塁直上や道覆土から14～15世紀の遺物が出土したことから、中世後半に築かれた遺構と考える。当初は麓から南東方向に直線的に伸びていたが、ある時期に中腹で北東方向へクランク状に二段に曲げられ、道幅も狭められるなど防御性が高められたと思われる。笹生衛氏の研究、中世寺院遺跡の分類と変遷（笹生　2005）によると14～15世紀はⅣ期・中世寺院変質期にあたり、類型化されたモデルのC類型（村や宿市の寺堂・墓堂）やB－3類型（居館・城郭付属氏寺・堂）が明確に確認できる段階である。正保寺遺跡には隣接して中世の山城、飯久保城があり、また土塁状道の規模・構造から考えるに、遺跡はB－3類型（居館・城郭付属氏寺・堂）に類すると思われる。しかし、飯久保城の主郭部からは16世紀後半を主体とする土師器皿・染付碗等が出土しており（氷見市教　2003）、また城主である狩野氏が文献に初出するのが永禄3年（1560）のものとされる書状であることから、遺物の時期とはズレがあり、実際に飯久保城に付属する寺院であるという確証はない。調査区が丘陵上の主体部に及んでいないため、以上が限界である。

2．五輪塔について

15世紀後半の形態を持つと考えられる。現代に二次的に集積され、安置されていたため、元位置は不明である。飯久保城跡の最高所にも中世石造物が3点安置されているが、やはり同様に15世紀後半の形態を持つもので、二次的に集積されたようである（氷見市教　前掲）。いずれも元々安置されていたのは、丘陵上の二面の平坦面、その上面の二箇所に石造物集積地があるため、その周辺だろうか。

ちなみに直線距離で約800m西にある鞍骨岩屋遺跡には洞窟状の岩屋に14の龕が刳られ、14世紀後半～15世紀前半のものと見られる一石一尊仏が4体安置されている。

3．SX05について

注目するのは、タモ枠とみられる弓状木製品（194）と櫂（196）がセットで出土した事である。調査区西側には仏生寺川が流れており、舟で川を下り、海か潟湖において漁を行っていたことが推測される。

SX05出土木製品の杭には被熱痕が認められるが、その他の木製品には被熱痕は認められないという傾向がある。

土塁状道と時期はほぼ一致するが、丘陵上の中世寺院と関連があったかは不明である。

4．古代の遺物について

出土した須恵器は、壺甕類、瓶類であり、蓋、杯といった食膳具は出土しなかった。体部破片が多くその器形全体を窺える資料はないため、須恵器では帰属時期を比定する事ができない。土師器では、黒色土器有台椀（182）が出土している。1点だけでは十分ではないが、10世紀のものと考えられる。

帰属時期は、食膳具が土師器に移行していることから、10世紀以降と推定されるが、古代の遺構は認められず、土塁状道直上の覆土からも出土しているため、丘陵上のどこかに遺跡があって、崩れたものが、流土に含まれていると考えられる。

5．天王山式系統の土器について

図示したのは同一個体片を含め36点だが、図示しなかった細片を含めると比較的まとまった数が出土した。図示したものと天王山式土器との共通点として、口縁部が内湾する形態や筒状の頸部、区画界と

なる交互刺突文、体部の連弧文、縦走する地文の縄文等がある。しかし、口縁部が直線的に外傾する形態や口縁上端の押圧による飾り、口縁部に上開き連弧文や体部に磨消縄文がみられない、地文の主体はＬＲ縄文である等の相違点が目立ち、唯一全体の器形が推定できる壷（45～47）が天王山式土器ではみられない器形をしていることも異なる。

県内ではこれまで天王山式系統の土器が出土した遺跡として13遺跡が確認されている（福岡町教　2003）が、まとまった点数出土している高岡市間尽（頭川）遺跡（上野　1974）と高岡市（福岡町）下老子笹川遺跡（福岡町教　1998）のものと比較してみると、口縁部に上開き連弧文や交互刺突文がほとんど施文されない、重菱形文がみられない、地文の主体がＬＲ縄文である等の相違点がある。

以前より県内の天王山式系統の土器と共通点があるとされている新潟県村上市砂山遺跡（滝沢・野田ほか　2003）出土のものと比較してみると、天王山式直前期とされる砂山３群の土器に口縁部の形態や施文される文様、約半分程度の割合で地文にＬＲ縄文が施されるなどの共通点が見出せる。そこで当遺跡の天王山式系統の土器の主体は砂山３群並行期のものではないだろうかと考える。ただやはり口縁部に上開き連弧文や交互刺突文がほとんど施文されないことや重菱形文がみられないという相違点はあり、それが地域差や遺物の時間幅によるものなのかは不明である。

なお砂山３群は北陸の土器型式では戸水Ｂ式～猫橋式並行期であるとされるが、旧河道01から猫橋式に比定する高杯（56）が１点出土している。

６．ＳＸ03種実について

ＳＸ03からは木本類の種実が大量に出土したが、堅く残りやすいものが多く、その組成は偏っている可能性がある（自然科学分析を参照）。ただその上で組成をみてみるとトチノキの種子が220点強と検出した種実の約90％を占め、選択されて集められた可能性も捨てられない。ＳＸ03からは縄文時代晩期と考えられる粗製土器片（29）が１点出土している。

７．石匙・耳飾について

旧河道01から出土した細身長身の縦型石匙は、縄文時代早期～前期の北海道・東北地方北部に特徴的な当地域では稀な遺物である。石質も珪質頁岩と遺跡周辺では採取できない石材（自然科学分析を参照）であり他地域からの搬入品であると考える。また玦状耳飾は縄文時代前期前葉～中葉の完成品で石質はやはり周辺では採取できない滑石（分析参照）である。同様のものは縄文時代前期前葉の上市町極楽寺遺跡から未成品・滑石の原石を含め大量に出土しているためこの地域からの搬入品ではないかと考える。

旧河道01の遺物の主体は縄文時代晩期および弥生時代中期～後期のものであり、縦型石匙・玦状耳飾と同時期の遺物が共伴しないため、性格は不明である。混入したものだろうか。

今回の調査成果が、今後の調査、研究につながることを期待する。

引用・参考文献

上野章 1974 「高岡市頭川遺跡」 『大境』 第5号 富山考古学会
内田亜紀子 2003 「富山県の黒色土器（２）」 『富山考古学研究』 第6号 富山県文化振興財団
柿田祐司 2001 「須恵器の叩き目から」 『北陸古代土器研究』 第9号 北陸古代土器研究会
金沢市埋蔵文化財センター 1998 『上荒屋遺跡Ⅲ』 金沢市文化財紀要140

島地謙・伊東隆夫 1988 『日本の遺跡出土木製品総覧』 雄山閣出版
九州近世陶磁学会 2000 『九州陶磁の編年－九州近世陶磁学会10周年記念－』
笹生衛 2005 『神仏と村景観の考古学』 弘文堂
佐原真編 1983 『弥生土器Ⅱ』ニュー・サイエンス社
滝沢規朗・野田豊文 2003 「新潟県岩船郡域における弥生時代中期～後期にかけての様相－村上市砂山遺跡・滝ノ前遺跡を中心に－」 『三面川流域の考古学』 第2号 奥三面を考える会
中世土器研究会編 1995 『概説中世の土器・陶磁器』 真陽社
富山県教育委員会 1976 『富山県立山町　岩峅野遺跡緊急発掘調査概要』
富山県文化振興財団 1996 『梅原胡摩堂遺跡発掘調査報告（遺物編）』 埋蔵文化財発掘調査報告第7集
富山県文化振興財団 1998 『五社遺跡発掘調査報告』 埋蔵文化財発掘調査報告第9集
富山県文化振興財団 2003 『能越自動車道関連 埋蔵文化財包蔵地試掘調査報告』 埋蔵文化財発掘調査報告第20集
富山県文化振興財団 2003 『埋蔵文化財調査概要－平成14年度－』
富山県文化振興財団 2005 『大規模発掘調査の速報展　古代のかたりべ』
奈良国立文化財研究所 1985 『木器集成図録　近畿古代篇』 奈良国立文化財研究所史料第27冊
新潟県埋蔵文化財調査事業団 2002 『中条黒川バイパス関係発掘調査報告書　蔵ノ坪遺跡』 新潟県埋蔵文化財調査報告書第115集
能都町教育委員会・真脇遺跡発掘調査団 1986 『真脇遺跡（本編）』
氷見市 2002 『氷見市史』 7 資料編5 考古
氷見市教育委員会 1985 『藪田薬師中世墓発掘調査報告書』
氷見市教育委員会 2001 『氷見の山城』
氷見市教育委員会 2003 『飯久保城跡』氷見市埋蔵文化財調査報告第38冊
氷見市教育委員会 2003 『氷見市埋蔵文化財分布調査報告（丘陵地区）Ⅲ』 氷見市埋蔵文化財調査報告第39冊
氷見市教育委員会 2004 『氷見市埋蔵文化財分布調査報告（丘陵地区）Ⅳ』 氷見市埋蔵文化財調査報告第40冊
氷見市教育委員会 2005 『鞍川中Ａ遺跡　鞍川バイパス遺跡群発掘調査報告Ⅰ』 氷見市埋蔵文化財調査報告第41冊
氷見市教育委員会 1993 『氷見の指定文化財ハンドブック』
氷見市立博物館 2005 『水辺の人びと－布勢水海の歴史をさぐる－』
婦中町教育委員会 2003 『南部Ⅰ遺跡発掘調査報告Ⅲ』
福岡町教育委員会 1998 『下老子笹川遺跡発掘調査報告書』 福岡町埋蔵文化財報告書第7冊
福岡町教育委員会 2003 『上野Ａ遺跡発掘調査報告Ⅱ』
藤田富士夫 1992 『玉とヒスイ　環日本海の交流をめぐって』 同朋舎出版
北陸中世土器研究会編 1997 『中・近世の北陸　考古学が語る社会史』 桂書房
宮田進一 1997 「越中瀬戸の変遷と分布」『中・近世の北陸　考古学が語る社会史』 桂書房
湯尻修平 1983 「柴山出村式土器について」『北陸の考古学』 石川考古学研究会
吉岡康暢 1994 『中世須恵器の研究』 吉川弘文館

氷見市正保寺遺跡出土木製品の樹種調査結果

（株）吉田生物研究所

1. 試料

試料は氷見市正保寺遺跡から出土した漁撈具1点、容器1点、建築部材3点、土木材13点、用途不明品14点の合計32点である。

2. 観察方法

剃刀で木口（横断面）、柾目（放射断面）、板目（接線断面）の各切片を採取し、永久プレパラートを作製した。このプレパラートを顕微鏡で観察して同定した。

3. 結果

樹種同定結果（針葉樹4種、広葉樹7種）の表と顕微鏡写真を示し、以下に各種の主な解剖学的特徴を記す。

1）イチイ科カヤ属カヤ（*Torreya nucifera* Sieb. et Zucc.）

（遺物No.5,6）　（写真No.5,6）

木口では仮道管を持ち、早材から晩材への移行は緩やかであった。晩材部は狭く年輪界は比較的不明瞭である。軸方向柔細胞を欠く。柾目では放射組織の分野壁孔はヒノキ型で1分野に1～4個ある。仮道管の壁には対になった螺旋肥厚が存在する。板目では放射組織はすべて単列であった。カヤは本州（中・南部）、四国、九州に分布する。

2）マツ科マツ属［二葉松類］（*Pinus* sp.）

（遺物No.7～10,13,17,18）　（写真No.7～10,13,17,18）

木口では仮道管を持ち、早材から晩材への移行は急であった。大型の垂直樹脂道が細胞間隙としてみられる。柾目では放射組織の放射柔細胞の分野壁孔は窓型である。上下両端の放射仮道管内は内腔に向かって鋸歯状に著しくかつ不規則に突出している。板目では放射組織は単列で1～15細胞高のものと、水平樹脂道を含んだ紡錘形のものがある。マツ属［二葉松類］はクロマツ、アカマツがあり、北海道南部、本州、四国、九州に分布する。

3）スギ科スギ属スギ（*Cryptomeria japonica* D.Don）

（遺物No.1）　（写真No.1）

木口では仮道管を持ち、早材から晩材への移行はやや急であった。樹脂細胞は晩材部で接線方向に並んでいた。柾目では放射組織の分野壁孔は典型的なスギ型で1分野に1～3個ある。板目では放射組織はすべて単列であった。樹脂細胞の末端壁はおおむね偏平である。スギは本州、四国、九州の主として太平洋側に分布する。

4）ヒノキ科アスナロ属（*Thujopsis* sp.）

（遺物No.15,16）　（写真No.15,16）

木口では仮道管を持ち、早材から晩材への移行は緩やかであった。樹脂細胞は晩材部に散在または接線配列である。柾目では放射組織の分野壁孔はヒノキ型からややスギ型で1分野に2～4個ある。板目では放射組織はすべて単列であった。数珠状末端壁を持つ樹脂細胞がある。アスナロ属にはアスナロ（ヒバ、アテ）とヒノキアスナロ（ヒバ）があるが顕微鏡下では識別困難である。アスナロ

属は本州、四国、九州に分布する。

5）カバノキ科クマシデ属（*Carpinus* sp.）

（遺物No.25,26）　（写真No.25,26）

散孔材である。木口では小さい道管（～140μm）が2～5個放射状、塊状に複合して分布している。幅の広い集合放射組織がある。軸方向柔組織は不規則な線状である。柾目では道管は単穿孔、階段穿孔と螺旋肥厚を有する。放射組織は平伏細胞からなる同性と平伏、方形細胞からなる異性である。板目では放射組織は1～5細胞列、高さ～950μmからなる。クマシデ属はクマシデ、イヌシデ等があり、北海道、本州、四国、九州に分布する。

6）カバノキ科ハンノキ属ヒメヤシャブシ（*Alnus pendula* Matsumura）

（遺物No.29～32）　（写真No.29～32）

散孔材である。木口では中庸の道管（～120μm）が2～5個放射方向に複合して分布している。軸方向柔細胞は不顕著である。柾目では道管は階段穿孔と側壁に交互壁を有する。放射組織は平伏細胞からなり同性である。道管放射組織間壁孔は小型である。板目では放射組織は単列、高さ～600μmからなる。ヒメヤシャブシは北海道、本州、四国に分布する。

7）ブナ科ブナ属（*Fagus* sp.）

（遺物No.3）　（写真No.3）

散孔材である。木口ではやや小さい道管（～110μm）がほぼ平等に散在する。年輪の内側から外側に向かって大きさおよび数の減少が見られる配列をする。放射組織には単列のもの、2～3列のもの、非常に列数の広いものがある。柾目では道管は単穿孔と階段穿孔を持ち、内部には充填物（チロース）が見られる。放射組織は大体平伏細胞からなり同性である。道管放射組織間壁孔には大型のレンズ状の壁孔が存在する。板目では放射組織は単列、2～3列、広放射組織の3種類がある。広放射組織は肉眼でも1～3mmの高さを持った褐色の紡錘形の斑点としてはっきりと見られる。ブナ属はブナ、イヌブナがあり、北海道(南部)、本州、四国、九州に分布する。

8）ブナ科クリ属クリ（*Castanea crenata* Sieb. et Zucc.）

（遺物No.4,19～24,27,28）　（写真No.4,19～24,27,28）

環孔材である。木口では円形ないし楕円形で大体単独の大道管（～500μm）が年輪にそって幅のかなり広い孔圏部を形成している。孔圏外は急に大きさを減じ薄壁で角張った小道管が単独あるいは2～3個集まって火炎状に配列している。柾目では道管は単穿孔と多数の有縁壁孔を有する。放射組織は大体において平伏細胞からなり同性である。板目では多数の単列放射組織が見られ、軸方向要素として道管、それを取り囲む短冊型柔細胞の連なり（ストランド）、軸方向要素の大部分を占める木繊維が見られる。クリは北海道（西南部）、本州、四国、九州に分布する。

9）ニレ科ケヤキ属ケヤキ（*Zelkova serrata* Makino）

（遺物No.14）　（写真No.14）

環孔材である。木口ではおおむね円形で単独の大道管（～270μm）が1列で孔圏部を形成している。孔圏外では急に大きさを減じ、多角形の小道管が多数集まって円形、接線状あるいは斜線状の集団管孔を形成している。軸方向柔細胞は孔圏部では道管を鞘状に取り囲み、さらに接線方向に連続している（イニシアル柔組織）。放射組織は1～数列で多数の筋として見られる。柾目では大道管は単穿孔と側壁に交互壁孔を有する。小道管はさらに螺旋肥厚も持つ。放射組織は平伏細胞と上下

縁辺の方形細胞からなり異性である。方形細胞はしばしば大型のものがある。板目では放射組織は少数の 1～3 列のものと大部分を占める 6～7 細胞列のほぼ大きさの一様な紡錘形放射組織がある。紡錘形放射組織の上下端の細胞は、他の部分に比べ大型である。ケヤキは本州、四国、九州に分布する。

10) カキノキ科カキノキ属（*Diospyros* sp.）

(遺物No. 11, 12)　　(写真No. 11, 12)

散孔材である。木口ではやや大きい道管（～200μm）が単独ないし２～４個放射方向に複合している。道管の接合している壁は厚くなっている。分布数は少ない。軸方向柔細胞は顕著で接線状、網状に配列している。柾目では道管は単穿孔と側壁に多数の小壁孔を有する。道管内腔には着色物質がみられる。放射組織は平伏と直立細胞からなり異性である。板目では放射組織は１～２細胞列、高さ～500μmからなる。放射組織、木繊維とも階層状に配列しており、肉眼的に微細な縞模様（リップルマーク）としてみられる。カキノキ属はヤマガキ、カキ、シナノガキがあり、本州(西部)、四国、九州、琉球に分布する。

11) モクセイ科トネリコ属(*Fraxinus* sp.)

(遺物No. 2)　　(写真No. 2)

環孔材である。木口では大道管(～400μm)が単～数列で孔圏部を形成している。孔圏外では厚壁の小道管が単独ないし 2～4 個放射方向に複合して散在している。軸方向柔細胞は顕著で周囲状、翼状、連続翼状に配列している。柾目では導道管は単穿孔と多数の壁孔を有する。放射組織は平状細胞からなり同性である。板目では放射組織は 1～4 細胞列、高さ～400μm からなる。トネリコ属はシオジ、ヤチダモ等があり、北海道、本州、四国、九州に分布する。

◆参考文献◆

島地 謙・伊東隆夫 「日本の遺跡出土木製品総覧」 雄山閣出版 (1988)

島地 謙・伊東隆夫 「図説木材組織」 地球社 (1982)

伊東隆夫 「日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅰ～Ⅴ」 京都大学木質科学研究所 (1999)

北村四郎・村田 源 「原色日本植物図鑑木本編Ⅰ・Ⅱ」 保育社 (1979)

深澤和三 「樹体の解剖」 海青社 (1997)

奈良国立文化財研究所 「奈良国立文化財研究所 史料第27冊 木器集成図録 近畿古代篇」(1985)

奈良国立文化財研究所 「奈良国立文化財研究所 史料第36冊 木器集成図録 近畿原始篇」(1993)

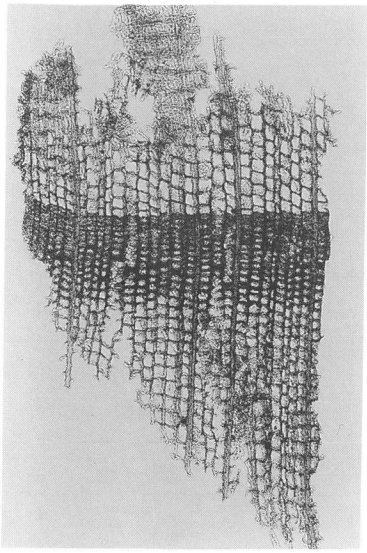
◆使用顕微鏡◆

Nikon

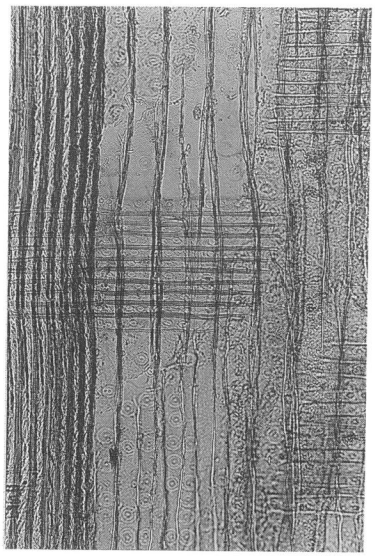
MICROFLEX UFX-DX Type 115

氷見市正保寺遺跡出土木製品同定表

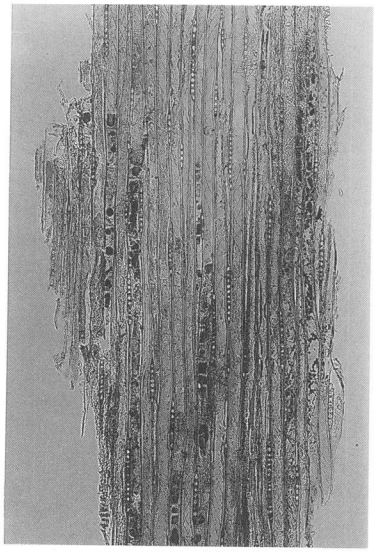
No.	実測 No.	品名	樹種
1	199	板	スギ科スギ属スギ
2	200	不明木材	モクセイ科トネリコ属
3	197	漆椀	ブナ科ブナ属
4	196	櫂	ブナ科クリ属クリ
5	194	弓状木製品	イチイ科カヤ属カヤ
6	194	弓状木製品	イチイ科カヤ属カヤ
7	190	木杭	マツ科マツ属〔二葉松類〕
8	190	木杭	マツ科マツ属〔二葉松類〕
9	190	木杭	マツ科マツ属〔二葉松類〕
10	190	木杭	マツ科マツ属〔二葉松類〕
11	193	不明木材	カキノキ科カキノキ属
12	193	不明木材	カキノキ科カキノキ属
13	191	不明木材	マツ科マツ属〔二葉松類〕
14	192	木杭	ニレ科ケヤキ属ケヤキ
15	195	板	ヒノキ科アスナロ属
16	198	板	ヒノキ科アスナロ属
17	201	木杭	マツ科マツ属〔二葉松類〕
18	201	木杭	マツ科マツ属〔二葉松類〕
19	202	木杭	ブナ科クリ属クリ
20	203	木杭	ブナ科クリ属クリ
21	204	木杭	ブナ科クリ属クリ
22	205	木杭	ブナ科クリ属クリ
23	206	木杭	ブナ科クリ属クリ
24	207	木杭	ブナ科クリ属クリ
25	樹種サンプル No.1	木材片	カバノキ科クマシデ属
26	樹種サンプル No.1	木材片	カバノキ科クマシデ属
27	樹種サンプル No.2	木材片	ブナ科クリ属クリ
28	樹種サンプル No.2	木材片	ブナ科クリ属クリ
29	樹種サンプル No.3	木材片	カバノキ科カバノキ属ヒメヤシャブシ
30	樹種サンプル No.3	木材片	カバノキ科カバノキ属ヒメヤシャブシ
31	樹種サンプル No.4	木材片	カバノキ科カバノキ属ヒメヤシャブシ
32	樹種サンプル No.4	木材片	カバノキ科カバノキ属ヒメヤシャブシ



木口×40

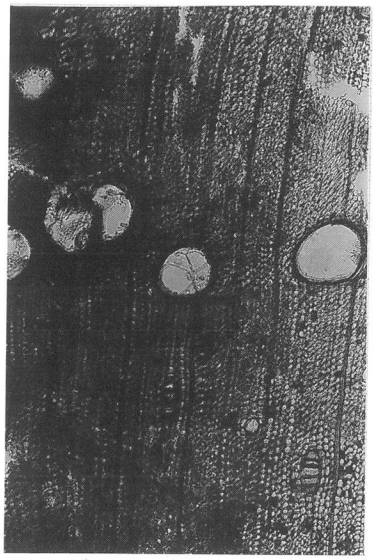


柾目×100

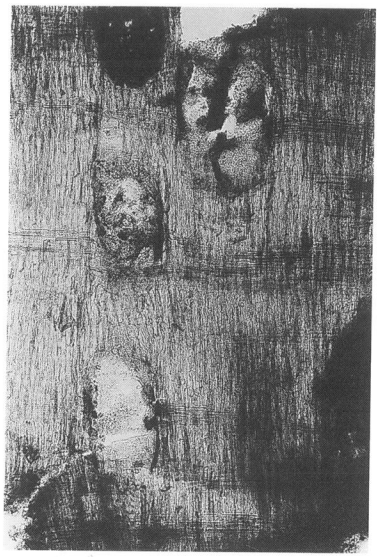


板目×40

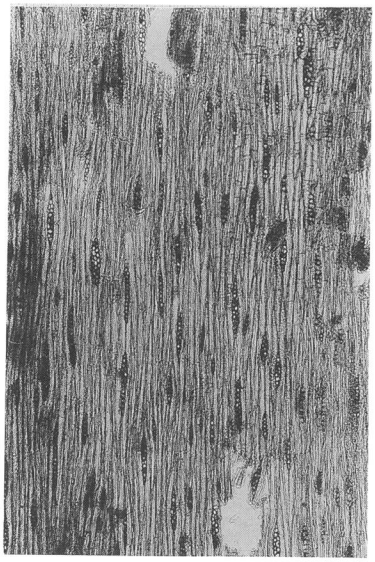
No-1　スギ科スギ属スギ



木口×40

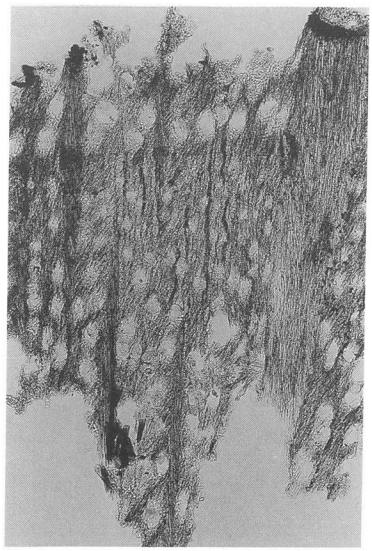


柾目×40

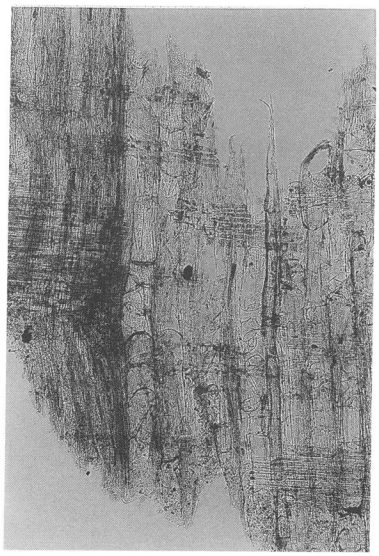


板目×40

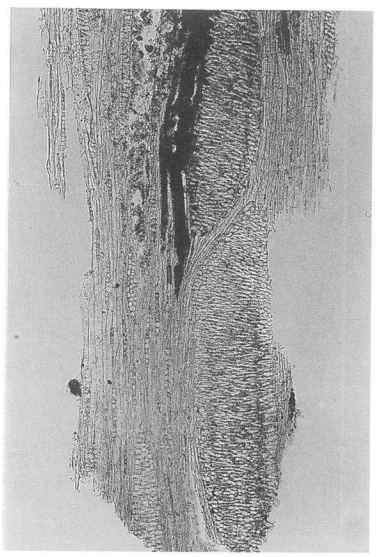
No-2　モクセイ科トリネコ属



木口×40

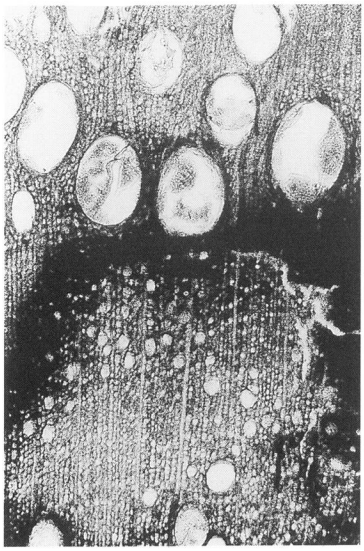


柾目×40

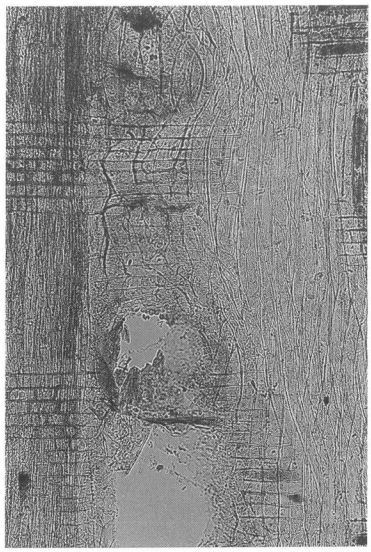


板目×40

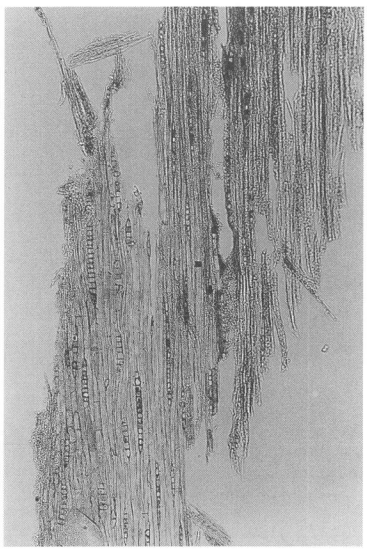
No-3　ブナ科ブナ属



木口×40

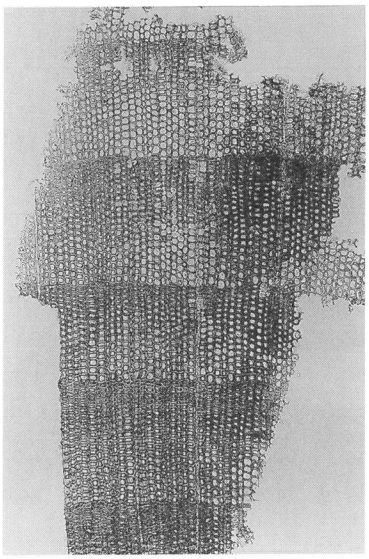


柾目×100

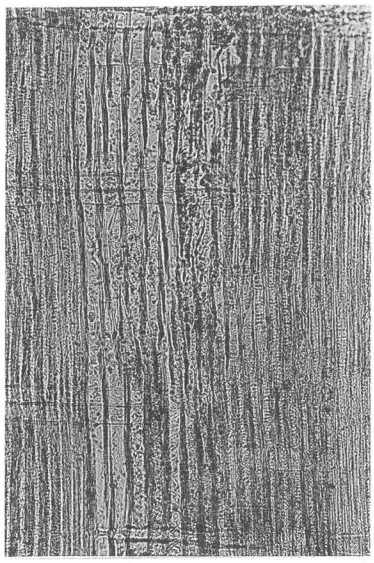


板目×40

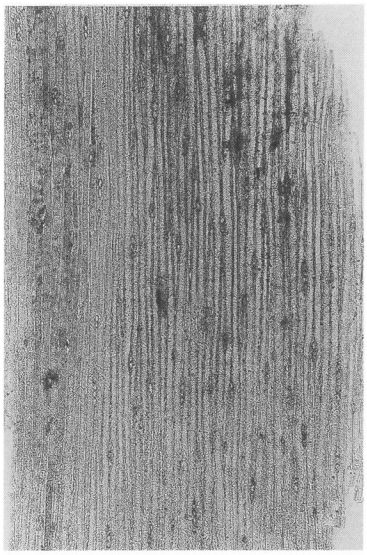
No-4　　ブナ科クリ属クリ



木口×40

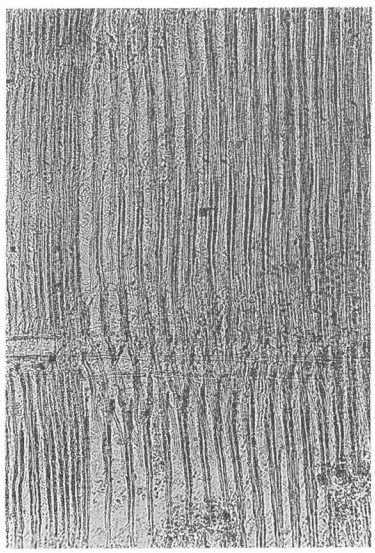


柾目×100



板目×40

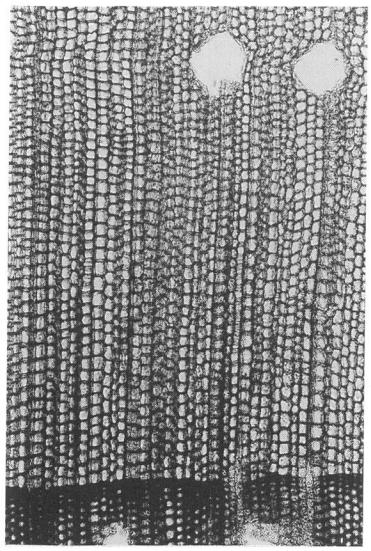
No-5　　イチイ科カヤ属カヤ



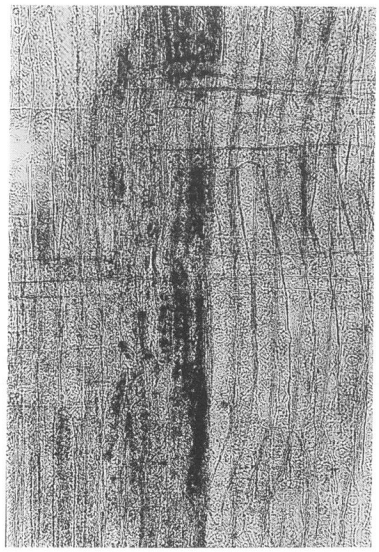
柾目×100

板目×40

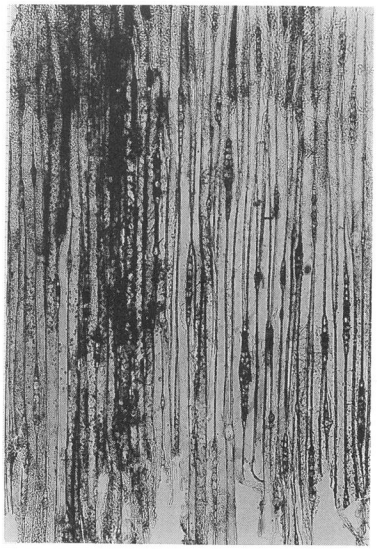
No-6　　イチイ科カヤ属カヤ



木口×40

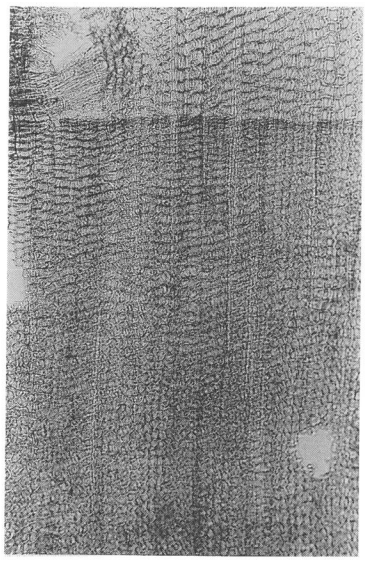


柾目×100

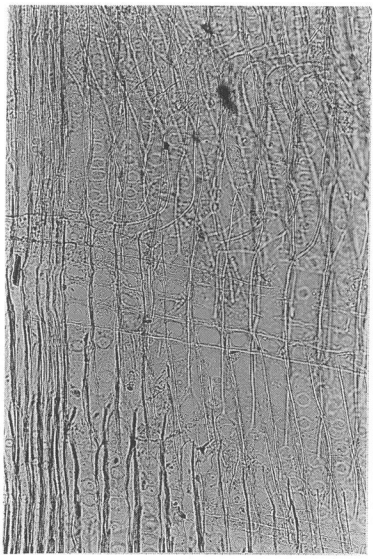


板目×40

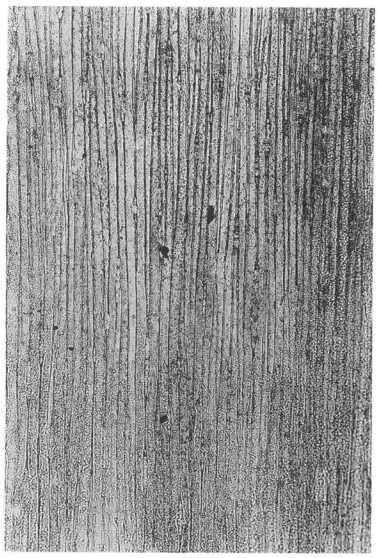
No-7　マツ科マツ属〔二葉松類〕



木口×40

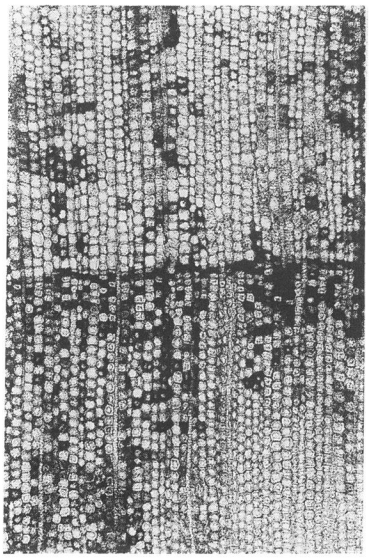


柾目×100

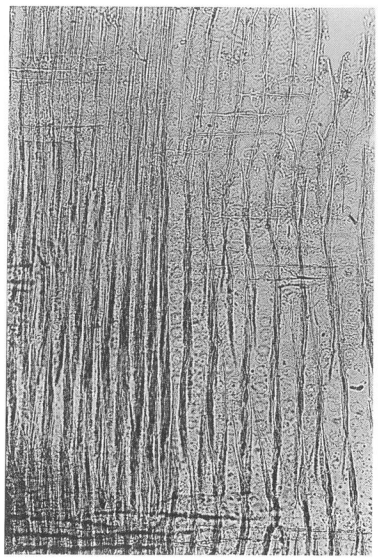


板目×40

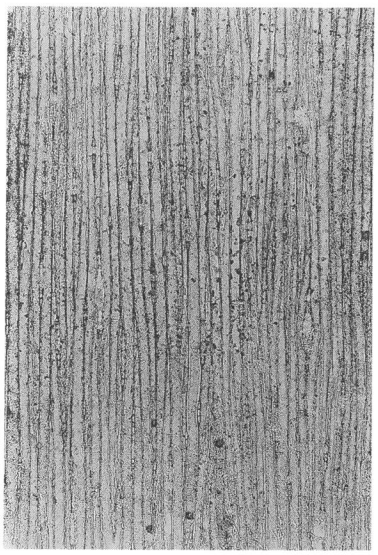
No-8　マツ科マツ属〔二葉松類〕



木口×40

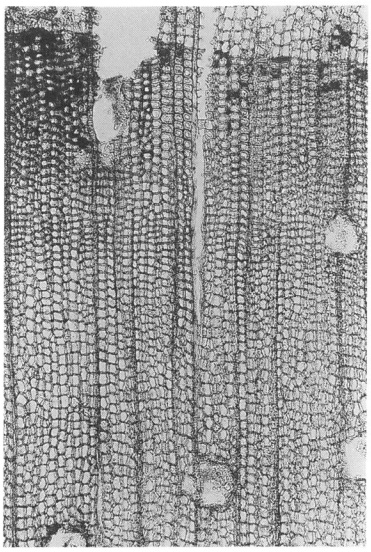


柾目×100

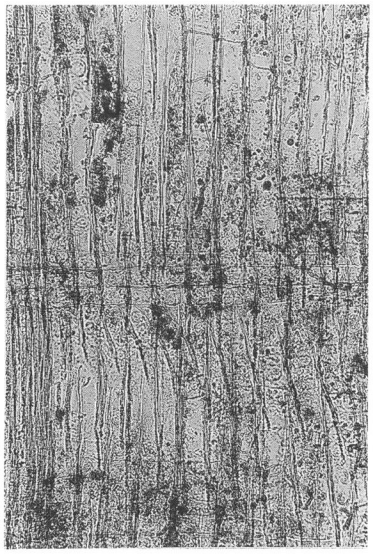


板目×40

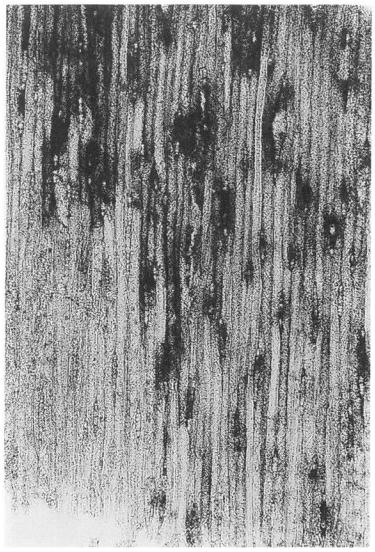
No-9　マツ科マツ属〔二葉松類〕



木口×40

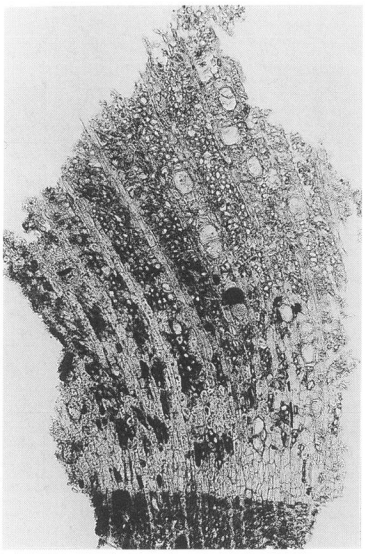


柾目×100

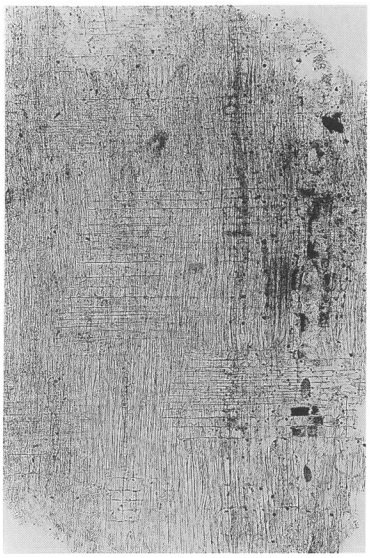


板目×40

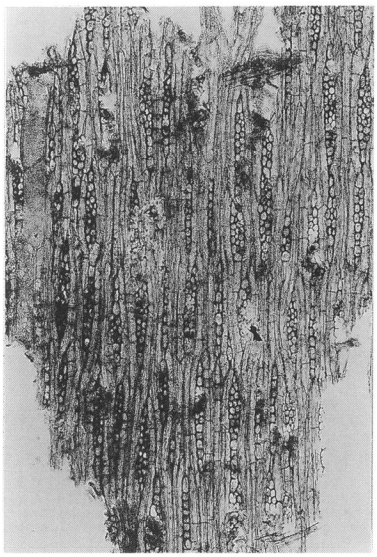
No-10　マツ科マツ属〔二葉松類〕



木口×40

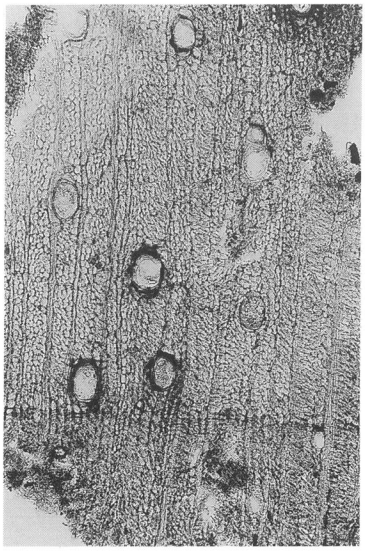


柾目×40

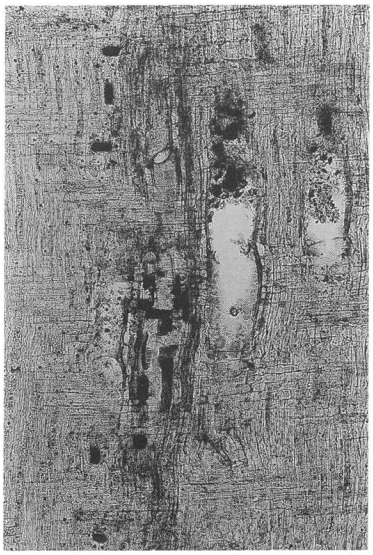


板目×40

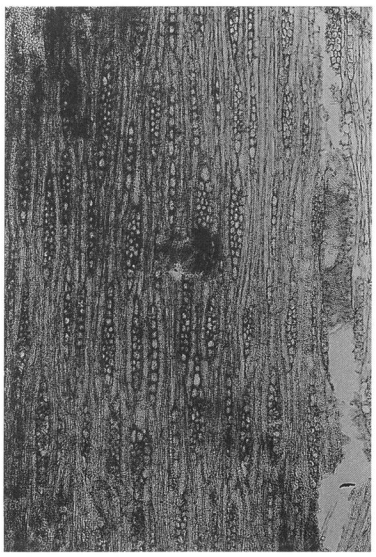
No-11　カキノキ科カキノキ属



木口×40

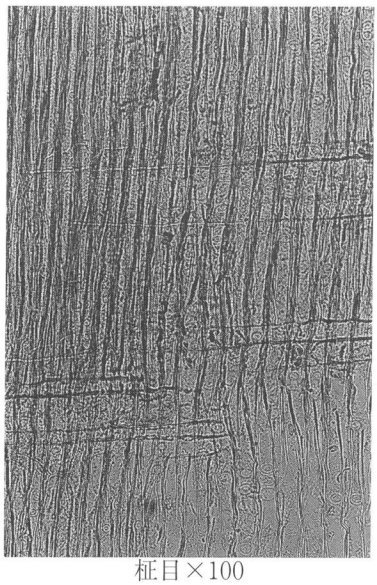


柾目×100

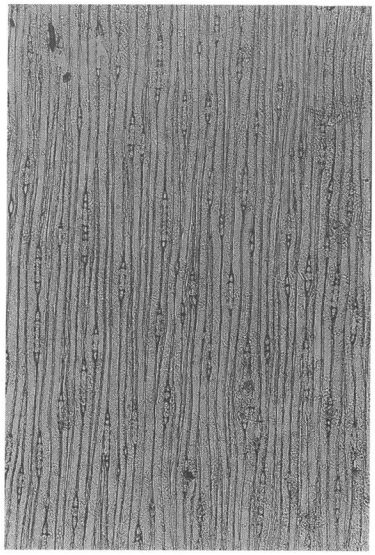


板目×40

No-12　カキノキ科カキノキ属

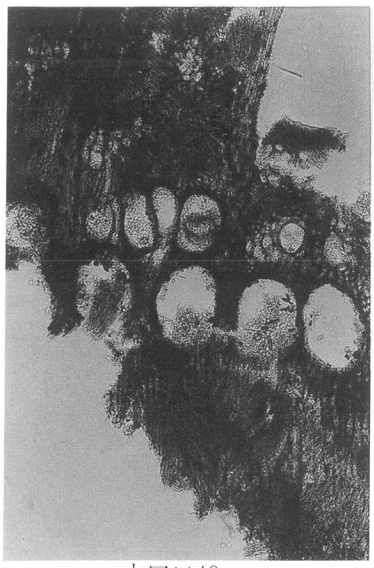


柾目×100

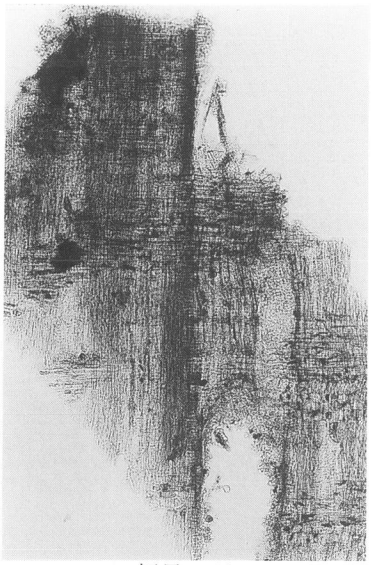


板目×40

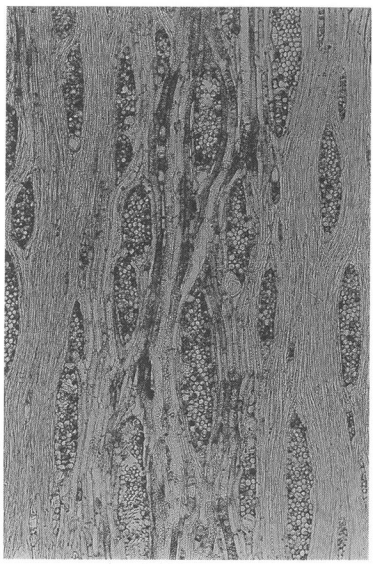
No-13　　マツ科マツ属〔二葉松類〕



木口×40

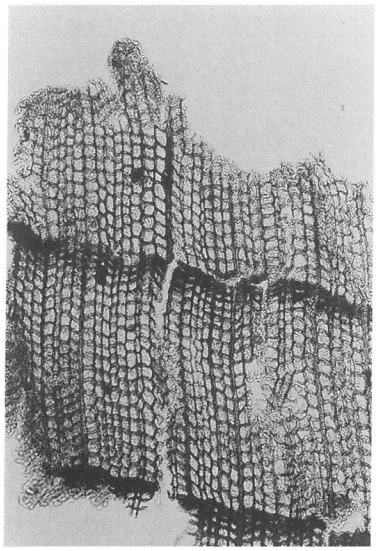


柾目×40

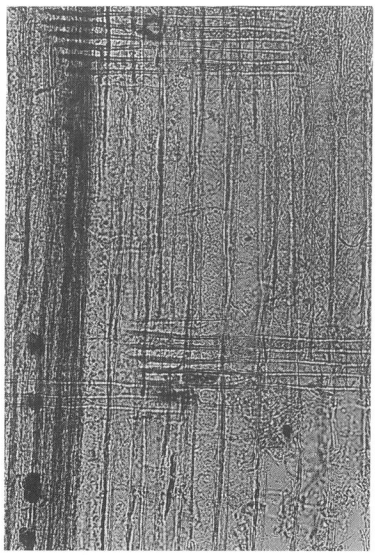


板目×40

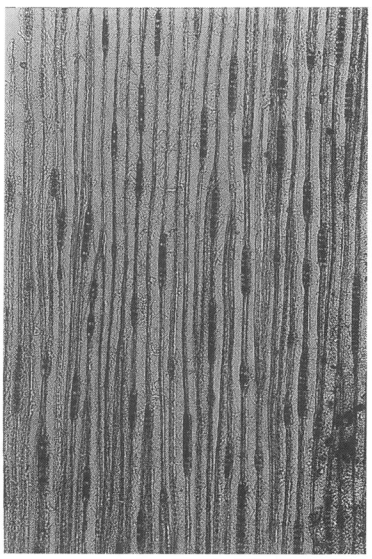
No-14　　ニレ科ケヤキ属ケヤキ



木口×40

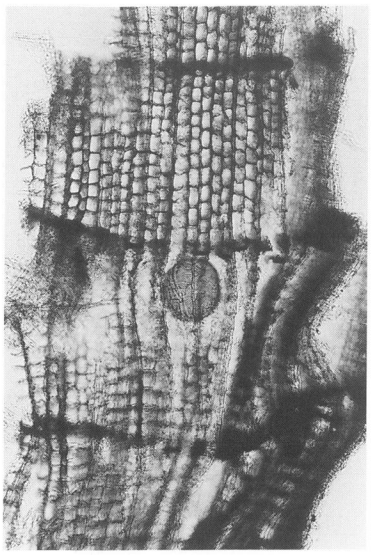


柾目×100

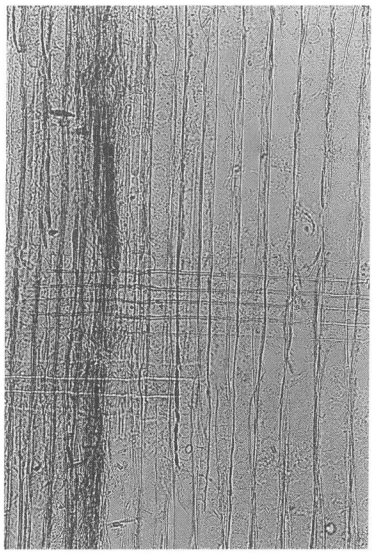


板目×40

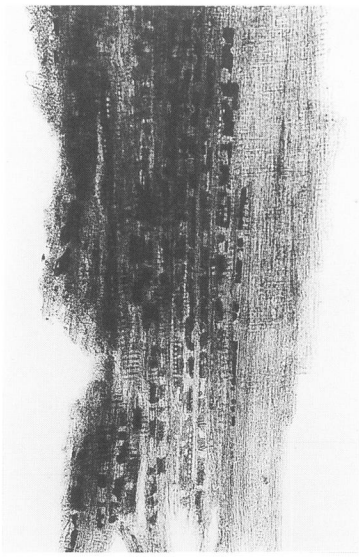
No-15　　ヒノキ科ヒノキ属



木口×40

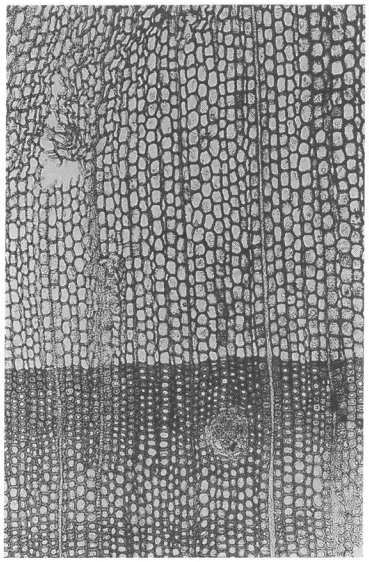


柾目×100

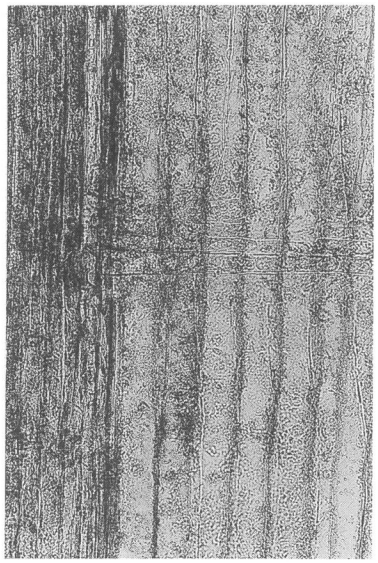


板目×40

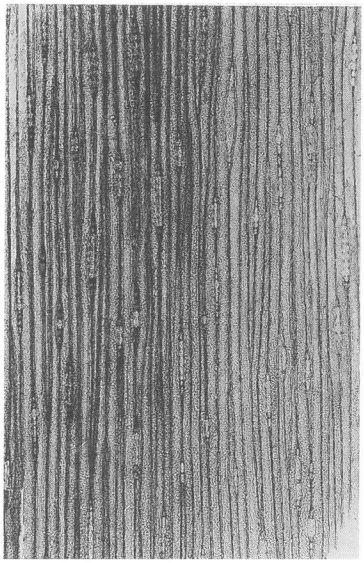
No-16　ヒノキ科アスナロ属



木口×40

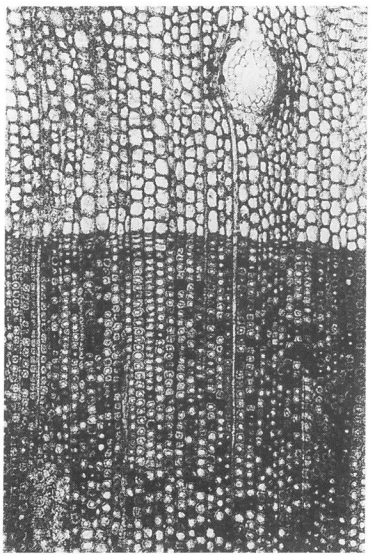


柾目×100

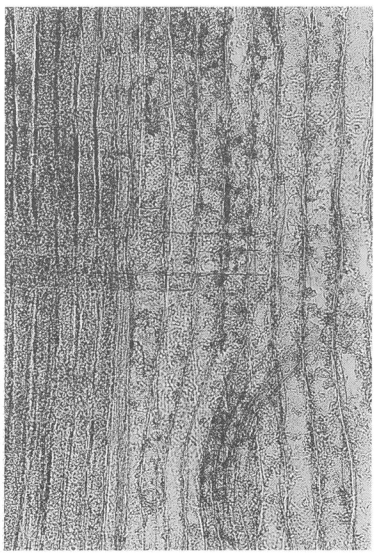


板目×40

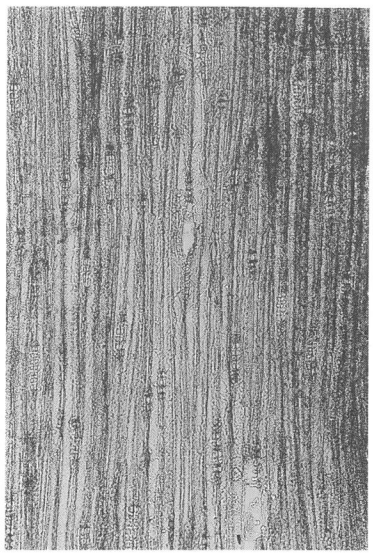
No-17　マツ科マツ属〔二葉松類〕



木口×40

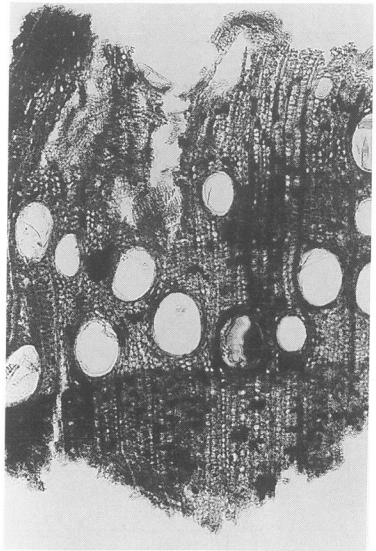


柾目×100

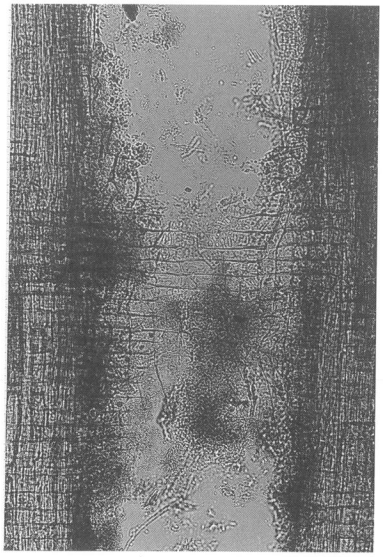


板目×40

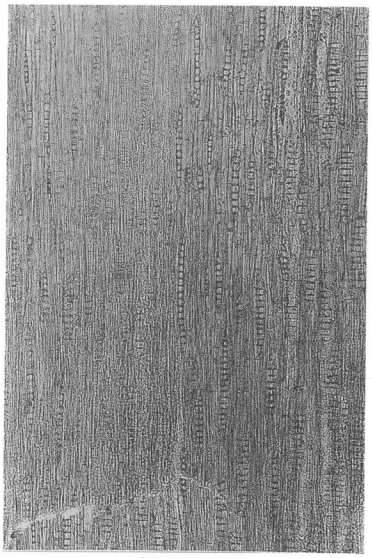
No-18　マツ科マツ属〔二葉松類〕



木口×40

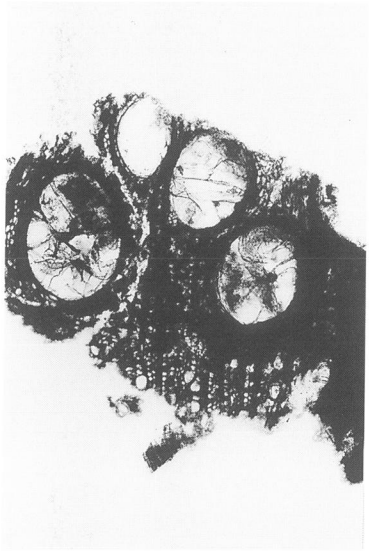


柾目×100

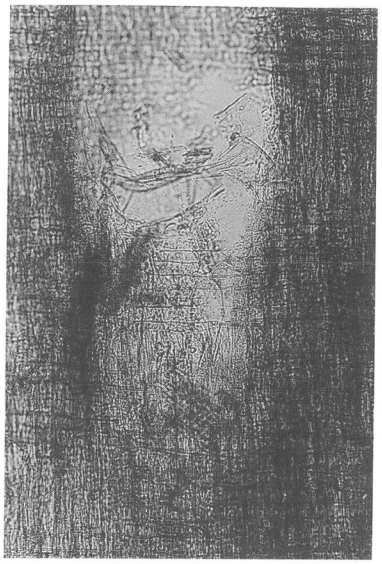


板目×40

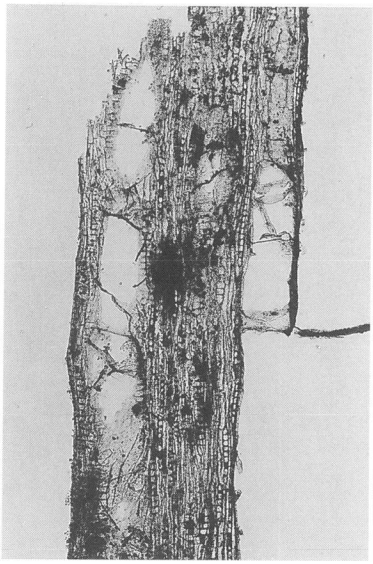
No-19　　ブナ科クリ属クリ



木口×40

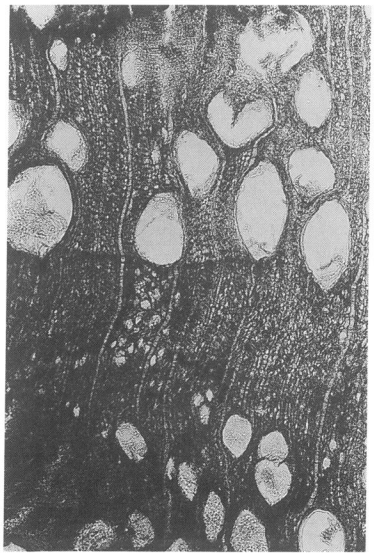


柾目×100

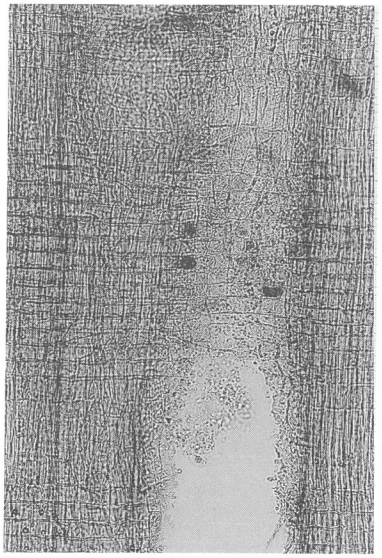


板目×40

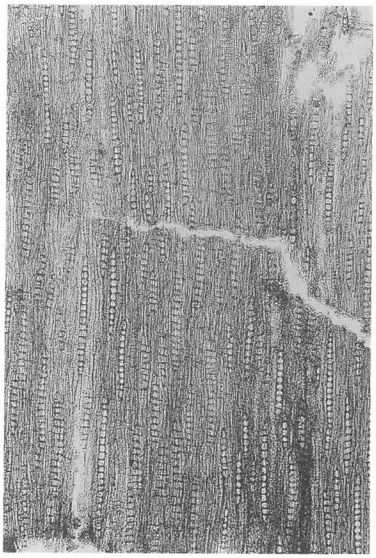
No-20　　ブナ科クリ属クリ



木口×40

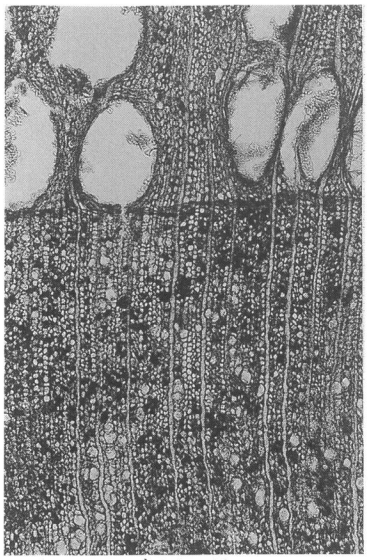


柾目×100

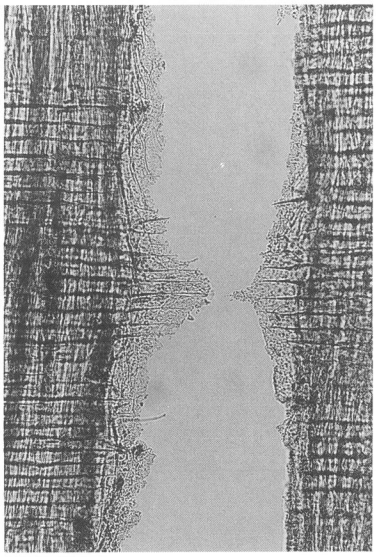


板目×40

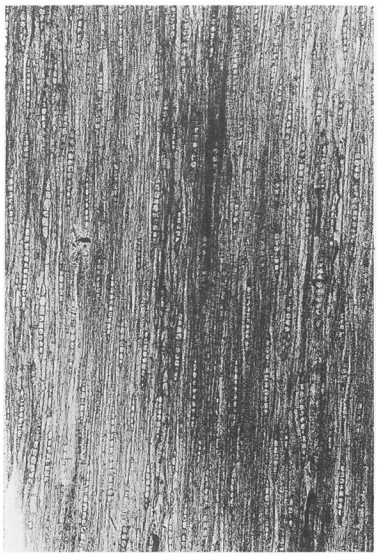
No-21　　ブナ科クリ属クリ



木口×40

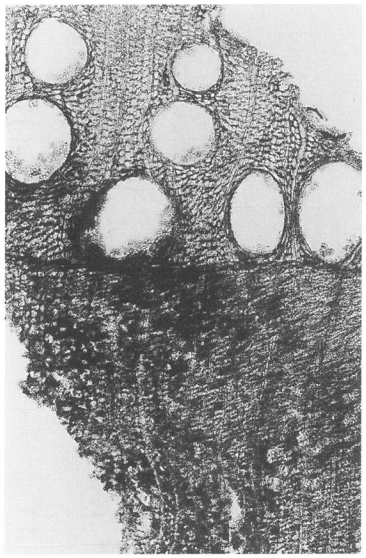


柾目×100

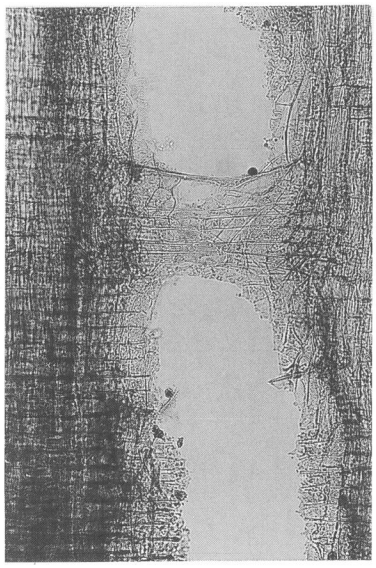


板目×40

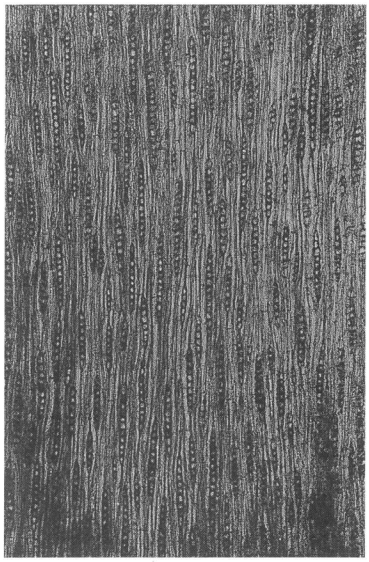
No-22　　ブナ科クリ属クリ



木口×40

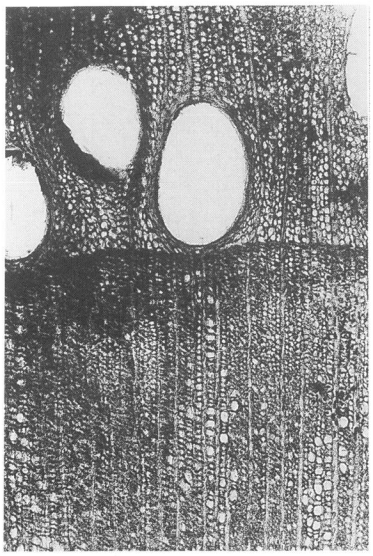


柾目×100

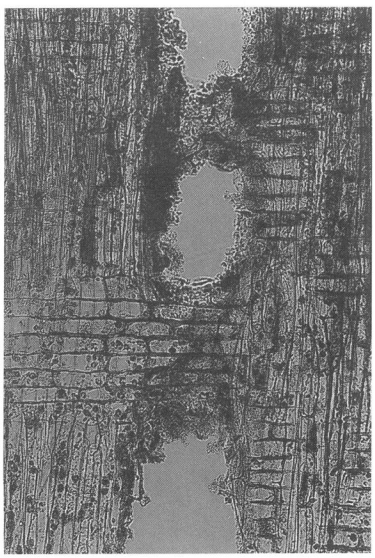


板目×40

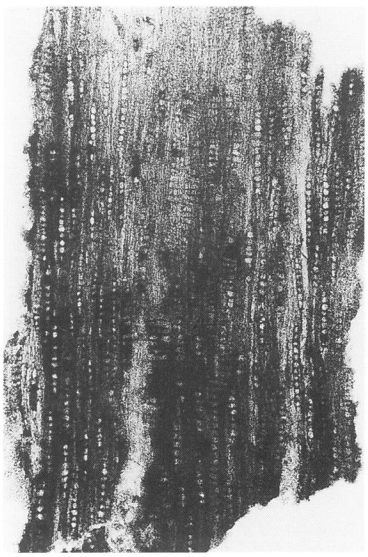
No-23　　ブナ科クリ属クリ



木口×40

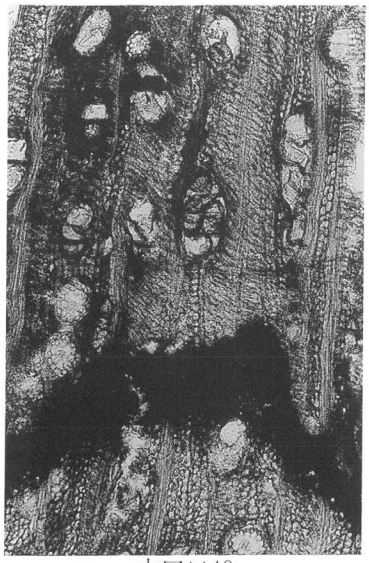


柾目×100

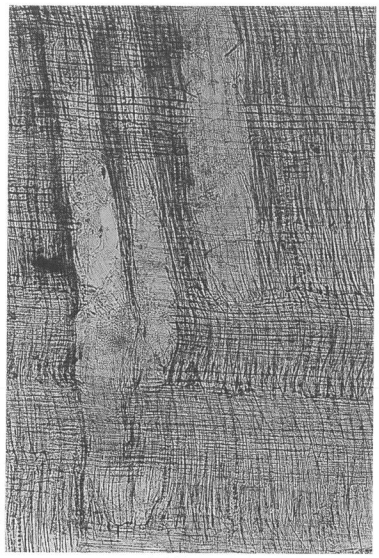


板目×40

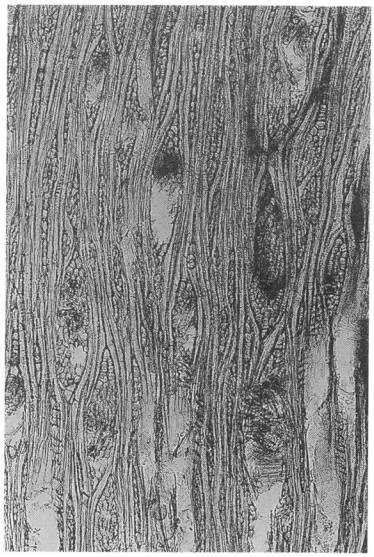
No-24　　ブナ科クリ属クリ



木口×40

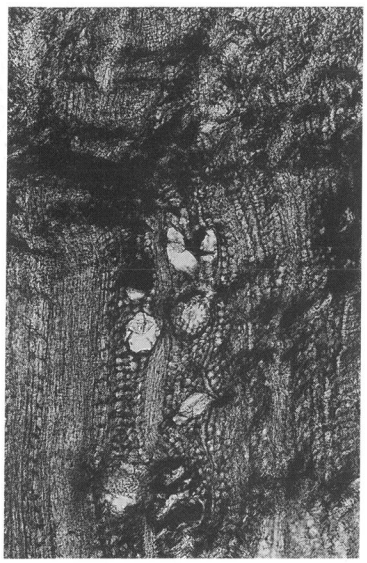


柾目×40

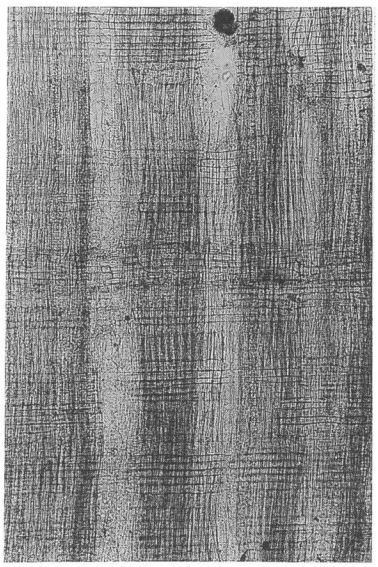


板目×40

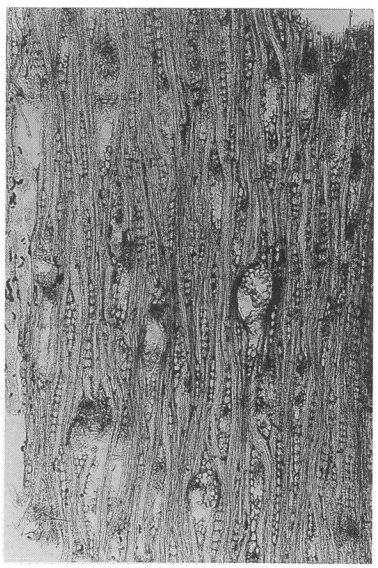
No-25　　カバノキ科クマシデ属



木口×40

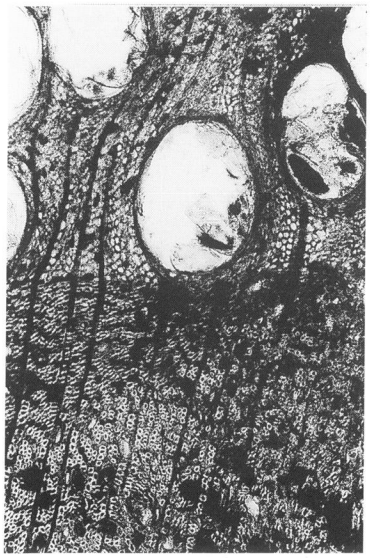


柾目×40

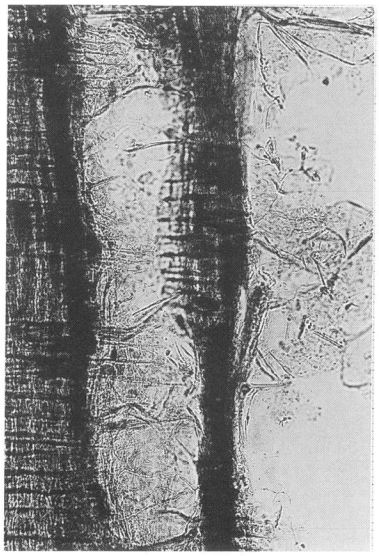


板目×40

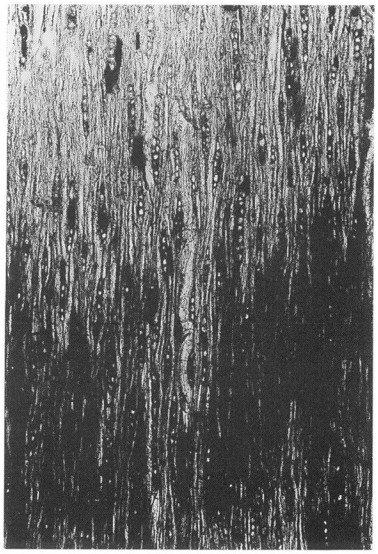
No-26　　カバノキ科クマシデ属



木口×40

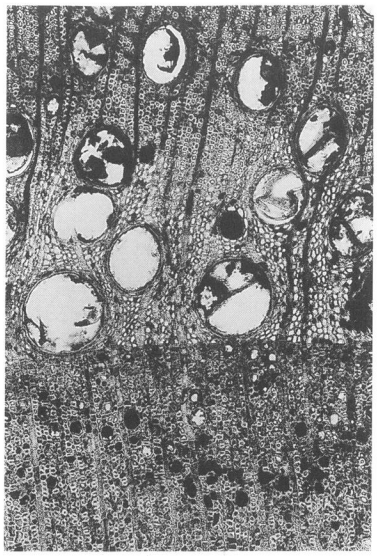


柾目×100

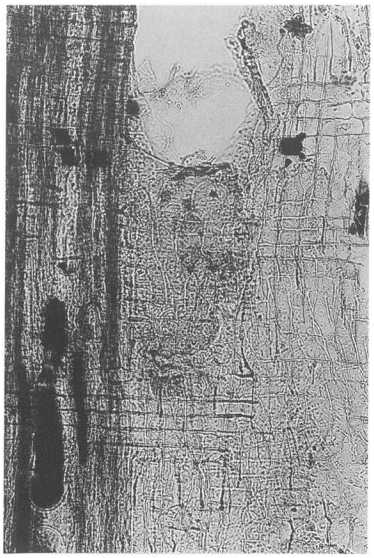


板目×40

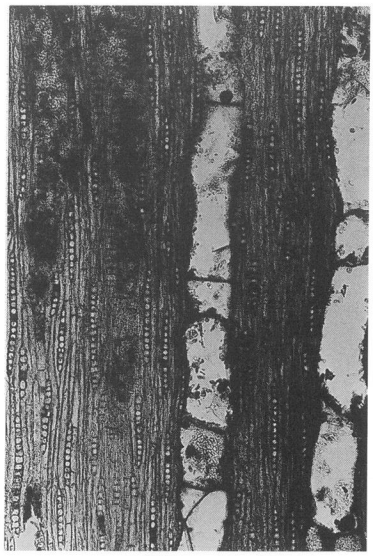
No-27　　ブナ科クリ属クリ



木口×40

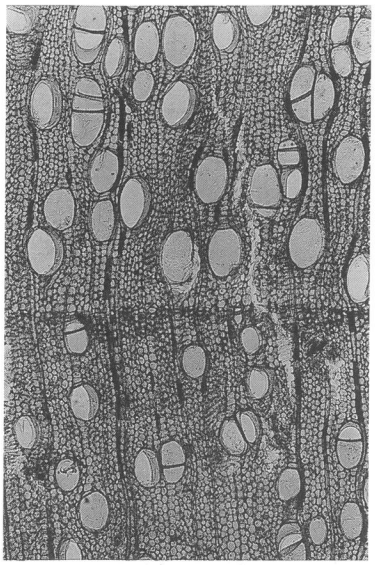


柾目×100

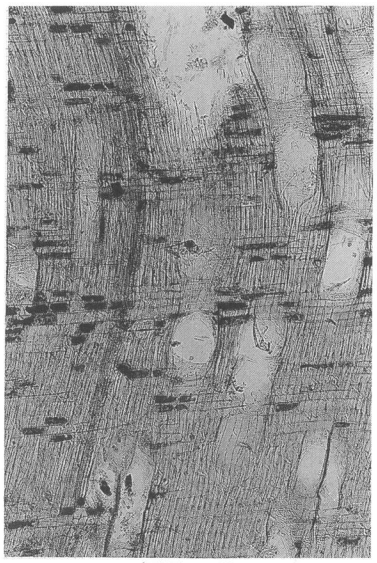


板目×40

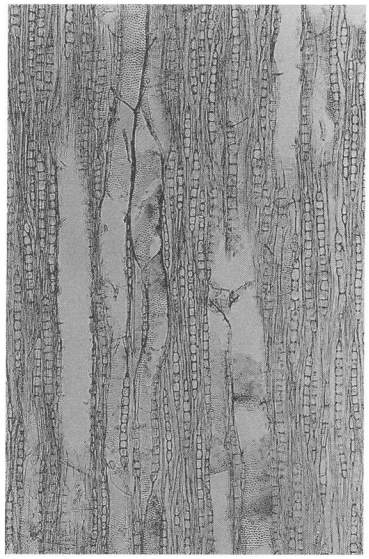
No-28　ブナ科クリ属クリ



木口×40

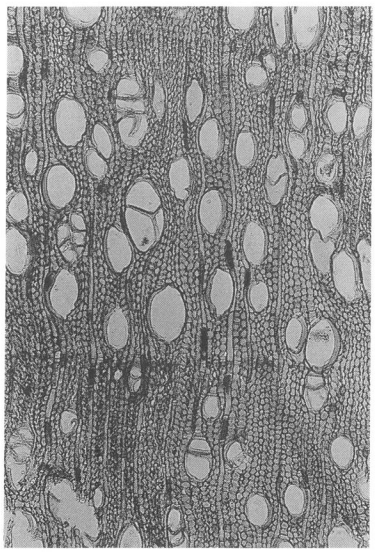


柾目×40

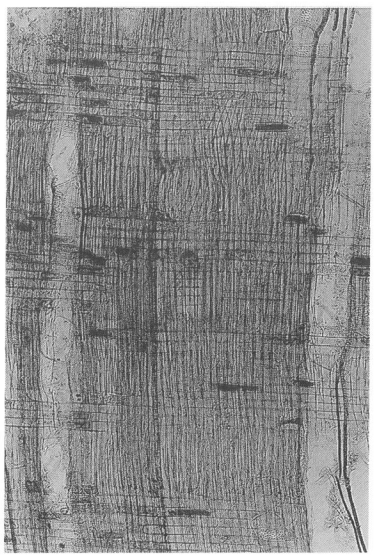


板目×40

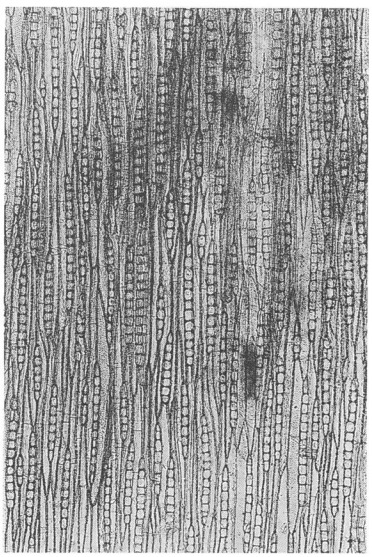
No-29　カバノキ科カバノキ属ヒメヤシャブシ



木口×40

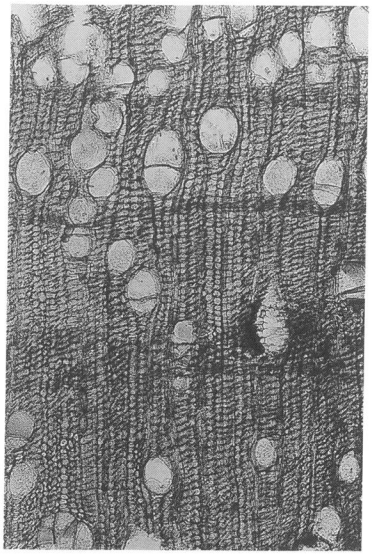


柾目×40

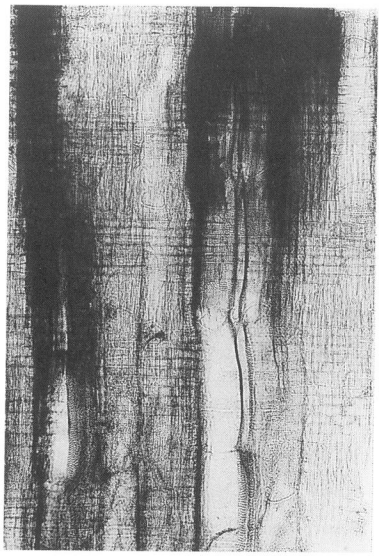


板目×40

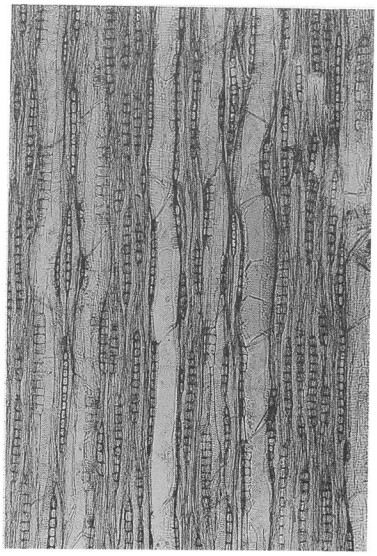
No-30　カバノキ科カバノキ属ヒメヤシャブシ



木口×40

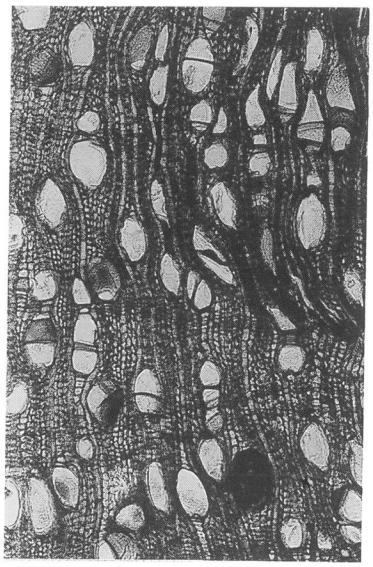


柾目×100

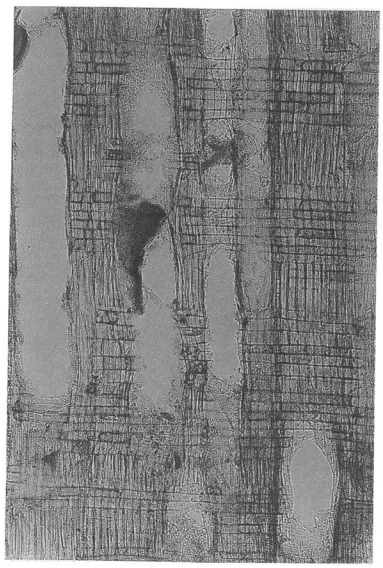


板目×40

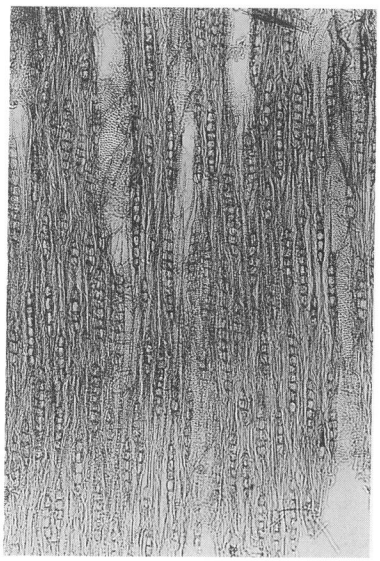
No-31　カバノキ科カバノキ属ヒメヤシャブシ



木口×40



柾目×40



板目×40

No-32　カバノキ科カバノキ属ヒメヤシャブシ

正保寺遺跡の自然科学分析

パリノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

正保寺遺跡は、仏生寺川が形成する谷底平野と周辺の丘陵地との境界に立地する。遺跡は丘陵の斜面から低地の裾にかけて広がっている。今回の自然科学分析では、石器石材を対象として肉眼による石材鑑定を行い、産地について検討する。また、縄文時代の河道等から出土した種実遺体の種類を同定し、当時の植生に関する情報を得る。

1.石材鑑定

(1)試料

観察を行った石器類は、石鏃 1 点、石鏃　未製品?1 点、石匙 1 点、打製石斧 3 点、磨製石斧4点、敲石3点、磨石1点、凹石 2 点、石錘5点、砥石5点、砥石?1点、砥石　未製品 1 点、剥片8点、玦状耳飾 1 点、焼石 1 点、五輪塔(空風輪)9点、五輪塔(火輪)4点、五輪塔(水輪)2 点、五輪塔(地輪)1 点、不明石製品1点および、不明1点の計 56 点である。五輪塔の石材は、中世寺院跡からの出土物であるが、それ以外の石器類は、縄文時代～中世のものが混在している。観察試料の詳細を石材鑑定結果と併せて表 2 に示す。

(2)分析方法

野外用のルーペを用いて構成鉱物や組織の特徴を観察し、肉眼で鑑定できる範囲の岩石名を付す。個々の石材の正確な岩石名は、薄片作製観察や全岩化学分析等を併用することにより調べることができるが、今回の鑑定では肉眼観察により全体的な石材の組成を把握することを目的としている。

(3)結果

肉眼観察により各石器の鑑定結果を表 1 に、器種別に集計した結果を表 2 に示した。またそれらの石材構成を円グラフとして図 1 に示した。

肉眼観察の結果、石器類に使用されている石材は、半深成岩類としてドレライト 1 点、火山岩類として流紋岩 3 点、デイサイト 2 点および輝石安山岩 5 点、火山砕屑岩類として火山礫凝灰岩(濃飛)1 点、流紋岩質凝灰岩 9 点、軽石質凝灰岩 1 点、デイサイト質凝灰岩 1 点および安山岩質凝灰岩 1 点、堆積岩類として凝灰質礫岩 1 点、凝灰質砂岩 7 点、石灰質砂岩 1 点、砂岩(古期)3 点、砂岩 5 点、頁岩 7 点および珪質頁岩 5 点、変質岩類として変質凝灰岩 1 点および蛇紋岩 1 点、および、鉱物として滑石 1 点が同定された。

(4)考察

正保寺遺跡は、仏生寺川の中流右岸に立地しており、石器に使用される石材としては、仏生寺川水系に分布する地質を反映した組成が予想される。仏生寺川水系の地質については、角ほか(1989)による 5 万分の 1 地質図幅「石動地域の地質」に詳細が示されており、砂岩、泥岩、凝灰質岩、凝灰岩類などを主体とする中新統の八尾累層および音川累層が広範に分布している。石材の入手が可能な近隣の地域としては、小矢部川や庄川の下流域があり、この水系に由来する石材についても考慮する必要がある。小矢部川および庄川水系については、鹿野ほか(1999)による 20 万分の 1 地質図幅「金沢」および山田ほか(1989)による 20 万分の 1 地質図幅「高山」に地質の詳細が示されている。小矢部川および庄川の水系には、古生代の飛騨変成岩類、白亜紀の堆積岩類を主体とする手取層群や流紋岩類を主体とする濃飛流紋岩類、古第三紀暁新世の流紋岩類を主体とする太美山累層や花崗岩類、新第三紀中新世の安山岩類・同質火砕岩類を主体とする岩稲層、流紋岩類を主体とする医王山層、および、堆積岩類を主体とする八尾累層および音川累層などが主に分布している。その他、富山県およびその周辺地域の地質については、日本の地質「中部地方Ⅱ」編集委員会(1988)に詳しい解説が示されている。これらの資料に基づき、正保寺遺跡より出土した石器の石材産地について検討を行った。

・半深成岩類

半深成岩類としては、ドレライトが磨製石斧として使用されている。ドレライトは仏生寺川流域には分布しない石材である。小矢部川や庄川流域の地質にも分布しないとされており、遠方からの搬入品の可能性もある。ただし、ドレライトは一般に岩脈として小規模に産出するため、これらの流域において採取できる可能性があり、河床礫などの調査が必要であると考えられる。

・火山岩類

火山岩類としては、流紋岩、デイサイトおよび輝石安山岩が認められる。流紋岩は、石鏃未製品?、敲石、砥石?などに、デイサイトは石錘、敲石、磨石に、輝石安山岩は打製石斧、磨製石斧、石錘、砥石などに使用されている。これらの火山岩類は、仏生寺川流域には分布しない石材である。小矢部川流域においては、流紋岩およびデイサイトは太美山累層や医王山累層由来の礫として、輝石安山岩は岩稲層由来の礫として採取可能であり、準在地性の石材と考えられる。ただし、輝石安山岩については、能登半島に広く分布する中新統の穴水累層の主岩相であり、この地域に由来するものも含まれている可能性がある。

・火山砕屑岩類

火山砕屑岩類としては、火山礫凝灰岩（濃飛）、流紋岩質凝灰岩、軽石質凝灰岩、デイサイト質凝灰岩および安山岩質凝灰岩が認められる。火山礫凝灰岩（濃飛）は打製石斧として使用されており、他の火山砕屑岩類と比較してきわめて堅硬で火山礫を多く含む岩相を示す。このような岩相は、小矢部川や庄川に分布する濃飛流紋岩類に類似しており、小矢部川の河床礫などを使用しているものと推定される。流紋岩質凝灰岩および軽石質凝灰岩は五輪塔の石材として、デイサイト質凝灰岩および安山岩質凝灰岩は石錘として使用されている。いずれも軟質な石材であり、整形のし易い特徴がある。これらは、仏生寺川上流部に分布する八尾累層や音川累層に挟在する火山砕屑岩類に由来している石材と考えられ、仏生寺川の河床礫として入手できると考えられる。五輪塔に使用されている石材については、細粒質な岩相を示しており、仏生寺川最上流部に分布する八尾累層中部の渕ヶ谷凝灰岩層に由来する可能性がある。

・堆積岩類

堆積岩類としては、凝灰質礫岩、凝灰質砂岩、石灰質砂岩、砂岩（古期）、砂岩、頁岩および珪質頁岩が認められる。凝灰質礫岩は五輪塔の石材に、凝灰質砂岩は五輪塔の石材または凹石、砥石などに、砂岩および頁岩は石錘、敲石、砥石などに、珪質頁岩は石鏃、石匙などに、石灰質砂岩は五輪塔の石材に、砂岩（古期）は打製石斧、磨石、凹石、不明石器に使用されている。凝灰質礫岩、凝灰質砂岩、砂岩および頁岩は、仏生寺川流域に分布する八尾累層および音川累層に由来する石材と考えられる。仏生寺川の河床礫として容易に採取できる石材であり、在地性石材の中でも主要石材と考えられる。石灰質砂岩は、仏生寺川中下流域などに分布する氷見累層に由来する石材と考えられる。遺跡から 1km 以内の範囲に分布しており、矢田部や堀田などの地域から採取したものと推定される。砂岩（古期）は、アレナイト質で堅硬緻密な岩相を示しており、庄川上流域に分布する下部ジュラ系の手取層群に由来する石材と考えられる。堅硬緻密な岩相から、他の砂岩類や凝灰質岩などとは異なる器種に使用されている。珪質頁岩は、富山県下の新第三系の頁岩類にはみられない石材であり、搬入石材と考えることができる。珪質頁岩は、北海道から東北の日本海側および新潟県に主な産地が知られている。産地の特定は難しいが、これらの地方からの搬入品と推定される。

・変質岩類

変質岩類としては、変質凝灰岩および蛇紋岩が認められる。変質凝灰岩は敲石として、蛇紋岩は磨製石斧として使用されている。変質凝灰岩は、中新統にしばしば認められる安山岩質な凝灰岩類の岩相を示しており、小矢部川流域の岩稲層に由来する石材と考えられる。蛇紋岩は、飛騨外縁帯の超塩基性～塩基性岩類に伴う石材と考えられる。飛騨外縁帯における超塩基性岩～塩基性岩類は、新潟県糸魚川市周辺の青海-白馬岳地域において最も広く分布しており、この地域からの搬入品である可能性が高いと考えられる。

・鉱物

鉱物としては、滑石が玦状耳飾として使用されている。滑石は一般に蛇紋岩類に伴って産出する鉱物であることから蛇紋岩と同様に、飛騨外縁帯の超塩基性～塩基性岩類に伴う石材と考えられ、青海-白馬岳地域などからの搬入品と推定される。

2.種実同定

(1)試料

種実同定は、SX03 から縄文土器と共に検出された堅果類 1 試料(250 点程度)と、縄文時代の遺物が多量検出された旧河道 01 の埋土より検出された種実遺体 3 試料(AH05(3),AH05(4),AH06(2):計 200 点程度)の計 4 試料について実施する。各試料の詳細は、結果と共に表 3 に示す。

(2)分析方法

試料を水中で篩に通して粒径別に分けた後、種実遺体を双眼実体顕微鏡下で観察し、形態的特徴を現生標本および原色日本植物種子写真図鑑(石川,1994)、日本植物種子図鑑(中山ほか,2000)等との対照から同定する。分析後の種実遺体は、種類毎にビンに入れ、70%程度のエタノール溶液による液浸保存処理を施して保管する。

(3)結果

結果を表3に示す。被子植物17分類群(木本のオニグルミ、イヌシデ、コナラ亜属、アカガシ亜属、コナラ属、ブナ科、マタタビ属、ヒサカキ属、キハダ、サンショウ属、トチノキ、イイギリ、タラノキ、エゴノキ属、ムラサキシキブ属、ニワトコ、草本のイネ科)445個以上の種実が同定された。その他に、木材、炭化材、樹皮、不明植物、蘚苔類、昆虫の破片などが確認された。

種実遺体の遺存状態は比較的良好である。ただし、イネ科の果実には、果皮に毛が残存する個体や分析中に発芽する個体が確認されるなど、遺存状態が極めて良好で、後代からの混入の可能性が高いことから、考察からは除外している。以下に、本分析にて同定された種実の形態的特徴などを記す。

・オニグルミ(*Juglans mandshurica* Maxim. subsp. *sieboldiana* (Maxim.) Kitamura)　クルミ科クルミ属

核の完形、半分以下の破片が検出された。灰褐色、広卵体で頂部がやや尖る。径 3cm 程度。1 本の明瞭な縦の縫合線があり、縫合線に沿って半分に割れた個体や、頂部が欠損した個体や(AH06(2); 2 個)、縫合線上に齧歯類(ネズミなど)によると考えられる食害痕が認められる個体(AH06(2); 4 個)がみられる。核は硬く緻密で、表面には縦方向に溝状の浅い彫紋が走り、ごつごつしている。内部には子葉が入る 2 つの大きな窪みと隔壁がある。

・イヌシデ(*Carpinus Tschonoskii* maxim.)　カバノキ科クマシデ属

果実が検出された。灰褐色、広卵体でやや偏平。長さ 4mm、幅 3mm、厚さ 1.5mm 程度。果皮表面はやや平滑で、果皮両面にはそれぞれ 6 本程度の縦隆条が配列する。

・コナラ属コナラ亜属(*Quercus* subgen. *Quercus*)　ブナ科

果実の破片が検出された。灰褐色、卵状楕円体。破片の長さ 2.1cm 以下、径 1cm 程度。果実頂部には、殻斗の圧痕である輪状紋は確認されず、平滑。柱頭と基部の着点を欠損する。果皮外面は平滑で、ごく浅く微細な縦筋がある。

・コナラ属アカガシ亜属(*Quercus* subgen. *Cyclobalanopsis*)　ブナ科コナラ属

果実の破片が検出された。黒褐色、卵状楕円体。破片の長さ 1.5cm、径 1.2cm 程度。果実頂部には、殻斗の圧痕である輪状紋がみられるが、柱頭を欠損する。基部の着点を欠損する。果皮外面は平滑で、ごく浅く微細な縦筋がある。

・コナラ属(*Quercus*)　ブナ科

果実の破片が検出された。灰～黒褐色、破片の大きさ 1.3cm 以下。果実頂部を欠損し、輪状紋の有無が確認されない破片を、コナラ属にとどめた。基部の着点は径 8mm 程度の円形、淡褐色で維管束の穴が輪状に並ぶ。果皮外面は平滑で、ごく浅く微細な縦筋がある。なお、基部が確認されない果実の破片をブナ科(Fagaceae)にとどめた。

・マタタビ属(*Actinidia*)　マタタビ科

種子が検出された。茶～黒褐色、楕円形で両凸レンズ形。長さ 2～2.5mm、幅 1.5mm 程度。基部はやや突出し、切形。種皮は硬く、表面には円～楕円形の凹点が密布し網目模様をなす。

・ヒサカキ属(*Eurya*)　ツバキ科

種子が検出された。茶～黒褐色、不規則な多角形でやや偏平、径 1.5mm 程度。一端に臍があり、臍の方に薄い。臍を中心に楕円形や円形凹点による網目模様が指紋状に広がる。

・キハダ(*Phellodendron ammrense* Ruprecht)　ミカン科キハダ属

核(内果皮)の破片が検出された。黒褐色、半横広卵形でやや偏平。破片の長さ 3.8mm、幅 3mm、厚さ 1.5mm 程度。種皮は厚く硬い。表面には浅く細かい網目模様が縦列する。

・サンショウ属(*Zanthoxylum*)　ミカン科

核(内果皮)が検出された。黒褐色、倒卵形体でやや偏平。長さ 4.2mm、幅 3mm 程度、厚さ 2mm 程度。基部に斜切形の臍がみられる。内果皮は厚く硬く、表面には浅く細かな網目模様がみられる。

・トチノキ(*Aesculus turbinata* Blume)　トチノキ科トチノキ属

幼果、果実の破片、種子の完形、破片が検出された。AH06(2)から確認された種子 1 個は果皮が付着している状態であった。幼果、果実は灰褐色、歪な倒卵体。幼果は径 8mm 程度、果実は径 3.5～4cm 程度。果実破片は、基部と頂部を結ぶ 3 本の溝に沿って割れている。果皮は厚く、スポンジ状で弾力があり、表面には皮目状の斑点がある。種子は偏球体で径 2.5～3cm 程度。種皮は薄く硬く、表面にはほぼ赤道面を蛇行して一周する特徴的なカーブを境に、流理状の微細な網目模様があり光沢の強い黒色の上部と、粗面で光沢のない灰褐色の下部の着点に別れる。

・イイギリ(*Idesia polycarpa* Maxim.)　イイギリ科イイギリ属

種子が検出された。灰～黒褐色、広倒卵体。長さ 1.8mm、径 1.3mm 程度。頂部に円形の孔がある。頂部から基部の臍に向かって一本の溝がある。表面はスポンジ状の微細な網目模様があり、ざらつく。

・タラノキ(*Aralia elata* (Miq.) Seemann)　ウコギ科タラノキ属

核(内果皮)が検出された。灰褐色、半円形でやや偏平。長さ 2.2mm、幅 1.4mm 程度。腹面はほぼ直線状で、片端に突起が見られる。背面には数本の浅い溝が走る。表面はざらつく。

・エゴノキ属(*Styrax*)　エゴノキ科

種子が検出された。灰～黒褐色、卵体で頂部がやや尖る。長さ 10mm、径 7mm 程度。表面には 3 本程度の縦溝が走り、基部に灰褐色、斜切形の着点がある。種皮は厚く硬く、表面には微細な網目模様があり、ざらつく。

・ムラサキシキブ属(*Callicarpa*)　クマツズラ科

核(内果皮)が検出された。灰褐色、倒卵体でやや偏平。長さ 2.3mm、幅 1.7mm 程度。背面は円みがあり、腹面中央はやや窪む。腹面方向に湾曲し、側面観は三日月形。中央部の内果皮が極めて薄く柔らかいため、破損した個体もみられる。縁部分の内果皮は厚く、やや弾力がある。

・ニワトコ(*Sambucus racemosa* L. subsp. *sieboldiana* (Miq.) Hara)　スイカズラ科ニワトコ属

核(内果皮)の破片が検出された。淡～黄褐色、広倒卵形でやや偏平。基部はやや尖る。長さ 2.5mm、幅 1.3mm 程度。背面は円みがあり、腹面の中央は縦方向の鈍稜をなす。腹面基部正中線上にある小さな孔を欠損する。内果皮はやや硬く、表面には横皺状模様が発達する。

・イネ科(Gramineae)

果実が検出された。淡～黄褐色、半卵体でやや偏平。長さ 2mm、径 1mm 程度。果皮は薄く柔らかくて弾力がある。表面には微細な網目模様が縦列する。果皮表面に毛が密生する個体や、分析中に発芽した個体が確認された。

(4)考察

検出された種実は、堅くて残りやすく、かつ形が特徴的なものが抽出されており、全体の組成としてみると、やや偏っている可能性がある。種類構成をみるとほとんどが木本類であり、林縁に生育する種類が多い。これは遺跡が立地する丘陵縁辺部の植生を反映していると考えられる。検出される種類をみると、イイギリ、タラノキ、ニワトコ、エゴノキ属など中低木類が多く、イヌシデ、オニグルミ、トチノキなど湿った場所を好む種類や、ニワトコ、タラノキ、マタタビ属など日当たりの良い場所を好む種類が多い。全体的に落葉樹が多いが、ヒサカキ属とアカガシ亜属は常緑樹である。このことから、遺跡周辺は日当たりのよい林縁を好む樹木や、湿ったところを好む樹木など、落葉樹を中心とした森林植生であったとみられる。氷見市周辺の花粉分析の結果は、ハンノキ属など湿地林を構成する樹木を除くと、アカガシ亜属をはじめ、ブナ属やコナラ亜属などが多く検出される(パリノ・サーヴェイ株式会社,未公表)。これらは丘陵上の植生に由来するとみられ、沿岸部や標高の低い場所ではカシ類などの常緑樹が、標高の高い内域にはブナ属やコナラ亜属などの落葉樹が分布していたと考えられる。遺跡周辺は、西日本を中心に分布する常緑樹林と東日本を中心に分布する落葉樹林との境界付近に相当することから、狭い地域に様々な植生が分布し、豊富な樹種構成になっていたと思われる。また、検出された種類の中には、食用可能な種実(コナラ亜属、アカガシ亜属、オニグルミ、トチノキ、マタタビ属など)が多く認められる。状況から考えて、検出された種実が、生活残渣に由来するとは考えにくいが、当時の人々がこれらを利用していた可能性は十分にある。たとえば、小杉町の南太閤山遺跡からは縄文時代前期の遺構からオニグルミやクリなどの種実が、まとまって出土しており、種実の破損状況や出土状況から当時の人々の生活残渣が破棄されたものと考えられている(吉井,1986)。

なお、遺跡の立地から考えれば、この他水生植物の微細な種実なども含まれている可能性がある。種類構成を詳細に検討するためには、今後土壌を細かい篩目を用いて分析するなど、微細な種実にも着目しながら検討していくことが望まれる。

引用文献

石川 茂雄,1994,原色日本植物種子写真図鑑.石川茂雄図鑑刊行委員会,328p.

鹿野和彦・原山 智・山本博文・竹内 誠・宇都浩三・駒沢正夫・広島俊男・須藤定久, 1999, 20 万分の 1 地質図幅「金沢」, 地質図幅, 地質調査所.

角 靖夫・野沢 保・井上正昭, 1989. 石動地域の地質, 地域地質研究報告(5 万分の 1 地質図幅), 地質調査所.

中山 至大・井之口 希秀・南谷 忠志,2000,日本植物種子図鑑.東北大学出版会,642p.

山田 直利・野沢 保・ 原山 智・滝沢文教・加藤碩一, 1989, 20 万分の 1 地質図幅「高山」,地質図幅, 地質調査所.

吉井 亮一,1986,富山県南太閤山Ⅰ遺跡出土の種実遺体(2). 都市計画街路七美・太閤山・高岡線内遺跡群発掘調査概要(4), 富山県教育委員会,53-60.

表1. 正保寺遺跡の石材鑑定結果

番号	実測番号	遺跡	出土地点	器種	長さ (cm)	幅 (cm)	高さ (cm)	重量 (g)	石質	備考
1	57	SBZ	旧河道01 AH05(3) 埋土(砂層)	剥片	4.8	2.9	0.8	8	珪質頁岩	
2	58	SBZ	旧河道01 AI06(3)	剥片	3.0	1.7	1.0	3	珪質頁岩	
3	59	SBZ	旧河道01 AE03(3)	剥片	3.7	3.2	1.0	7	頁岩	
4	60	SBZ	旧河道01 AG05(2)	剥片	2.1	6.8	1.4	9	頁岩	
5	61	SBZ	旧河道01 AG05(2)	剥片	3.5	2.0	6.7	4	頁岩	
6	62	SBZ	旧河道01 AG05(2)	剥片	2.4	3.7	0.6	5	頁岩	
7	63	SBZ	旧河道01 AG04(4)	剥片	2.9	3.1	0.8	5	頁岩	
8	64	SBZ	旧河道01 AE03(4)	石鏃 未製品?	2.8	1.8	0.5	3	流紋岩	赤玉様
9	65	SBZ	旧河道01 AI05(3) 埋土	石鏃	2.3	1.6	0.6	1	珪質頁岩	
10	66	SBZ	旧河道01 AG04(4) 埋土(砂層)	石匙	5.4	1.7	0.9	6	珪質頁岩	先折れ
11	67	SBZ	旧河道01 AH06(2) 埋土(砂層)	打製石斧	14.2	9.5	2.6	361	輝石安山岩	
12	68	SBZ	旧河道01 AH06(2) 埋土(砂層)	打製石斧	17.2	7.6	2.0	269	火山礫凝灰岩(濃飛)	
13	69	SBZ	旧河道01 AI06(3) 埋土(砂層)	磨製石斧	9.0	5.7	3.1	255	輝石安山岩	基部欠損 縄文中期末葉
14	70	SBZ	旧河道01 AE03(4)	磨製石斧	10.0	5.6	2.3	204	蛇紋岩	薄い窪み、刃部欠損
15	71	SBZ	旧河道01 AI06(1)	磨製石斧	7.8	4.9	1.9	99	輝石安山岩	刃部欠損
16	72	SBZ	旧河道02 AH05(1) 埋土	敲石	8.5	7.3	1.2	191	流紋岩	
17	73	SBZ	旧河道01 AG04(4) 河底直上	敲石	9.0	6.0	2.8	188	変質凝灰岩	敲打跡。叩いた跡。
18	74	SBZ	旧河道01 AH05(1) 埋土(砂層)	敲石	13.7	5.0	4.9	440	砂岩	上下、横の3ヶ所敲打痕、指の痕と思われるくぼみあり。
19	75	SBZ	旧河道01 AH06(1) 埋土(砂層)	磨石	10.45	8.3	4.8	553	デイサイト	一部欠損
20	77	SBZ	旧河道01 AE04(2) 河底直上	凹石	10.1	8.3	5.1	665	砂岩(古期)	
21	78	SBZ	旧河道01 AE03(3)	凹石	9.9	10.0	2.8	246	凝灰質砂岩	
22	79	SBZ	旧河道01 AI06(1)	石錘	6.4	5.2	1.6	72	デイサイト	
23	80	SBZ	旧河道01 AE03(3)	石錘	8.8	7.7	1.5	221	頁岩	
24	81	SBZ	旧河道01 AH05(3) 埋土(砂層)	石錘	9.15	8.6	2.35	272	安山岩質凝灰岩	
25	82	SBZ	旧河道01 AE03(4)	石錘	6.0	7.3	2.4	111	輝石安山岩	
26	83	SBZ	旧河道01 AH06(2)	石錘	9.4	7.6	2.1	166	デイサイト質凝灰岩	
27	85	SBZ	旧河道01 AG05(2)	砥石	9.9	8.9	1.9	189	凝灰質砂岩	
28	86	SBZ	旧河道01 AH06(3) 埋土(粘質土)	砥石	13.65	8.65	3.2	268	凝灰質砂岩	
29	87	SBZ	旧河道01 AH05(1) 埋土(砂層)	砥石	7.3	6.55	2.9	112	砂岩	欠損
30	88	SBZ	旧河道01 AG04(4) 河底直上	不明石製品	6.7	3.1	3.5	88	砂岩	石棒の頭?
31	89	SBZ	旧河道01 AE03(4)	玦状耳飾	2.7	1.7	1.0	7	滑石	半分欠損。前期前葉～中葉。極楽寺遺跡類例。
32	95	SBZ	SX05埋土	焼石	9.9	8.2	4.6	523	砂岩	被熱痕あり 風化
33	96	SBZ	SX05 埋土	砥石 未製品?	20.0	14.2	4.8	1730	頁岩	金属で付けた溝
34	148	SBZ	AH05包含層	剥片	4.4	3.4	1.15	12	珪質頁岩	
35	149	SBZ	AE03包含層	打製石斧	10.8	9.35	3.0	353	砂岩(古期)	上部欠損
36	150	SBZ	Ⅱ地区包含層	磨製石斧	9.9	5.3	2.4	234	ドレライト	刃部欠損 縄文中期末葉
37	151	SBZ	旧河道01 AF04(2)	砥石?	9.7	11.0	4.5	646	流紋岩	古代か中世
38	152	SBZ	旧河道01 AH05(1) 埋土(砂層)	砥石	17.0	14.85	4.45	1164	輝石安山岩	平たい部分と叩いたような部分がある。欠損
39	162	SBZ	Ⅲ地区(土塁状道内)	砥石	9.5	6.3	7.0	307	砂岩	欠損
40	177	SBZ	道埋土 AU16(1)	五輪塔 火輪	13.5	16.2	7.6	1079	石灰質砂岩	
41	208	SBZ	五輪塔集積地	五輪塔 空風輪	16.9	17.9	15.2		流紋岩質凝灰岩	
42	209	SBZ	五輪塔集積地	五輪塔 空風輪	26.0	16.0	13.0		流紋岩質凝灰岩	くびれ部に叩き→横方向の削り
43	210	SBZ	五輪塔集積地	五輪塔 空風輪	22.5	14.8	12.2		流紋岩質凝灰岩	
44	211	SBZ	五輪塔集積地	五輪塔 空風輪	24.3	16.0	14.8		軽石質凝灰岩	
45	212	SBZ	五輪塔集積地	五輪塔 空風輪	22.6	19.7	17.2		流紋岩質凝灰岩	くびれ部に横方向の削り
46	213	SBZ	五輪塔集積地	五輪塔 空風輪	15.6	10.8	11.4		凝灰質砂岩	くびれ部に叩き成形後、横方向の削り
47	214	SBZ	五輪塔集積地	五輪塔 空風輪	16.7	12.4	12.1		流紋岩質凝灰岩	
48	215	SBZ	五輪塔集積地	五輪塔 空風輪	16.6	12.8	12.0		凝灰質砂岩	横方向の削り痕
49	216	SBZ	五輪塔集積地	五輪塔 空風輪	15.7	10.5	9.0		流紋岩質凝灰岩	
50	217	SBZ	五輪塔集積地	五輪塔 火輪	23.7	24.1	14.7		凝灰質砂岩	
51	218	SBZ	五輪塔集積地	五輪塔 火輪	25.4	27.9	19.0		凝灰質砂岩	
52	219	SBZ	五輪塔集積地	五輪塔 火輪	23.7	23.3	15.4		流紋岩質凝灰岩	
53	220	SBZ	五輪塔集積地	五輪塔 水輪	23.4	23.5	14.1		流紋岩質凝灰岩	
54	221	SBZ	五輪塔集積地	五輪塔 水輪	21.5	23.4	15.0		凝灰質礫岩	
55	222	SBZ	五輪塔集積地	五輪塔 地輪	18.2	23.5	20.2		流紋岩質凝灰岩	
56		SBZ	旧河道01 AF04(4) 埋土(粘質土)	不明	14.6	8.0	3.6	528	砂岩(古期)	

表2. 正保寺遺跡の器種別石材組成

	石鏃	石鏃 未製品？	石匙	打製石斧	磨製石斧	敲石	磨石	凹石	石錘	砥石	砥石？	砥石 未製品？	剥片	玦状耳飾	焼石	五輪塔（空風輪）	五輪塔（火輪）	五輪塔（水輪）	五輪塔（地輪）	不明石製品	不明	合計
半深成岩類																						
ドレライト					1																	1
火山岩類																						
流紋岩		1				1					1											3
デイサイト							1		1													2
輝石安山岩				1	2				1	1												5
火山砕屑岩類																						
火山礫凝灰岩（濃飛）				1																		1
流紋岩質凝灰岩																6	1	1	1			9
軽石質凝灰岩																1						1
デイサイト質凝灰岩									1													1
安山岩質凝灰岩									1													1
堆積岩類																						
凝灰質礫岩																		1				1
凝灰質砂岩								1		2						2	2					7
石灰質砂岩																	1					1
砂岩（古期）				1				1													1	3
砂岩						1				2					1					1		5
頁岩									1			1	5									7
珪質頁岩	1		1										3									5
変質岩類																						
変質凝灰岩						1																1
蛇紋岩					1																	1
鉱物																						
滑石														1								1
合計	1	1	1	3	4	3	1	2	5	5	1	1	8	1	1	9	4	2	1	1	1	56

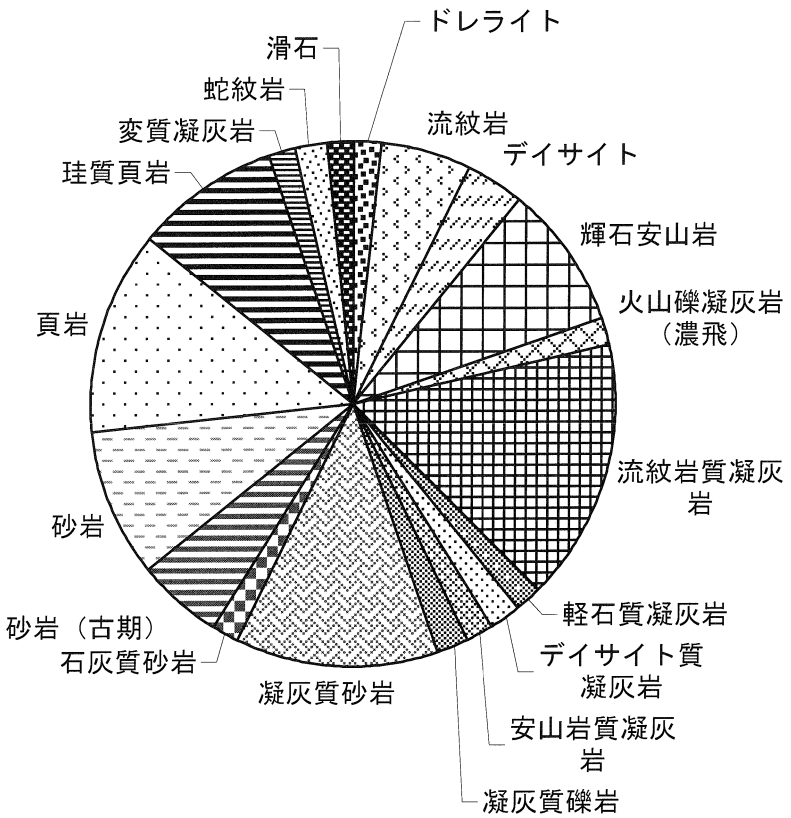
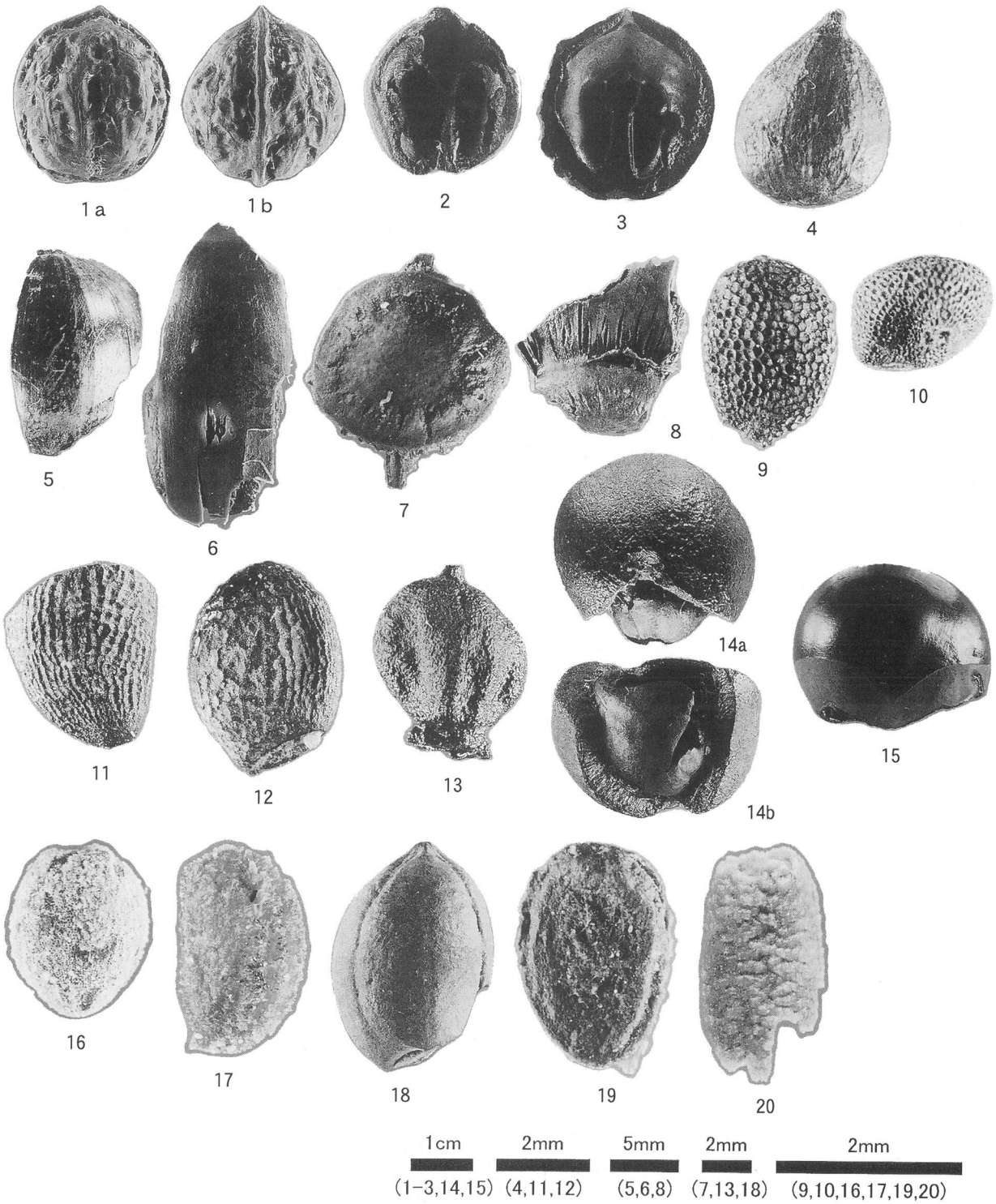


図1.　正保寺遺跡の石材組成

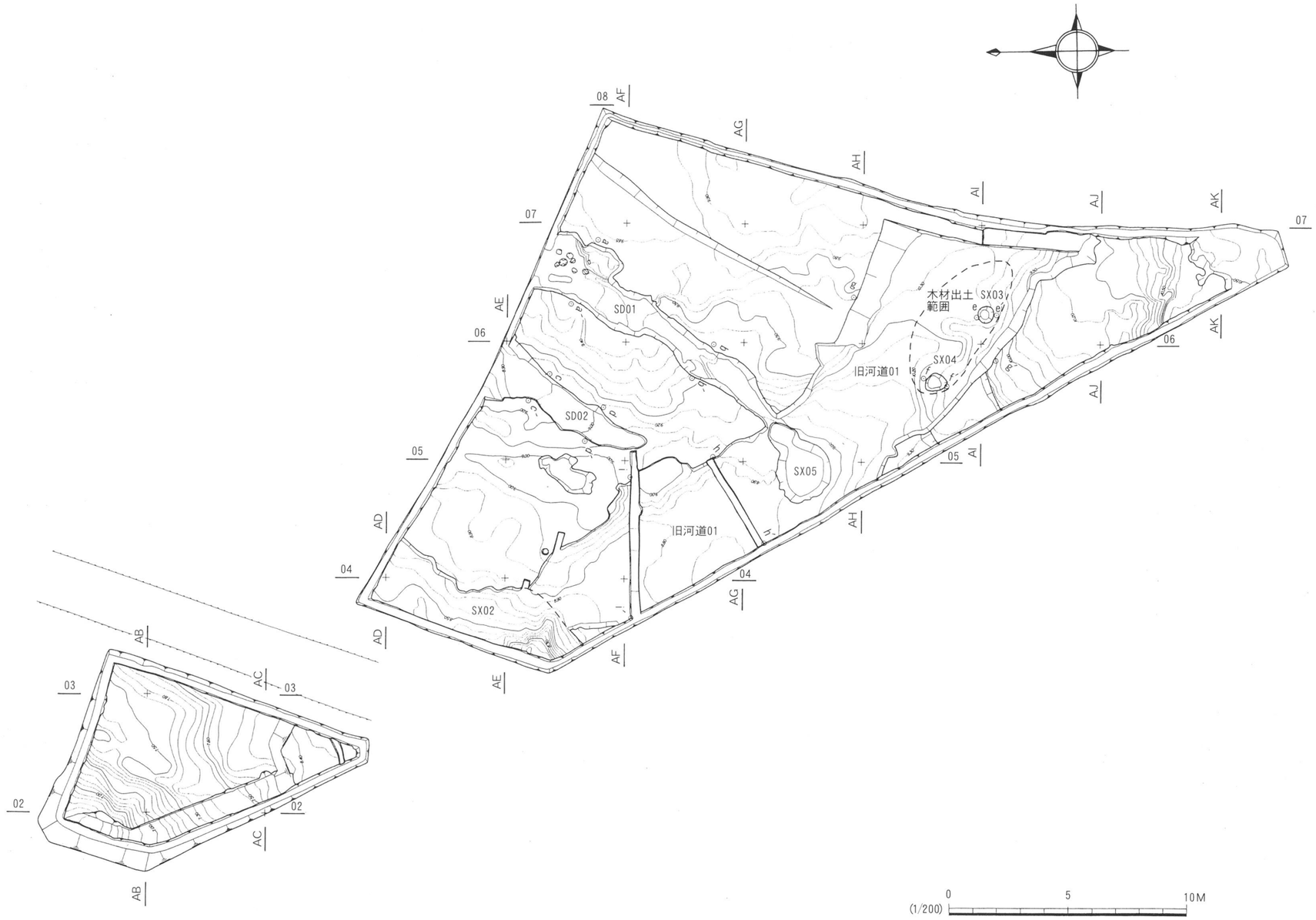
表3. 正保寺遺跡の種実同定結果

		遺跡名	SBZ	SBZ	SBZ	SBZ	
		地区	SX03	AH05(3)	AH05(4)	AH06(2)	
		遺構		旧河道01	旧河道01	旧河道01	
		層位	埋土	埋土(砂層)	埋土(砂層)	埋土(砂層)	
		年月日	20031110	20031010	20031008	20031022	
分類群	部位	備考	−	No124	No80	地点なし	備考
オニグルミ	核	完形	−	−	−	2	
		破片	2	−	−	6	AH06(2)4個食害痕,2個頂部欠損
イヌシデ	果実		5	−	−	−	
コナラ属コナラ亜属	果実	破片	−	−	4	−	
コナラ属アカガシ亜属	果実	破片	2	−	−	−	
コナラ属	果実	破片	1	−	12	−	
ブナ科	果実	破片	2	−	50+	−	コナラ属?
マタタビ属	種子		1	−	−	−	
ヒサカキ属	種子		−	−	2	−	
キハダ	核		1	−	−	−	
サンショウ属	核		1	−	−	−	
トチノキ	果実	破片	−	9	−	10	
	種子	完形	84	1	−	6	AH06(2)1個果皮付着
		破片	140+	12	42	20	
	幼果		−	−	−	2	
イイギリ	種子		3	2	1	−	
タラノキ	核		1	−	2	1	
エゴノキ属	種子		1	−	−	−	
ムラサキシキブ属	核		−	−	−	6	
ニワトコ	核		5	−	−	1	
イネ科	果実		−	−	5	−	1個発芽,後代からの混入?
木材			−	1	8	5	
炭化材			110	25	32	36	
樹皮			−	2	−	−	
不明植物			−	4	−	−	
蘚苔類			42	2	4	3	
昆虫			19	2	9	1	

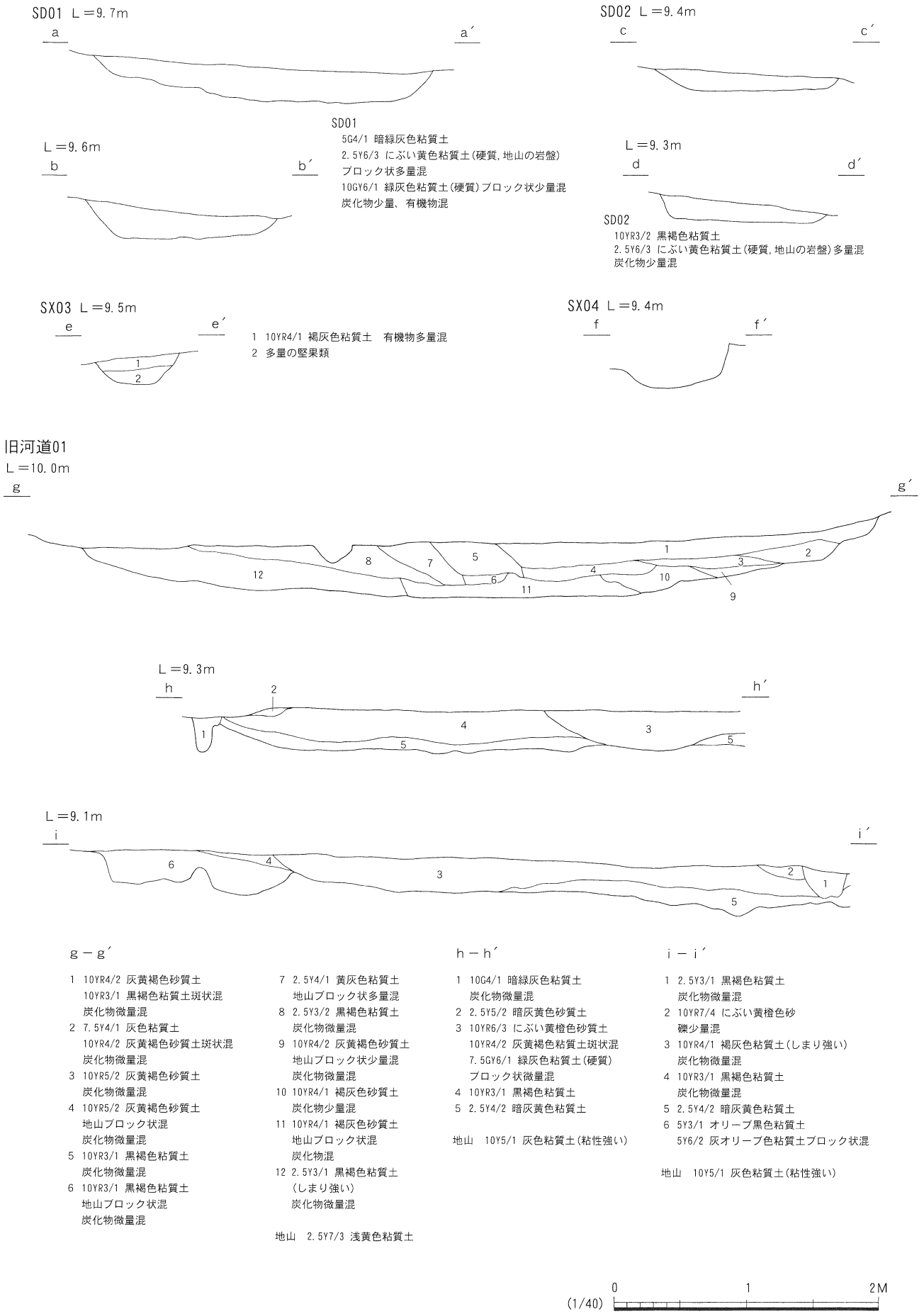
図版 1　種実遺体



1．オニグルミ 核(AH06(2);旧河道01)
2．オニグルミ 核(頂部破損)(AH06(2);旧河道01)
3．オニグルミ 核(食害痕)(AH06(2);旧河道01)
4．イヌシデ 果実(SX03)
5．コナラ属アカガシ亜属 果実(SX03)
6．コナラ属コナラ亜属 果実(AH05-(4);旧河道01)
7．コナラ属 果実(SX03)
8．コナラ属 果実(AH05-(4);旧河道01)
9．マタタビ属 種子(SX03)
10．ヒサカキ属 種子(AH05-(4);旧河道01)
11．キハダ 核(SX03)
12．サンショウ属 核(SX03)
13．トチノキ 幼果(AH06(2);旧河道01)
14．トチノキ 果実・種子(AH06(2);旧河道01)
15．トチノキ 種子(SX03)
16．イイギリ 種子(AH05(3);旧河道01)
17．タラノキ 核(SX03)
18．エゴノキ属 種子(SX03)
19．ムラサキシキブ属 核(AH06(2);旧河道01)
20．ニワトコ 核(SX03)



第４図　Ⅰ・Ⅱ地区　遺構配置図　（S＝1/200）



第５図　Ⅱ地区　SD01・SD02・SX03・SX04・旧河道01土層断面図(Ｓ＝１/40)

SX05

試堀トレンチ

195 96 194 197 192 196 191 190 90 93 94

L＝9.0m

a a′

2.5Y3/1黒褐色シルト　炭化物微量混

(1/40) 0 0.5 1 1.5M

(1/80) 0 1 2 3M

木材出土状況

AH05 AH06 AH07

SX04

樹種サンプル No.3

樹種サンプル No.4

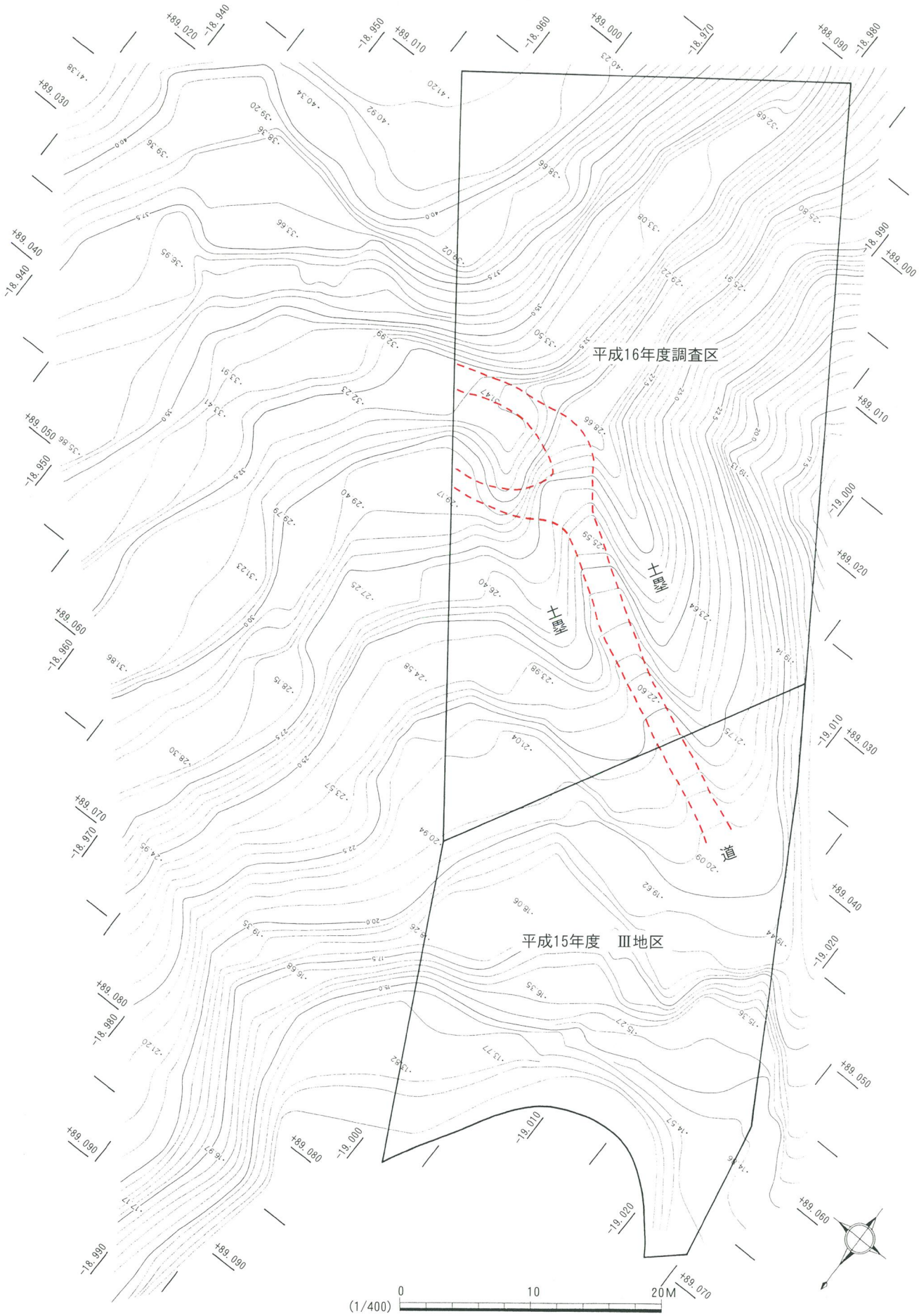
AI05 AI06 AI07

SX03

樹種サンプル No.2

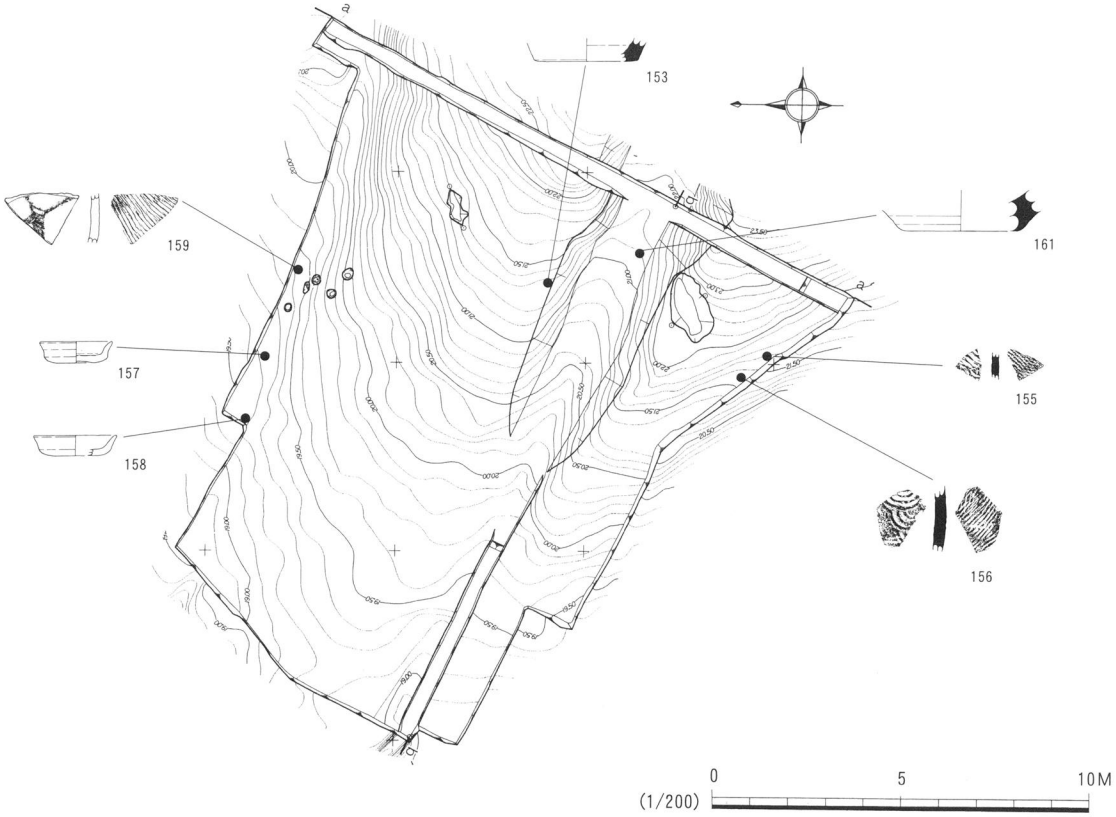
樹種サンプル No.1

第6図　Ⅱ地区　SX05出土状況図・断面図（S＝1/40），
主な遺物の出土位置（90・93・94・96・192・195・197はS＝1/8，190・191・194・196はS＝1/16）
SX03周辺木材出土状況図（S＝1/80）



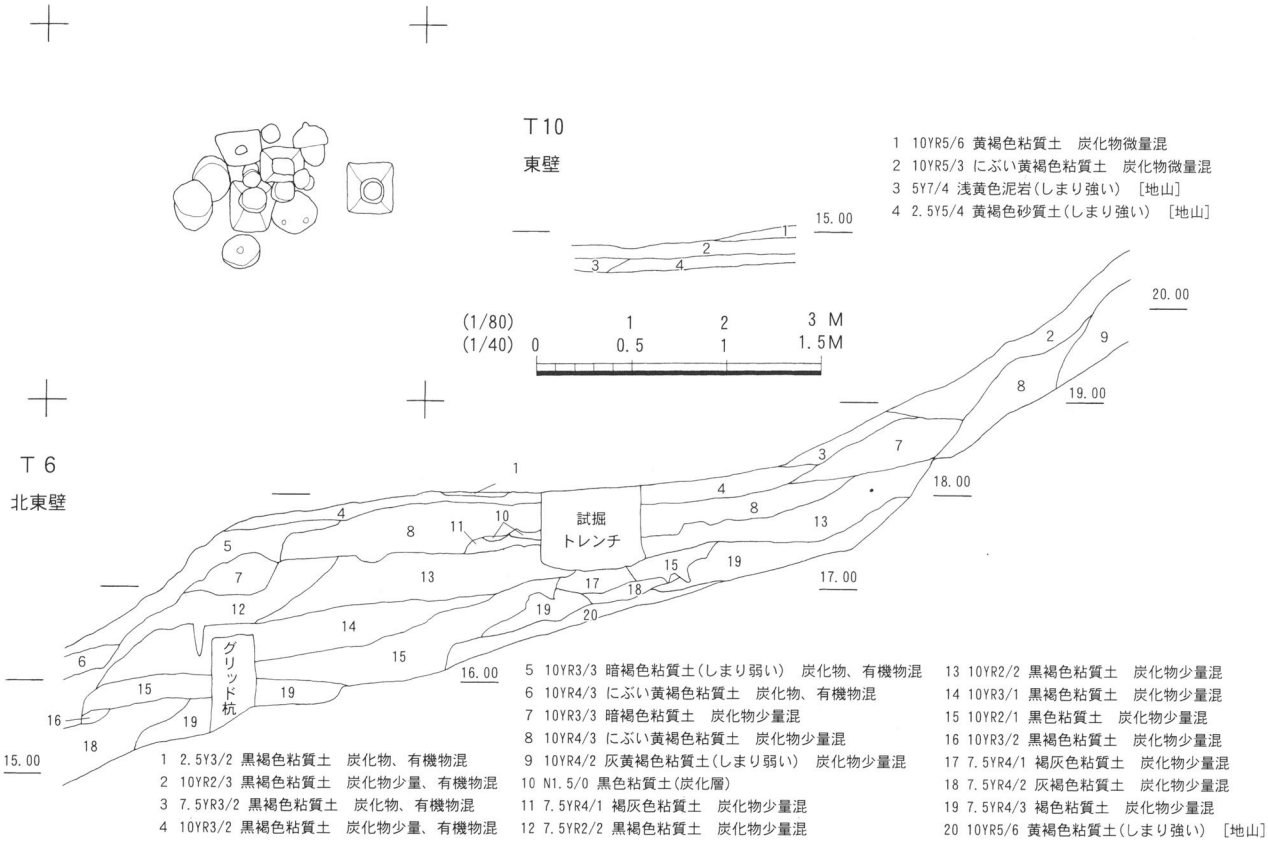
第７図　丘陵斜面調査前測量図（S＝1/400）

第８図　Ⅲ地区　全体図(Ｓ＝１/200)

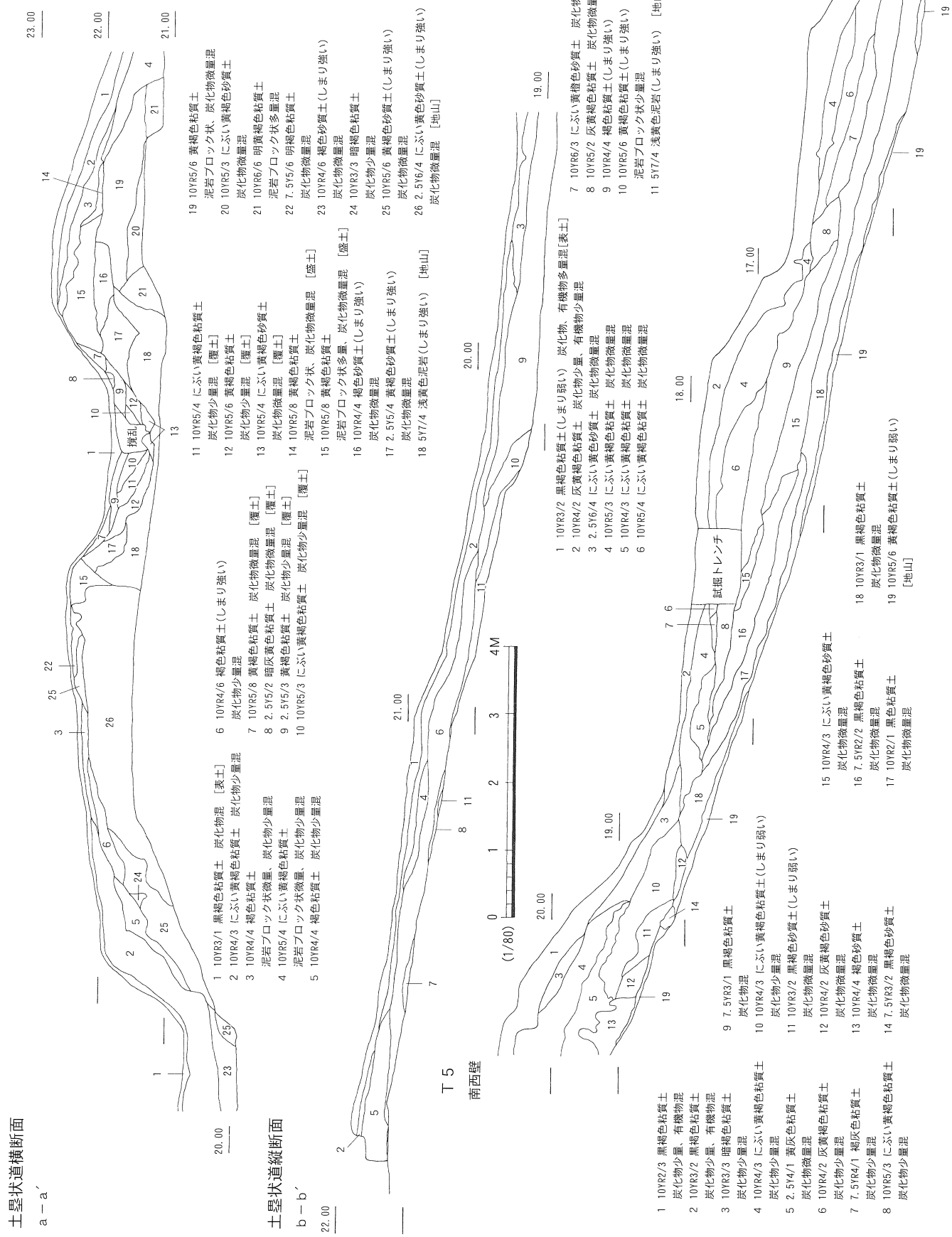


第９図　Ⅲ地区　土塁状道平面図（Ｓ＝１/200），主な遺物の出土位置（Ｓ＝１/8）

五輪塔集積地

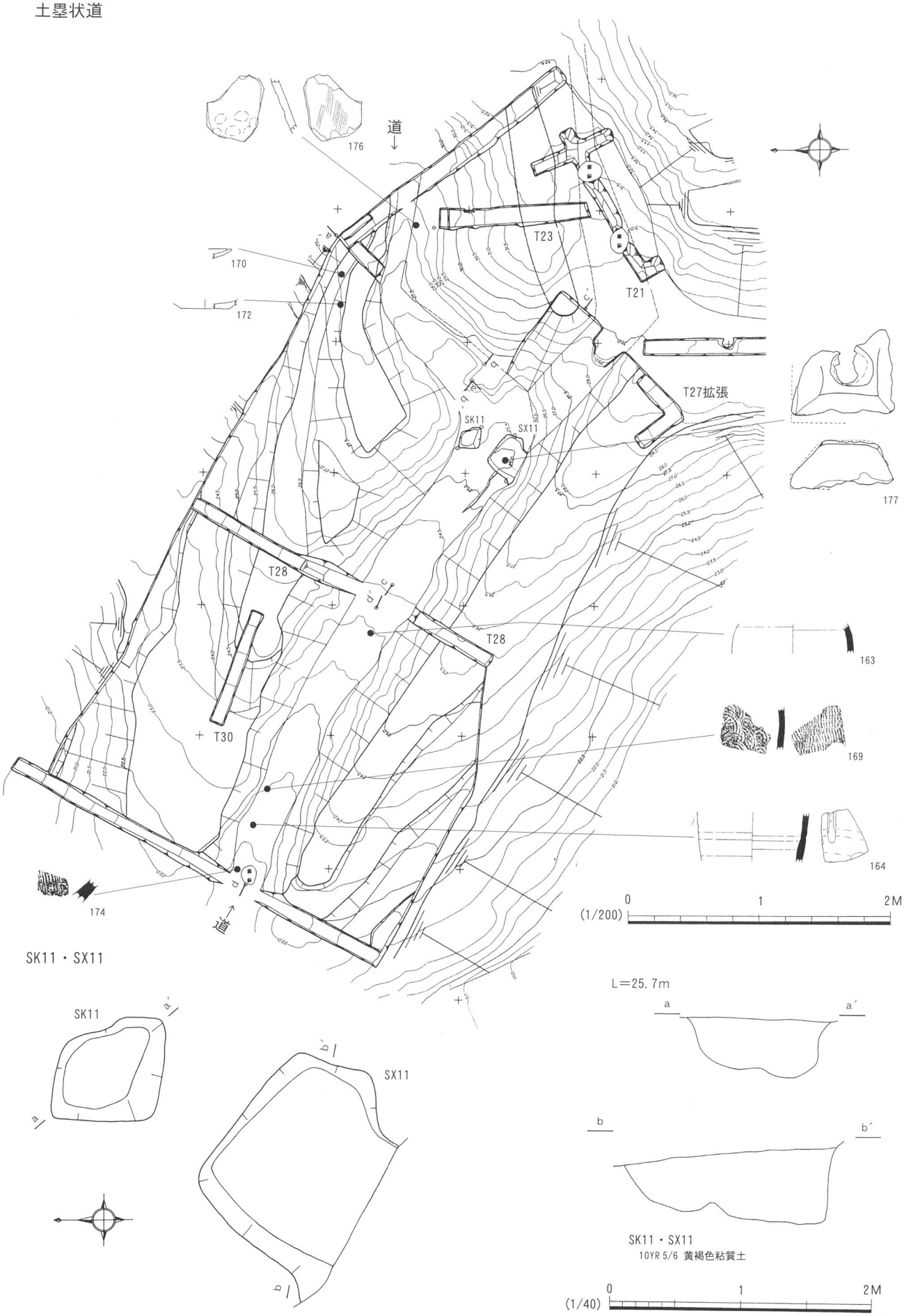


第10図　Ⅲ地区　五輪塔集積地状況図（Ｓ＝１/40），Ｔ６・Ｔ10土層断面図（Ｓ＝１/80）



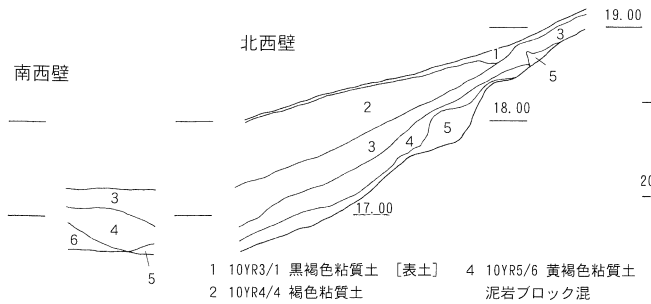
第11図　Ⅲ地区　土塁状道土層断面図(S＝1/80)，Ｔ５土層断面図(S＝1/80)

第12図　平成16年度調査区　全体図（S＝1/200）



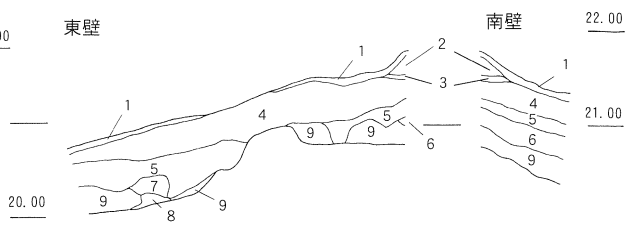
第13図　平成16年度調査区　土塁状道平面図（S＝1/200），主な遺物の出土位置（170・172はS＝1/6, その他はS＝1/8）SK11・SX11平面図・断面図（S＝1/40）

T11



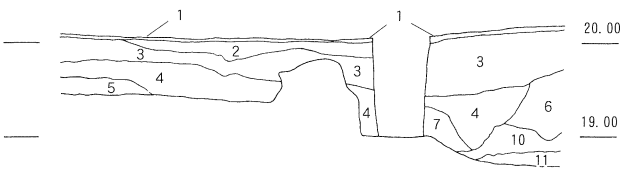
1 10YR3/1 黒褐色粘質土 ［表土］
2 10YR4/4 褐色粘質土
泥岩ブロック微量混
炭化物微量混
3 10YR4/3 にぶい黄褐色粘質土
泥岩ブロック少量混
炭化物微量混
4 10YR5/6 黄褐色粘質土
泥岩ブロック混
炭化物混
5 10YR7/8 黄橙色粘質土
6 2.5Y5/1 黄灰色粘質土
泥岩ブロック微量混

T13



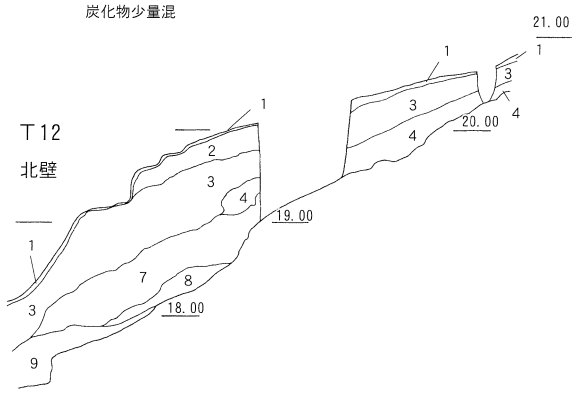
1 10YR3/1 黒褐色粘質土 ［表土］
2 10YR5/4 にぶい黄褐色粘質土
泥岩ブロック混
3 10YR4/4 褐色粘質土
泥岩ブロック微量混
炭化物混
4 10YR4/4 褐色粘質土
泥岩ブロック微量混
炭化物少量混
5 10YR5/6 黄褐色粘質土
泥岩ブロック少量混
炭化物少量混
6 10YR3/3 暗褐色粘質土
泥岩ブロック少量混
7 10YR6/6 明黄褐色微砂
8 10YR7/4 にぶい黄橙色砂質土
9 10YR7/8 黄橙色粘質土

T12

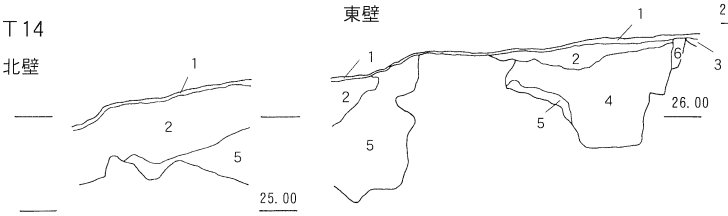


1 10YR3/1 黒褐色粘質土 ［表土］
2 10YR4/4 褐色粘質土
泥岩ブロック微量混
炭化物微量混
橙色スコリア微量混
3 10YR4/4 褐色粘質土
泥岩ブロック少量混
炭化物微量混
4 10YR4/3 にぶい黄褐色粘質土
泥岩ブロック微量混
炭化物微量混
5 10YR5/6 黄褐色粘質土
泥岩ブロック少量混
6 10YR4/4 褐色粘質土
泥岩ブロック少量混
炭化物微量混
7 10YR3/3 暗褐色粘質土
泥岩ブロック微量混
8 10YR5/4 にぶい黄褐色粘質土
泥岩ブロック微量混
9 2.5YR5/2 暗灰黄色粘質土
泥岩ブロック微量混
7.5YR6/8 橙色粘質土混
10 2.5YR5/1 黄灰色粘質土
7.5YR6/8 橙色粘質土混
11 10YR7/4 にぶい黄橙色微砂 ［地山１］

T12

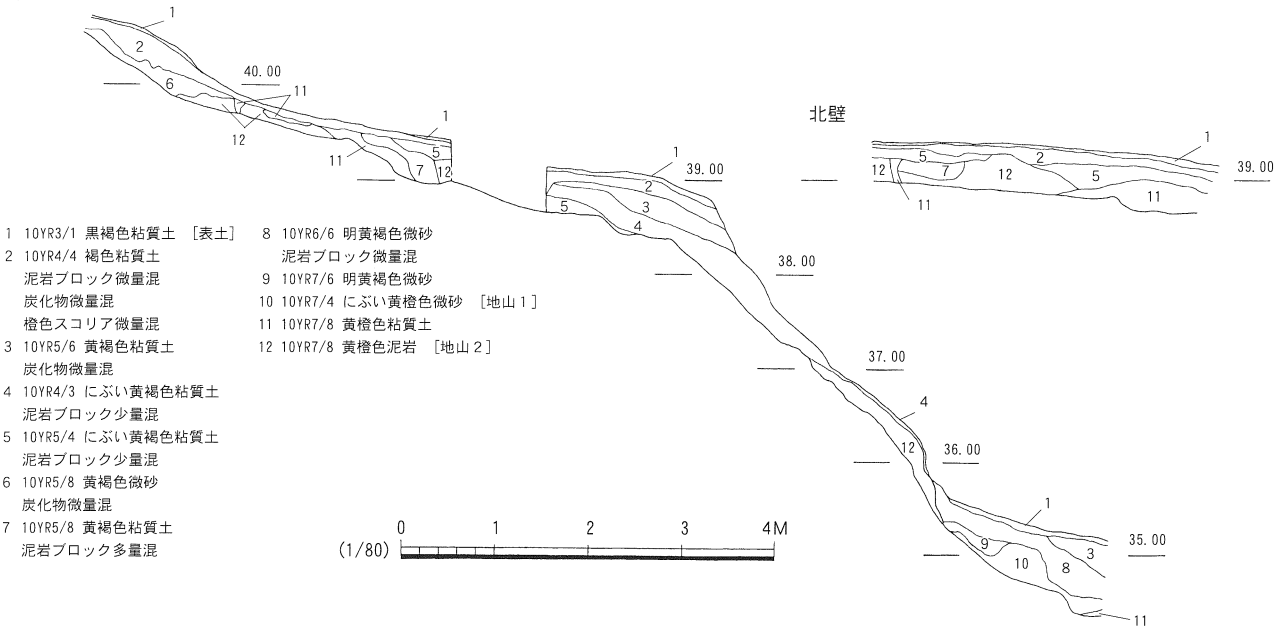


T14



1 10YR3/1 黒褐色粘質土 ［表土］
2 10YR4/4 褐色粘質土
泥岩ブロック微量混
炭化物微量混
3 10YR6/6 明黄褐色微砂
泥岩ブロック微量混
4 10YR7/4 にぶい黄橙色砂質土
5 10YR7/8 黄橙色粘質土
6 10YR7/8 黄橙色泥岩 ［地山２］

T15

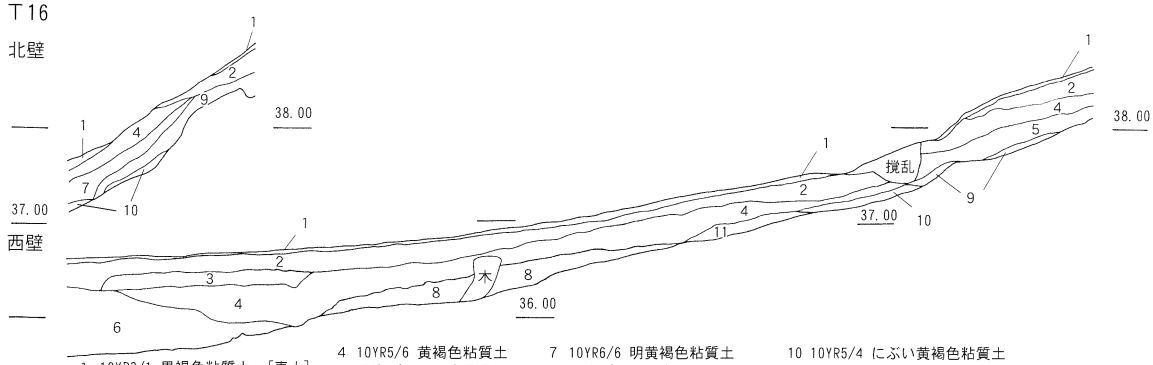


1 10YR3/1 黒褐色粘質土 ［表土］
2 10YR4/4 褐色粘質土
泥岩ブロック微量混
炭化物微量混
橙色スコリア微量混
3 10YR5/6 黄褐色粘質土
炭化物微量混
4 10YR4/3 にぶい黄褐色粘質土
泥岩ブロック少量混
5 10YR5/4 にぶい黄褐色粘質土
泥岩ブロック少量混
6 10YR5/8 黄褐色微砂
炭化物微量混
7 10YR5/8 黄褐色粘質土
泥岩ブロック多量混
8 10YR6/6 明黄褐色微砂
泥岩ブロック微量混
9 10YR7/6 明黄褐色微砂
10 10YR7/4 にぶい黄橙色微砂 ［地山１］
11 10YR7/8 黄橙色粘質土
12 10YR7/8 黄橙色泥岩 ［地山２］

第14図　平成16年度調査区　T11～T15土層断面図（S＝1/80）

T16

北壁

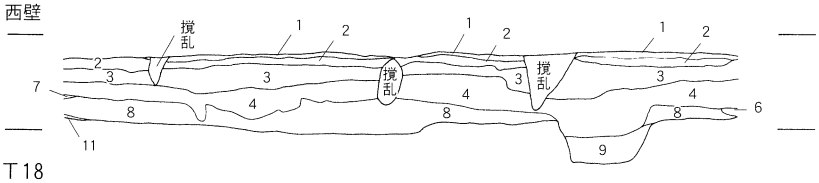


西壁

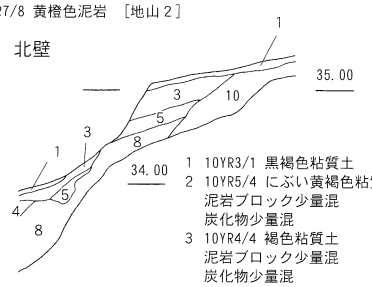
1 10YR3/1 黒褐色粘質土 ［表土］
2 10YR4/4 褐色粘質土
泥岩ブロック微量混
炭化物微量混
3 10YR3/4 暗褐色粘質土
泥岩ブロック微量混
炭化物微量混
4 10YR5/6 黄褐色粘質土
泥岩ブロック少量混
炭化物微量混
5 10YR4/4 褐色粘質土
泥岩ブロック少量混
6 10YR3/4 暗褐色粘質土
泥岩ブロック少量混
炭化物微量混
7 10YR6/6 明黄褐色粘質土
泥岩ブロック多量混
8 10YR5/8 黄褐色粘質土
泥岩ブロック混
炭化物微量混
9 10YR5/8 黄褐色微砂
泥岩ブロック少量混
炭化物微量混
10 10YR5/4 にぶい黄褐色粘質土
泥岩ブロック混
11 10YR7/8 黄橙色泥岩 ［地山２］

T17

西壁



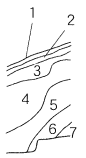
北壁



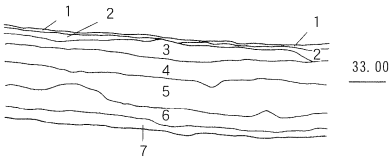
1 10YR3/1 黒褐色粘質土 ［表土］
2 10YR5/4 にぶい黄褐色粘質土
泥岩ブロック少量混
炭化物少量混
3 10YR4/4 褐色粘質土
泥岩ブロック少量混
炭化物少量混
4 10YR3/4 暗褐色粘質土
泥岩ブロック少量混
5 10YR5/6 黄褐色粘質土
泥岩ブロック混
6 10YR4/4 褐色粘質土
泥岩ブロック微量混
7 10YR6/4 にぶい黄橙色粘質土
泥岩ブロック微量混
8 10YR5/6 黄褐色粘質土
泥岩ブロック多量混
9 10YR3/3 暗褐色粘質土
泥岩ブロック多量混
炭化物混
10 10YR6/6 明黄褐色微砂
泥岩ブロック微量混
炭化物微量混
11 10YR7/4 にぶい黄橙色微砂 ［地山１］

T18

北壁



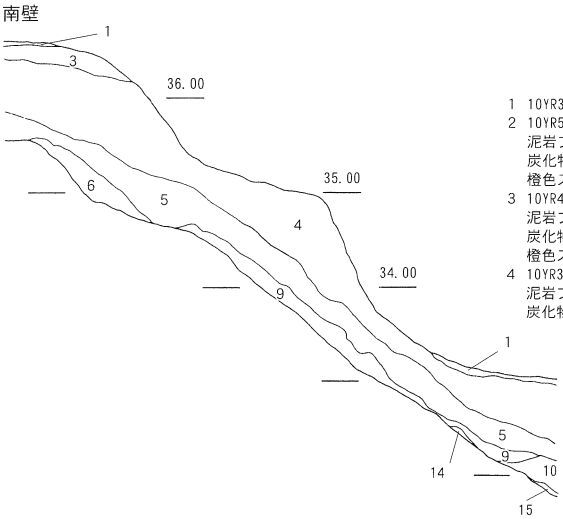
東壁



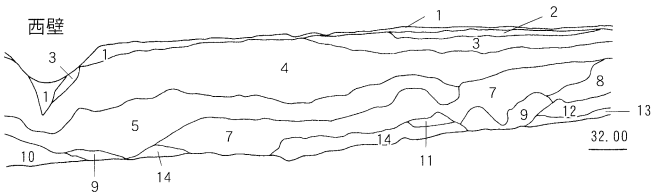
1 10YR3/1 黒褐色粘質土 ［表土］
2 10YR5/4 にぶい黄褐色粘質土
泥岩ブロック少量混
炭化物少量混
橙色スコリア微量混
3 10YR4/4 褐色粘質土
泥岩ブロック少量混
炭化物少量混
4 10YR3/4 暗褐色粘質土
泥岩ブロック混
5 10YR5/6 黄褐色粘質土
泥岩ブロック混
6 10YR6/4 にぶい黄橙色粘質土
泥岩ブロック少量混
7 10YR7/4 にぶい黄橙色微砂 ［地山１］

T19

南壁



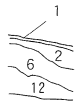
西壁



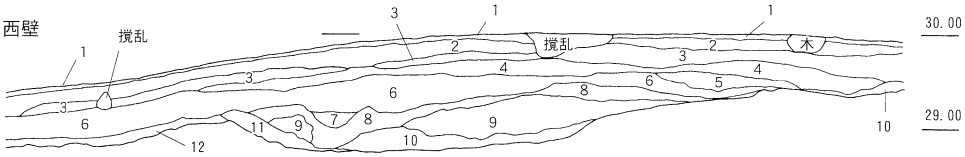
1 10YR3/1 黒褐色粘質土 ［表土］
2 10YR5/4 にぶい黄褐色粘質土
泥岩ブロック微量混
炭化物微量混
橙色スコリア微量混
3 10YR4/4 褐色粘質土
泥岩ブロック微量混
炭化物微量混
橙色スコリア微量混
4 10YR3/4 暗褐色粘質土
泥岩ブロック微量混
炭化物微量混
5 10YR4/3 にぶい黄褐色粘質土
炭化物微量混
6 10YR4/4 褐色粘質土
微砂ブロック少量混
7 10YR3/2 黒褐色粘質土
泥岩ブロック微量混
8 10YR4/4 褐色粘質土
炭化物微量混
9 10YR3/3 暗褐色粘質土
微砂ブロック混
泥岩ブロック混
10 10YR2/3 黒褐色粘質土
微砂ブロック少量混
泥岩ブロック微量混
11 10YR3/4 暗褐色粘質土
地山ブロック微量混
炭化物微量混
12 10YR5/4 にぶい黄褐色粘質土
泥岩ブロック微量混
13 10YR5/6 黄褐色粘質土
泥岩ブロック少量混
14 10YR7/4 にぶい黄橙色微砂 ［地山１］
15 10YR7/8 黄橙色泥岩 ［地山２］

T20

南壁



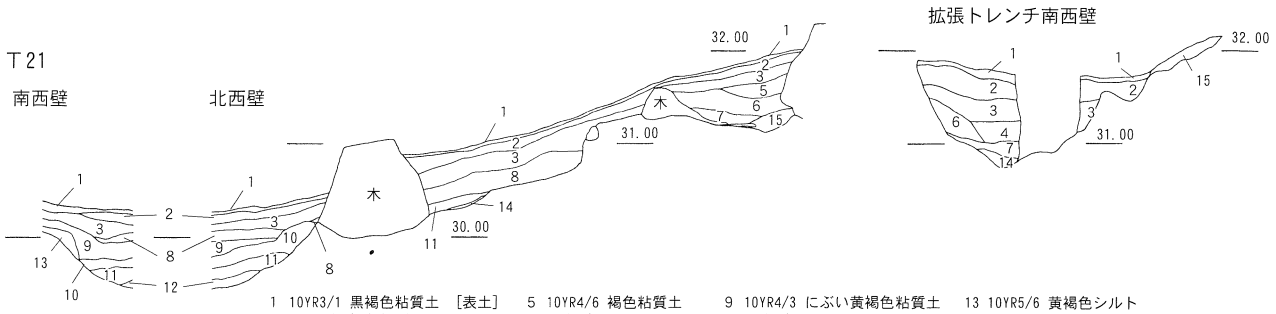
西壁



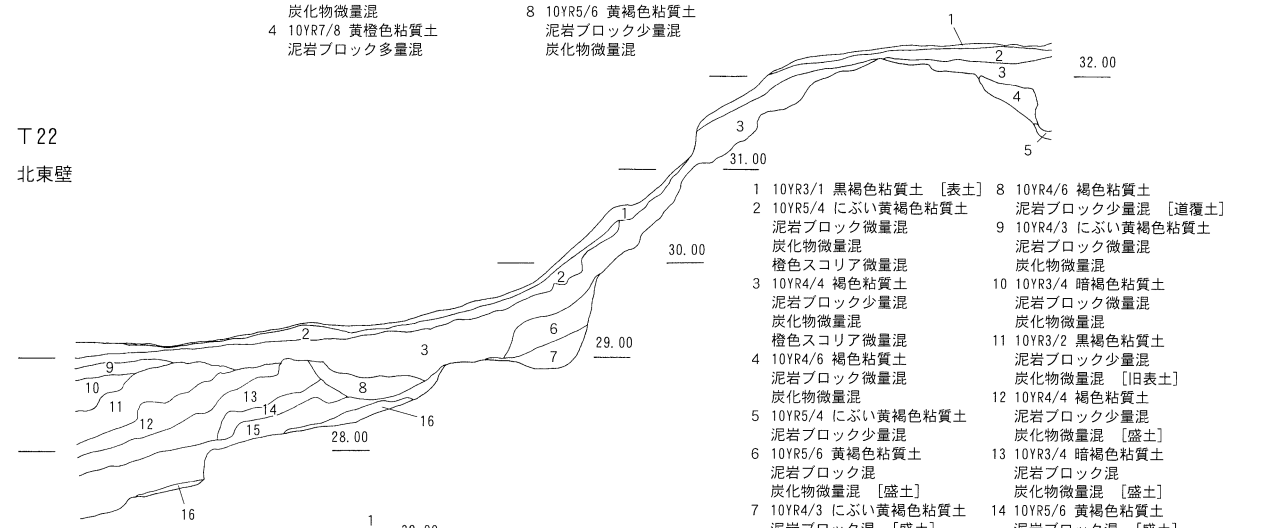
1 10YR3/1 黒褐色粘質土 ［表土］
2 10YR4/4 褐色粘質土
泥岩ブロック少量混
炭化物微量混
橙色スコリア微量混
3 10YR4/4 褐色粘質土
炭化物微量混
4 10YR3/4 暗褐色粘質土
泥岩ブロック微量混
炭化物微量混
5 10YR5/6 黄褐色粘質土
泥岩ブロック微量混
6 10YR3/3 暗褐色粘質土
微砂ブロック少量混
炭化物微量混
7 10YR3/4 暗褐色粘質土
微砂ブロック多量混
8 10YR3/2 黒褐色粘質土
泥岩ブロック少量混
炭化物微量混
9 10YR4/6 褐色粘質土
泥岩ブロック混
10 10YR5/4 にぶい黄褐色粘質土
泥岩ブロック微量混
炭化物微量混
11 10YR6/6 明黄褐色微砂
12 10YR7/4 にぶい黄橙色微砂 ［地山１］

(1/80) 0 1 2 3 4M

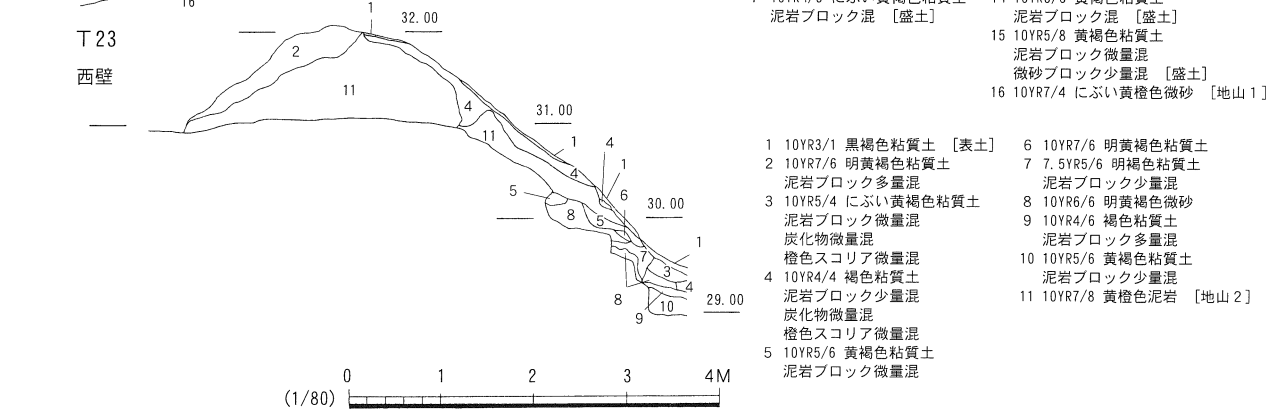
第15図　平成16年度調査区　T16～T20土層断面図（S＝1/80）



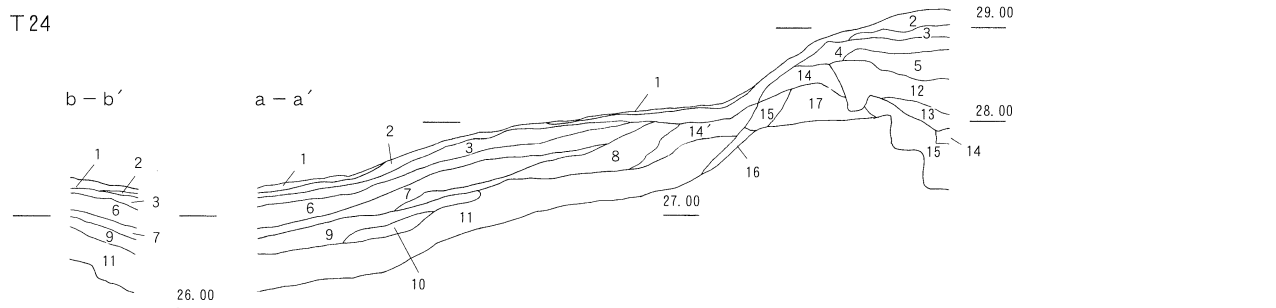
1 10YR3/1 黒褐色粘質土 ［表土］
2 10YR4/4 褐色粘質土
泥岩ブロック少量混
炭化物微量混
橙色スコリア微量混
3 10YR4/4 褐色粘質土
泥岩ブロック混
炭化物微量混
4 10YR7/8 黄橙色粘質土
泥岩ブロック多量混
5 10YR4/6 褐色粘質土
泥岩ブロック微量混
炭化物微量混
6 10YR4/6 褐色粘質土
泥岩ブロック混
7 10YR3/4 暗褐色粘質土
泥岩ブロック少量混
8 10YR5/6 黄褐色粘質土
泥岩ブロック少量混
炭化物微量混
9 10YR4/3 にぶい黄褐色粘質土
泥岩ブロック混
炭化物微量混
10 10YR6/6 明黄褐色粘質土
泥岩ブロック少量混
11 10YR4/6 褐色粘質土
12 10YR7/8 黄橙色粘質土
13 10YR5/6 黄褐色シルト
泥岩ブロック微量混
14 10YR7/4 にぶい黄橙色微砂 ［地山１］
15 10YR7/8 黄橙色泥岩 ［地山２］



1 10YR3/1 黒褐色粘質土 ［表土］
2 10YR5/4 にぶい黄褐色粘質土
泥岩ブロック微量混
炭化物微量混
橙色スコリア微量混
3 10YR4/4 褐色粘質土
泥岩ブロック少量混
炭化物微量混
橙色スコリア微量混
4 10YR4/6 褐色粘質土
泥岩ブロック微量混
炭化物微量混
5 10YR5/4 にぶい黄褐色粘質土
泥岩ブロック少量混
6 10YR5/6 黄褐色粘質土
泥岩ブロック混
炭化物微量混 ［盛土］
7 10YR4/3 にぶい黄褐色粘質土
泥岩ブロック混 ［盛土］
8 10YR4/6 褐色粘質土
泥岩ブロック少量混 ［道覆土］
9 10YR4/3 にぶい黄褐色粘質土
泥岩ブロック微量混
炭化物微量混
10 10YR3/4 暗褐色粘質土
泥岩ブロック微量混
炭化物微量混
11 10YR3/2 黒褐色粘質土
泥岩ブロック少量混
炭化物微量混 ［旧表土］
12 10YR4/4 褐色粘質土
泥岩ブロック少量混
炭化物微量混 ［盛土］
13 10YR3/4 暗褐色粘質土
泥岩ブロック混
炭化物微量混 ［盛土］
14 10YR5/6 黄褐色粘質土
泥岩ブロック混 ［盛土］
15 10YR5/8 黄褐色粘質土
泥岩ブロック微量混
微砂ブロック少量混 ［盛土］
16 10YR7/4 にぶい黄橙色微砂 ［地山１］

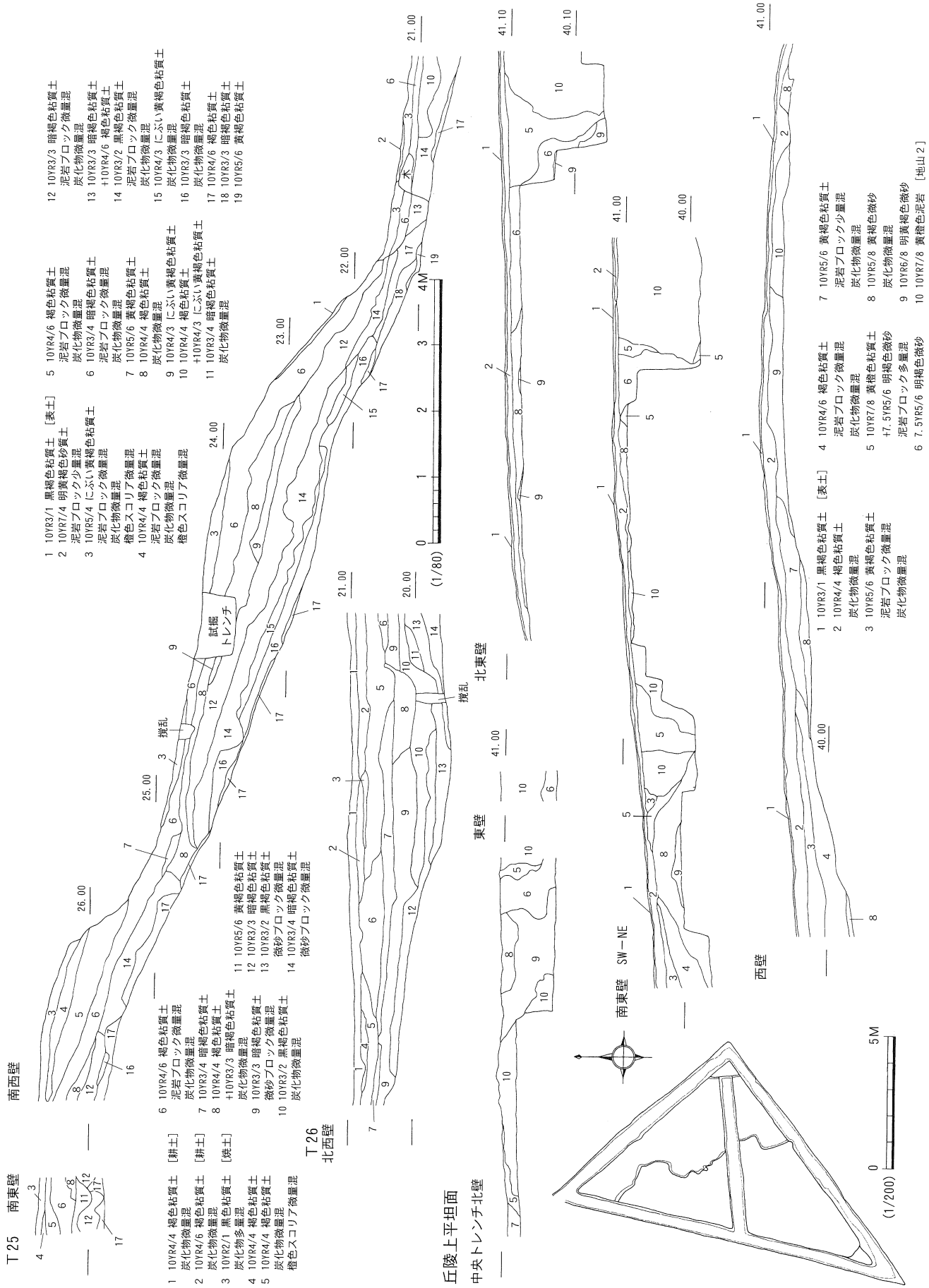


1 10YR3/1 黒褐色粘質土 ［表土］
2 10YR7/6 明黄褐色粘質土
泥岩ブロック多量混
3 10YR5/4 にぶい黄褐色粘質土
泥岩ブロック微量混
炭化物微量混
橙色スコリア微量混
4 10YR4/4 褐色粘質土
泥岩ブロック少量混
炭化物微量混
橙色スコリア微量混
5 10YR5/6 黄褐色粘質土
泥岩ブロック微量混
6 10YR7/6 明黄褐色粘質土
7 7.5YR5/6 明褐色粘質土
泥岩ブロック少量混
8 10YR6/6 明黄褐色微砂
9 10YR4/6 褐色粘質土
泥岩ブロック多量混
10 10YR5/6 黄褐色粘質土
泥岩ブロック少量混
11 10YR7/8 黄橙色泥岩 ［地山２］



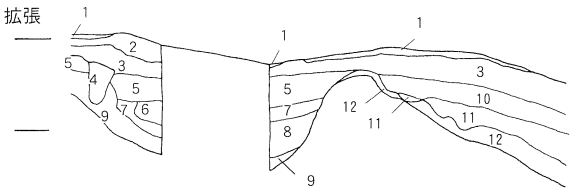
1 10YR3/1 黒褐色粘質土 ［表土］
2 10YR5/4 にぶい黄褐色粘質土
泥岩ブロック微量混
炭化物微量混
橙色スコリア微量混
3 10YR4/4 褐色粘質土
泥岩ブロック少量混
炭化物微量混
橙色スコリア微量混
4 10YR4/3 にぶい黄褐色粘質土
泥岩ブロック微量混
炭化物微量混
5 10YR3/4 暗褐色粘質土
泥岩ブロック微量混
炭化物微量混
6 10YR5/6 黄褐色粘質土
泥岩ブロック少量混
7 10YR5/8 黄褐色粘質土
泥岩ブロック多量混
8 10YR3/4 暗褐色粘質土
泥岩ブロック混
炭化物少量混
9 10YR4/4 褐色粘質土
泥岩ブロック少量混
炭化物微量混
10 10YR3/4 暗褐色粘質土
泥岩ブロック微量混
炭化物少量混
11 10YR4/6 褐色粘質土 ［道覆土］
泥岩ブロック少量混
炭化物微量混
12 10YR3/2 黒褐色粘質土 ［旧表土］
泥岩ブロック少量混
炭化物微量混
13 10YR4/4 褐色粘質土
泥岩ブロック少量混
炭化物微量混
14 10YR3/4 暗褐色粘質土 ［盛土］
泥岩ブロック混
炭化物微量混
14′ 10YR3/4 暗褐色粘質土
泥岩ブロック混
炭化物微量混
15 10YR5/6 黄褐色粘質土 ［盛土］
泥岩ブロック混
16 10YR6/8 明黄褐色微砂 ［盛土］
泥岩ブロック多量混
17 10YR5/8 黄褐色粘質土 ［盛土］
泥岩ブロック混

第16図　平成16年度調査区　T21～T24土層断面図（S＝1/80）



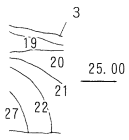
第17図　平成16年度調査区　T25・T26土層断面図(S＝1/80)
丘陵上平坦面平面図(S＝1/200)・土層断面図(S＝1/80)

T27 拡張

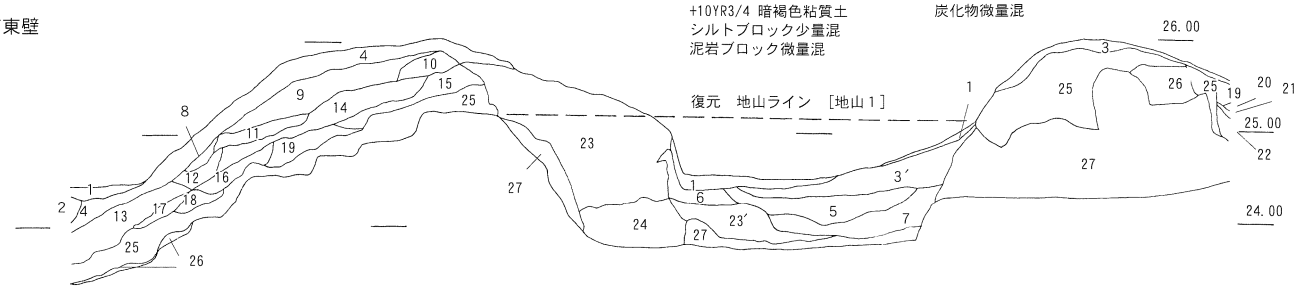


1 10YR3/1 黒褐色粘質土 ［表土］
2 10YR5/4 にぶい黄褐色粘質土
泥岩ブロック微量混
炭化物微量混
橙色スコリア微量混
3 10YR4/4 褐色粘質土
泥岩ブロック少量混
炭化物微量混
橙色スコリア微量混
4 10YR3/3 暗褐色粘質土
泥岩ブロック少量混
炭化物微量混
5 10YR4/3 にぶい黄褐色粘質土
泥岩ブロック少量混
炭化物微量混
6 10YR4/4 褐色粘質土
+10YR3/4 暗褐色粘質土
シルトブロック少量混
泥岩ブロック微量混
7 10YR5/6 黄褐色粘質土
泥岩ブロック微量混
8 10YR3/4 暗褐色粘質土
微砂ブロック微量混
泥岩ブロック微量混
9 10YR6/6 明黄褐色粘質土
泥岩ブロック少量混
10 10YR3/3 暗褐色粘質土
微砂ブロック少量混
泥岩ブロック微量混
炭化物微量混
11 10YR4/6 褐色粘質土
微砂ブロック混
泥岩ブロック微量混
炭化物微量混
12 10YR7/4 にぶい黄橙色微砂 ［地山１］
炭化物微量混

T28
南西壁

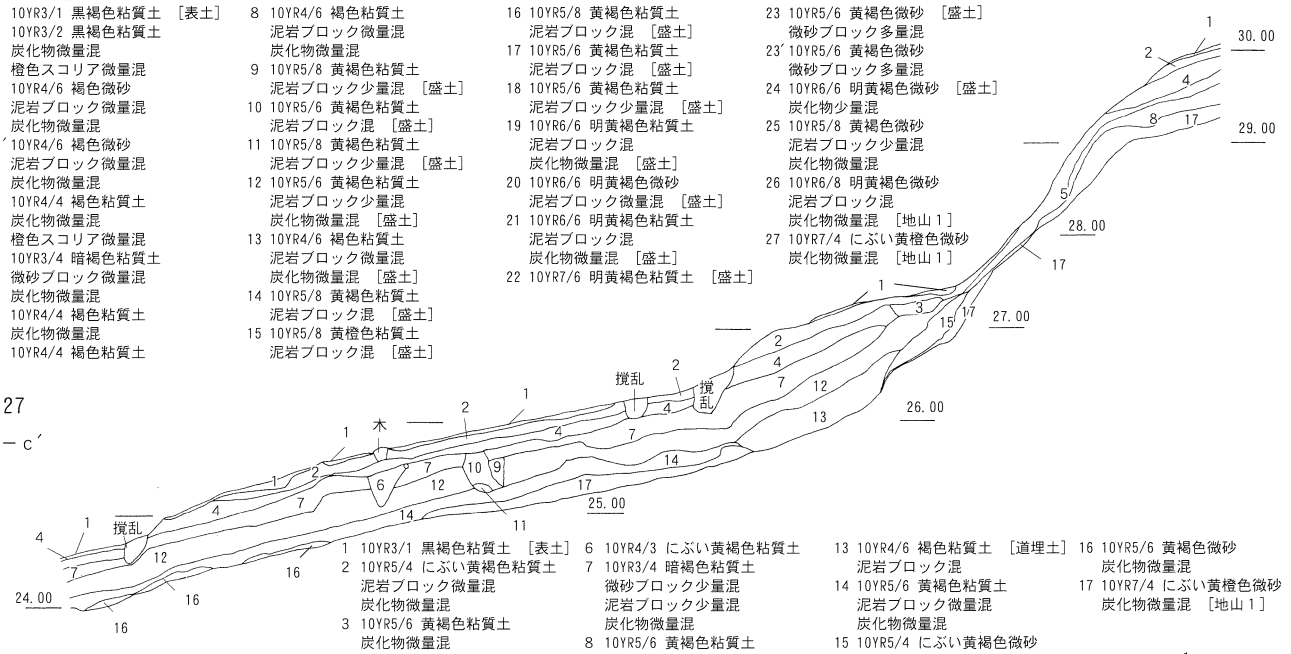


T28
南東壁



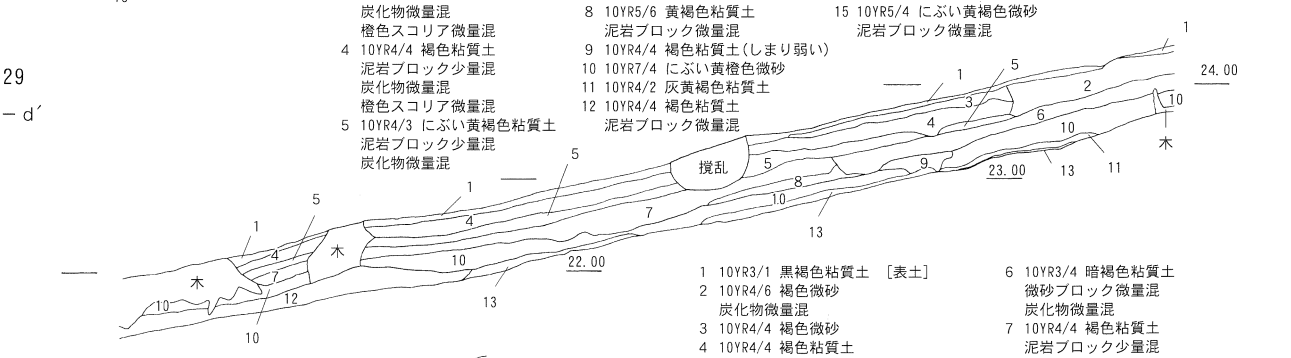
1 10YR3/1 黒褐色粘質土 ［表土］
2 10YR3/2 黒褐色粘質土
炭化物微量混
橙色スコリア微量混
3 10YR4/6 褐色微砂
泥岩ブロック微量混
炭化物微量混
3′10YR4/6 褐色微砂
泥岩ブロック微量混
炭化物微量混
4 10YR4/4 褐色粘質土
炭化物微量混
橙色スコリア微量混
5 10YR3/4 暗褐色粘質土
微砂ブロック微量混
炭化物微量混
6 10YR4/4 褐色粘質土
炭化物微量混
7 10YR4/4 褐色粘質土
8 10YR4/6 褐色粘質土
泥岩ブロック微量混
炭化物微量混
9 10YR5/8 黄褐色粘質土
泥岩ブロック少量混 ［盛土］
10 10YR5/6 黄褐色粘質土
泥岩ブロック混 ［盛土］
11 10YR5/8 黄褐色粘質土
泥岩ブロック少量混 ［盛土］
12 10YR5/6 黄褐色粘質土
泥岩ブロック少量混
炭化物微量混 ［盛土］
13 10YR4/6 褐色粘質土
泥岩ブロック微量混
炭化物微量混 ［盛土］
14 10YR5/8 黄褐色粘質土
泥岩ブロック混 ［盛土］
15 10YR5/8 黄橙色粘質土
泥岩ブロック混 ［盛土］
16 10YR5/8 黄褐色粘質土
泥岩ブロック混 ［盛土］
17 10YR5/6 黄褐色粘質土
泥岩ブロック混 ［盛土］
18 10YR5/6 黄褐色粘質土
泥岩ブロック少量混 ［盛土］
19 10YR6/6 明黄褐色粘質土
泥岩ブロック混
炭化物微量混 ［盛土］
20 10YR5/6 明黄褐色微砂
泥岩ブロック微量混 ［盛土］
21 10YR6/6 明黄褐色粘質土
泥岩ブロック混
炭化物微量混 ［盛土］
22 10YR7/6 明黄褐色粘質土 ［盛土］
23 10YR5/6 黄褐色微砂 ［盛土］
微砂ブロック多量混
23′10YR5/6 黄褐色微砂
微砂ブロック多量混
24 10YR6/6 明黄褐色微砂 ［盛土］
炭化物少量混
25 10YR5/8 黄褐色微砂
泥岩ブロック少量混
炭化物微量混
26 10YR6/8 明黄褐色微砂
泥岩ブロック混
炭化物微量混 ［地山１］
27 10YR7/4 にぶい黄橙色微砂
炭化物微量混 ［地山１］

T27
c－c′

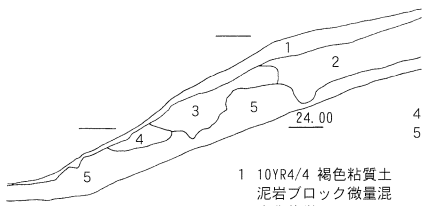


1 10YR3/1 黒褐色粘質土 ［表土］
2 10YR5/4 にぶい黄褐色粘質土
泥岩ブロック微量混
炭化物微量混
3 10YR5/6 黄褐色粘質土
炭化物微量混
橙色スコリア微量混
4 10YR4/4 褐色粘質土
泥岩ブロック少量混
炭化物微量混
橙色スコリア微量混
5 10YR4/3 にぶい黄褐色粘質土
泥岩ブロック少量混
炭化物微量混
6 10YR4/3 にぶい黄褐色粘質土
7 10YR3/4 暗褐色粘質土
微砂ブロック少量混
泥岩ブロック少量混
炭化物微量混
8 10YR5/6 黄褐色粘質土
泥岩ブロック微量混
9 10YR4/4 褐色粘質土(しまり弱い)
10 10YR7/4 にぶい黄橙色微砂
11 10YR4/2 灰黄褐色粘質土
12 10YR4/4 褐色粘質土
泥岩ブロック微量混
13 10YR4/6 褐色粘質土 ［道理土］
泥岩ブロック混
14 10YR5/6 黄褐色粘質土
泥岩ブロック微量混
炭化物微量混
15 10YR5/4 にぶい黄褐色微砂
泥岩ブロック微量混
16 10YR5/6 黄褐色微砂
炭化物微量混
17 10YR7/4 にぶい黄橙色微砂
炭化物微量混 ［地山１］

T29
d－d′



T30
北壁



1 10YR4/4 褐色粘質土
泥岩ブロック微量混
炭化物微量混
橙色スコリア微量混
2 10YR5/6 黄褐色粘質土
微砂ブロック混
炭化物少量混 ［盛土］
3 10YR4/6 褐色粘質土
微砂ブロック多量混
炭化物少量混 ［盛土］
4 10YR6/6 明黄褐色微砂
5 10YR7/4 にぶい黄橙色微砂 ［地山１］
炭化物微量混

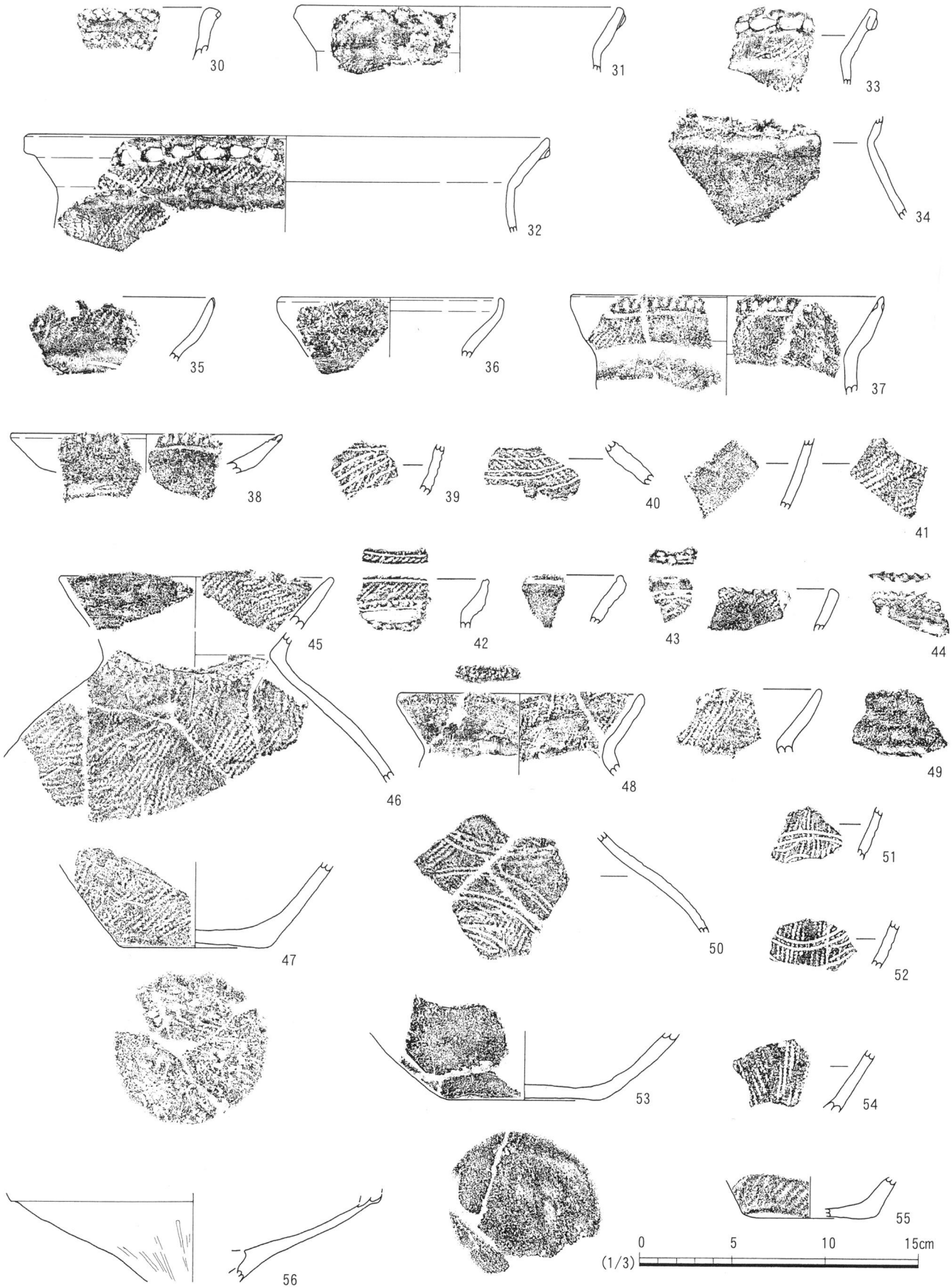
1 10YR3/1 黒褐色粘質土 ［表土］
2 10YR4/6 褐色微砂
炭化物微量混
3 10YR4/4 褐色微砂
4 10YR4/4 褐色粘質土
微砂ブロック少量混
炭化物微量混
5 10YR5/4 にぶい黄褐色粘質土
微砂ブロック少量混
炭化物微量混
6 10YR3/4 暗褐色粘質土
微砂ブロック微量混
炭化物微量混
7 10YR4/4 褐色粘質土
泥岩ブロック少量混
炭化物微量混
8 10YR5/6 黄褐色粘質土
泥岩ブロック多量混
9 10YR4/3 にぶい黄褐色粘質土
10 10YR4/4 褐色粘質土
泥岩ブロック微量混
11 10YR5/6 黄褐色粘質土
微砂ブロック少量混
泥岩ブロック微量混
炭化物微量混
12 10YR4/6 褐色粘質土
泥岩ブロック微量混
13 10YR7/4 にぶい黄橙色微砂 ［地山１］
炭化物微量混

(1/80)　0　1　2　3　4M

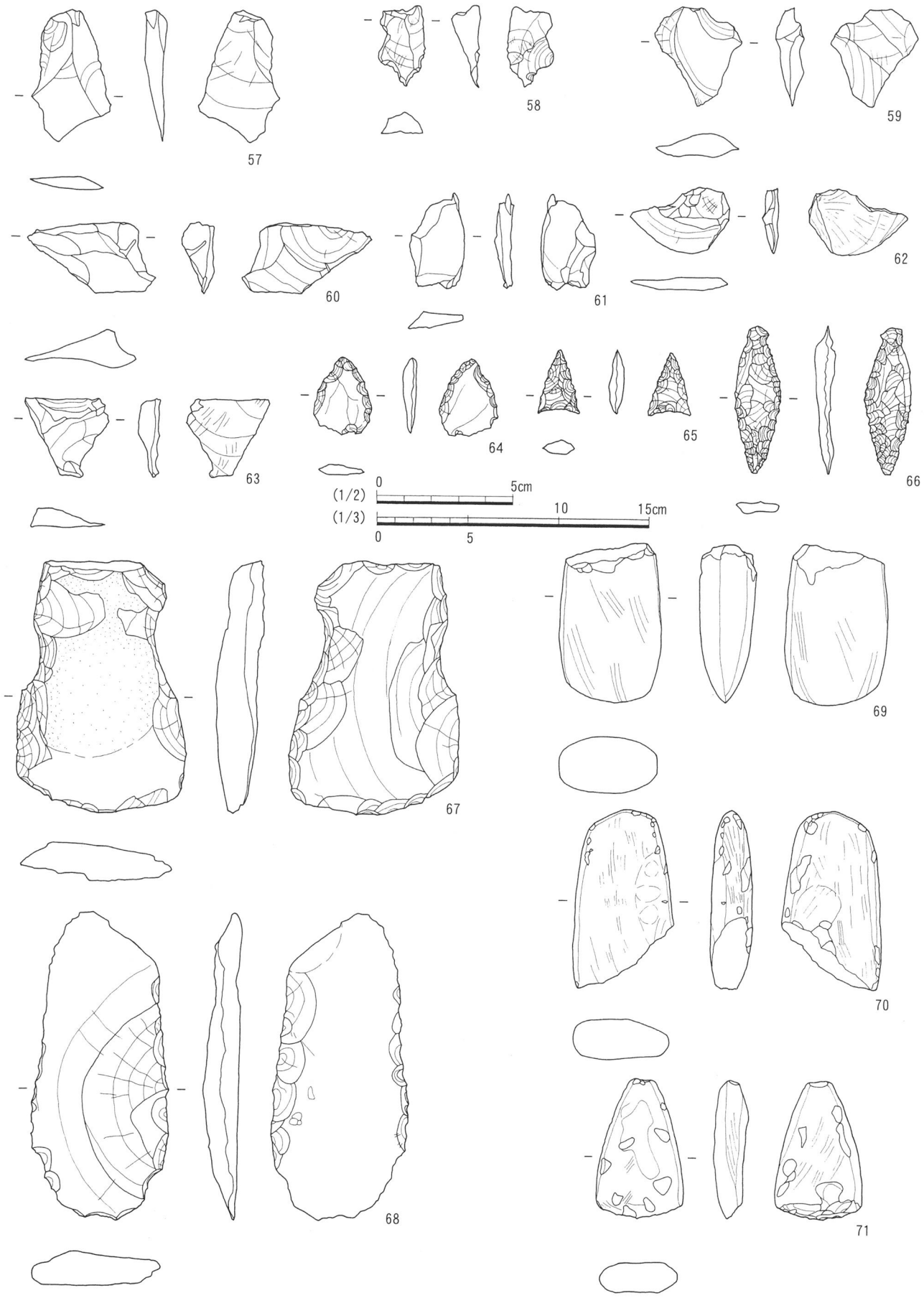
第18図　平成16年度調査区　T27～T30土層断面図(S＝1/80)

旧河道01

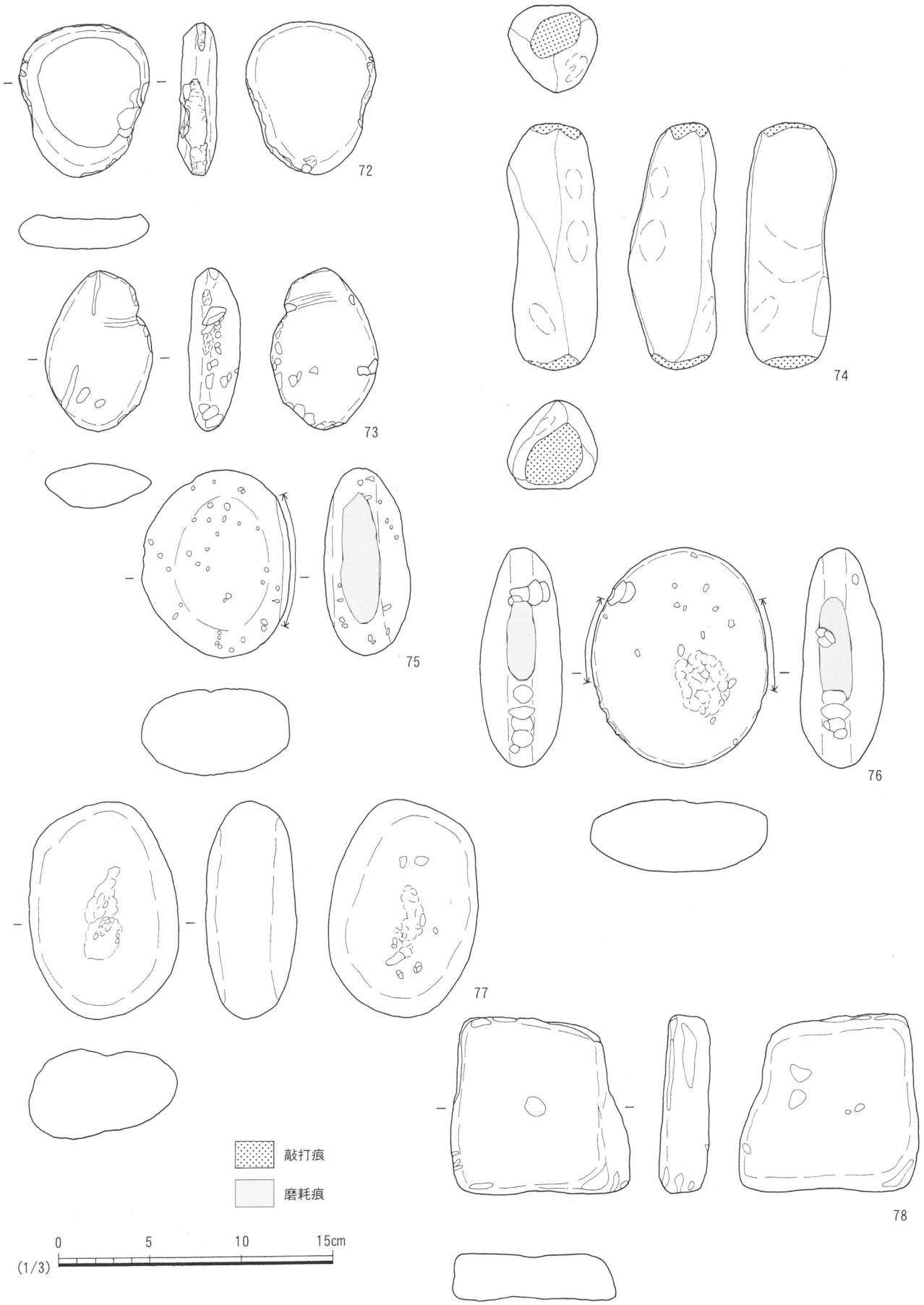
第19図　遺物実測図（1）　（S＝1/3）



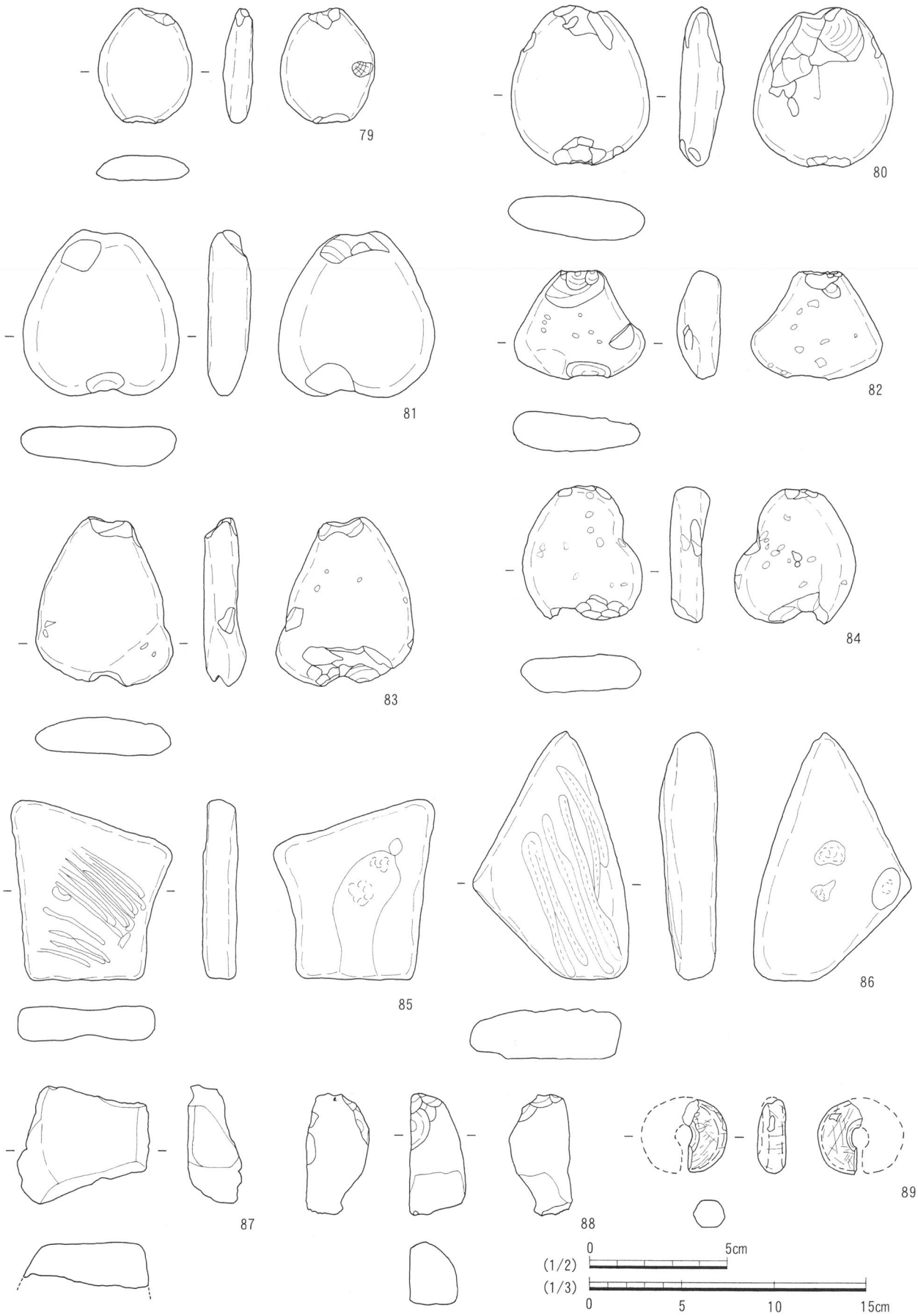
第20図　遺物実測図（２）　（S＝1/3）



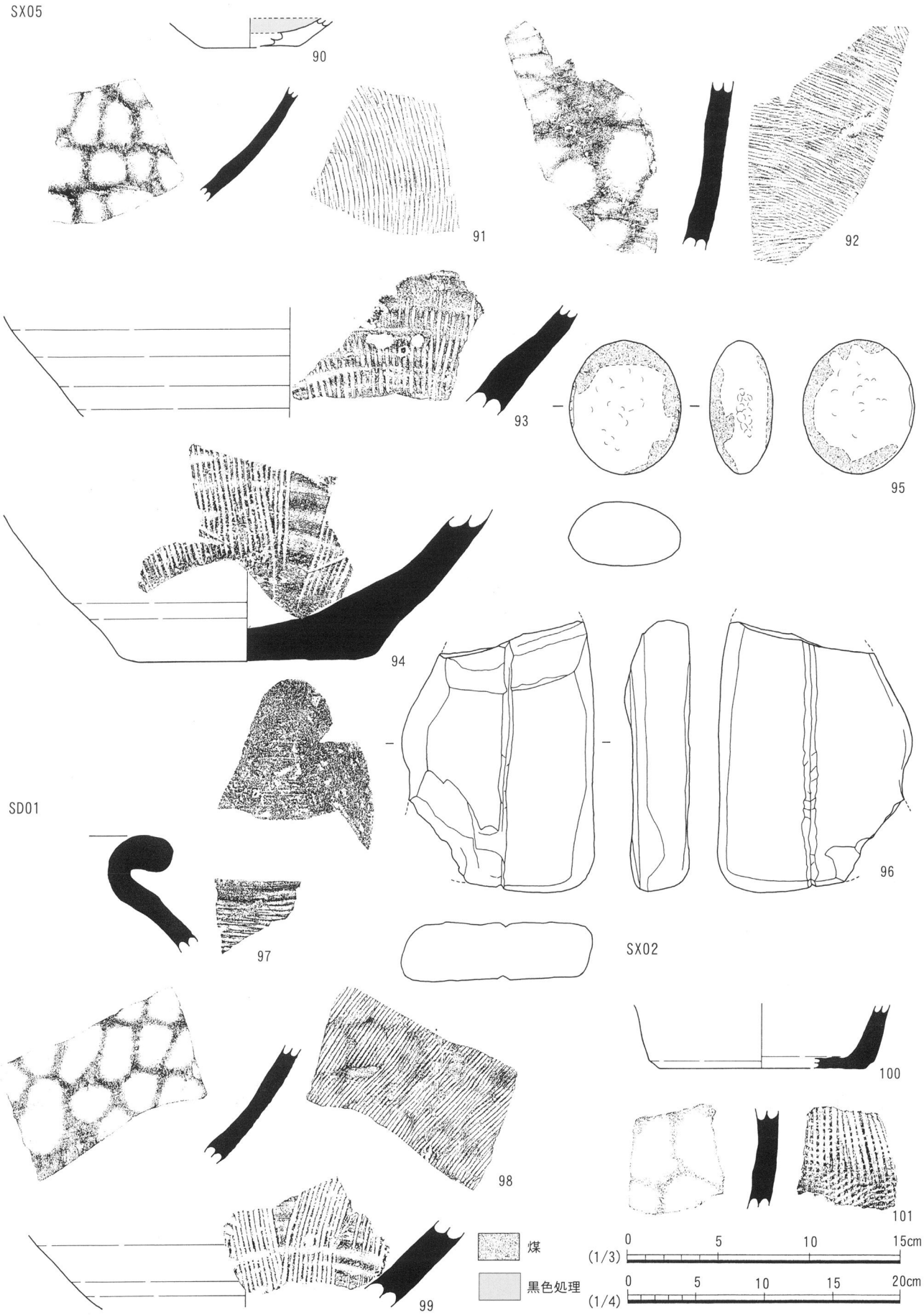
第21図　遺物実測図（３）　(57～66はＳ＝1/2，67～71はＳ＝1/3)



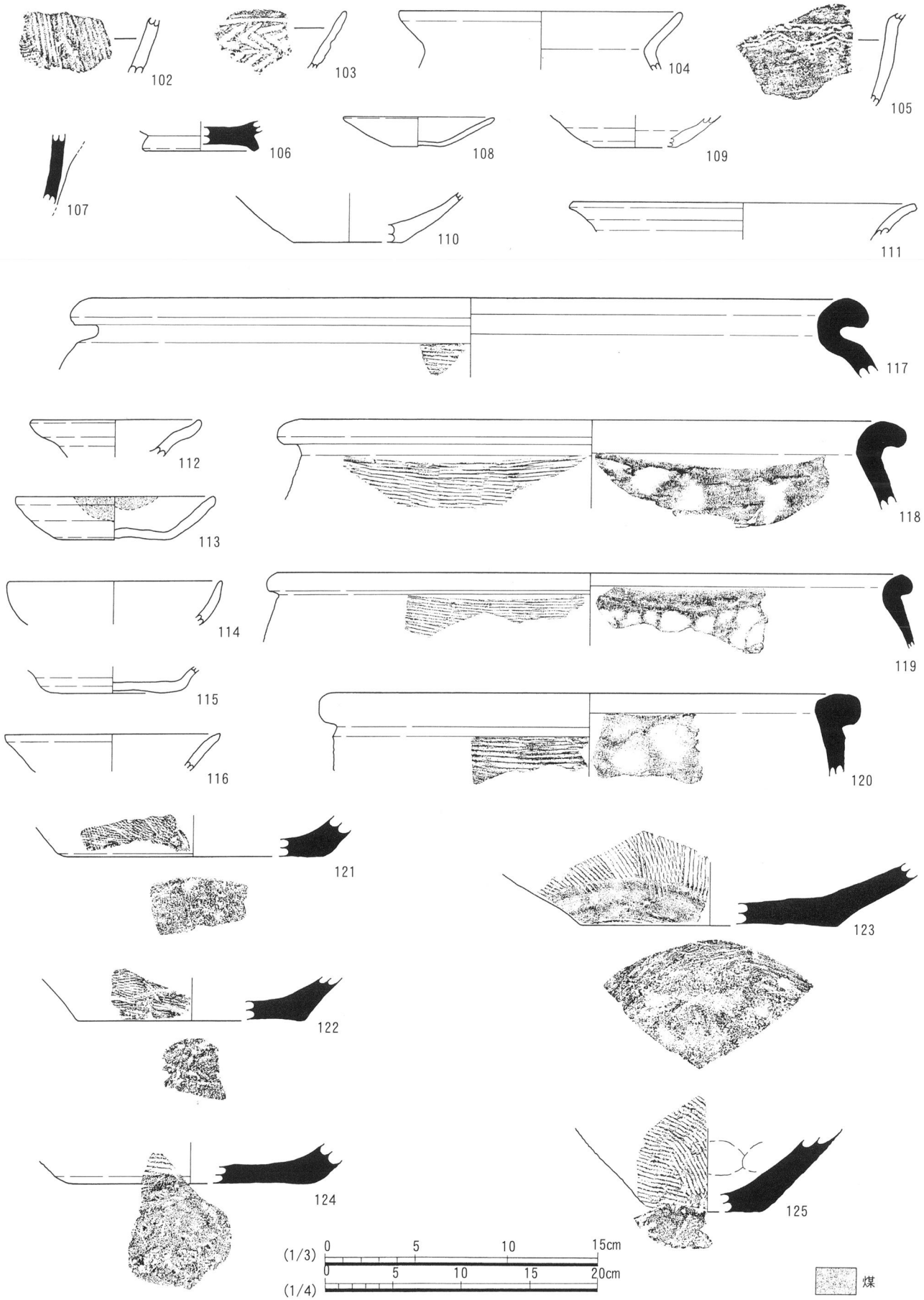
第22図　遺物実測図（4）　（S＝1/3）



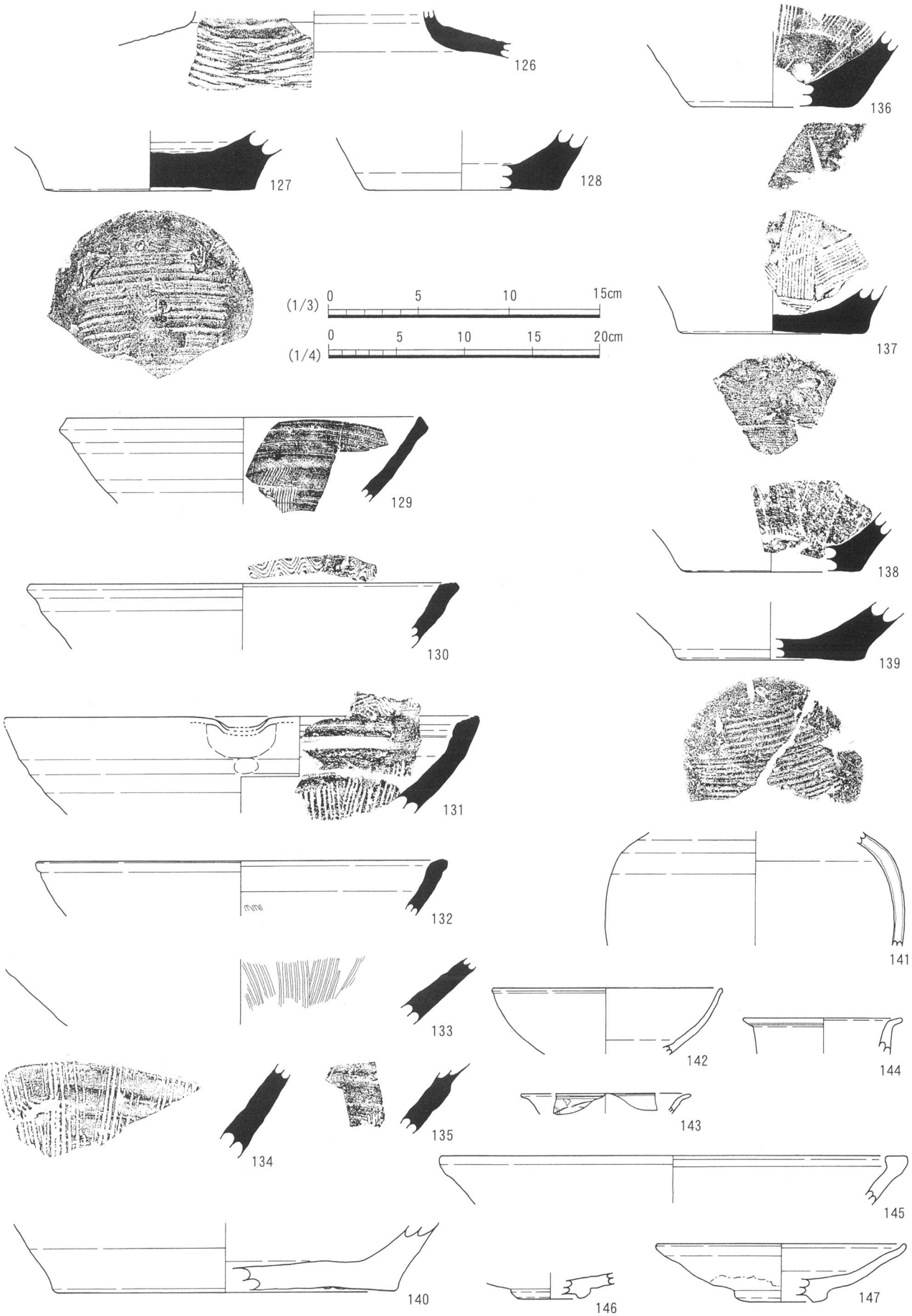
第23図　遺物実測図（５）　（89はＳ＝1/2，その他はＳ＝1/3）



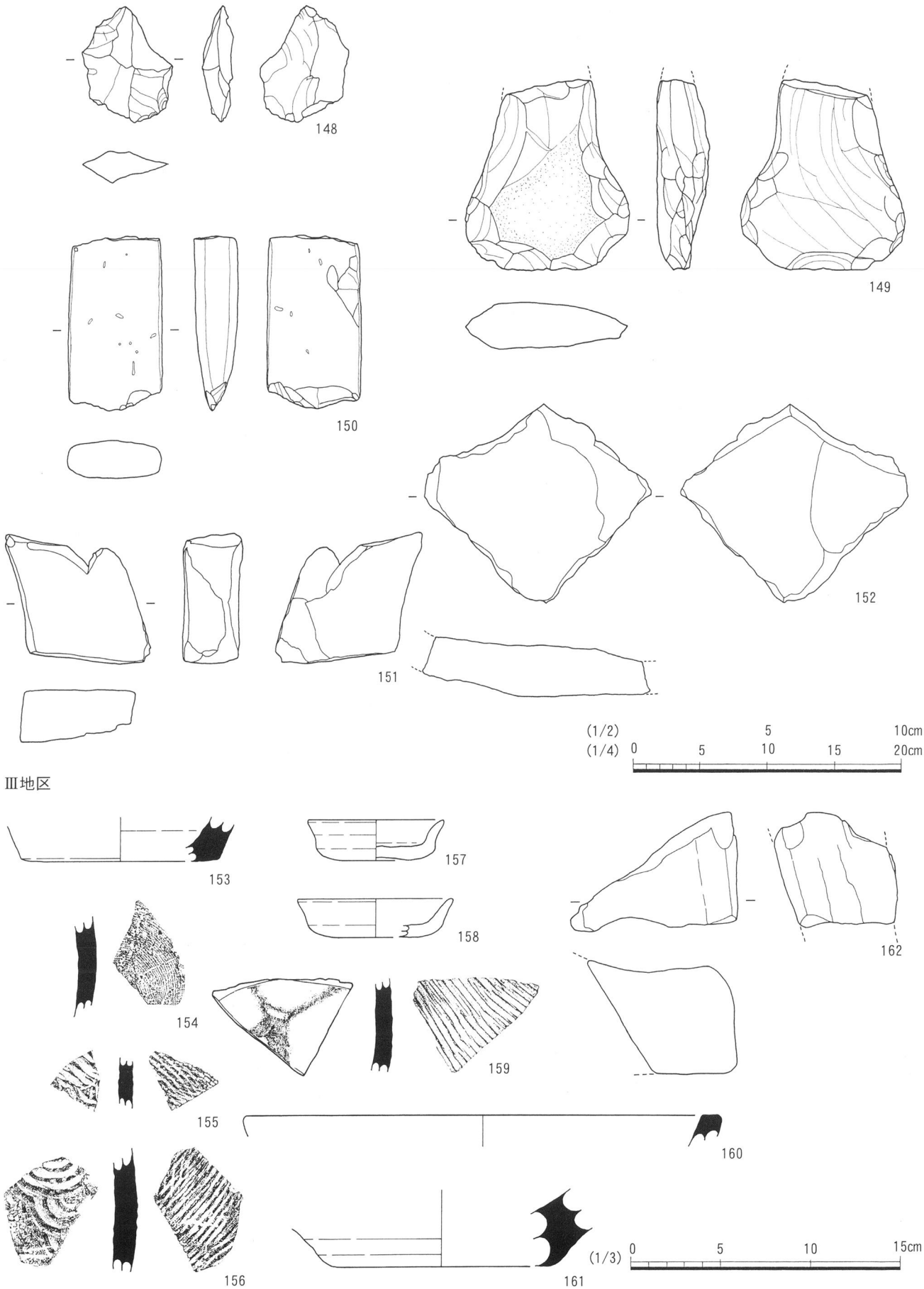
第24図　遺物実測図（6）　（91・92・95・96・98はＳ＝1/4，その他はＳ＝1/3）



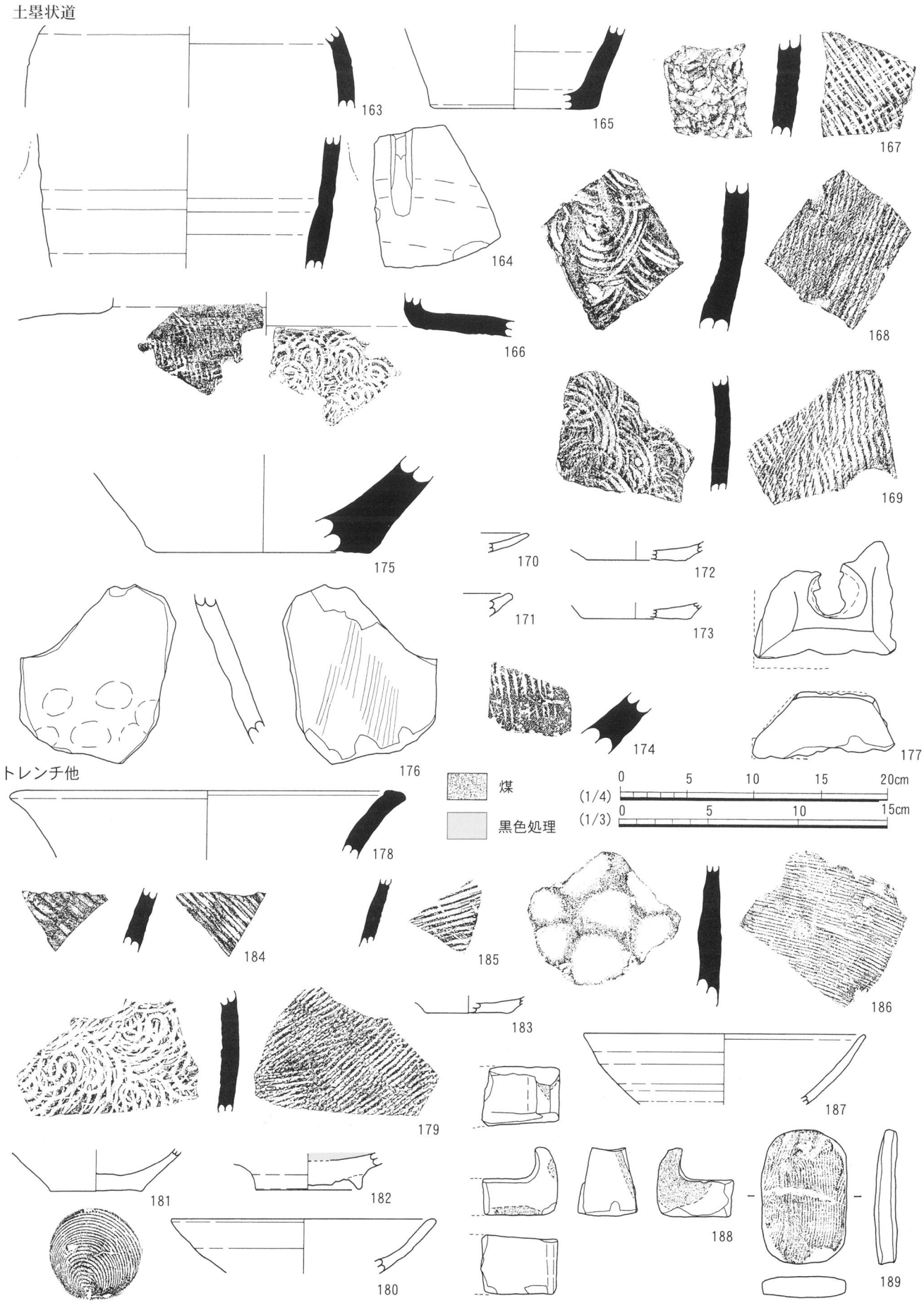
第25図　遺物実測図（７）　（117・118・120～125はＳ＝1/4，119はＳ＝1/6，その他はＳ＝1/3）



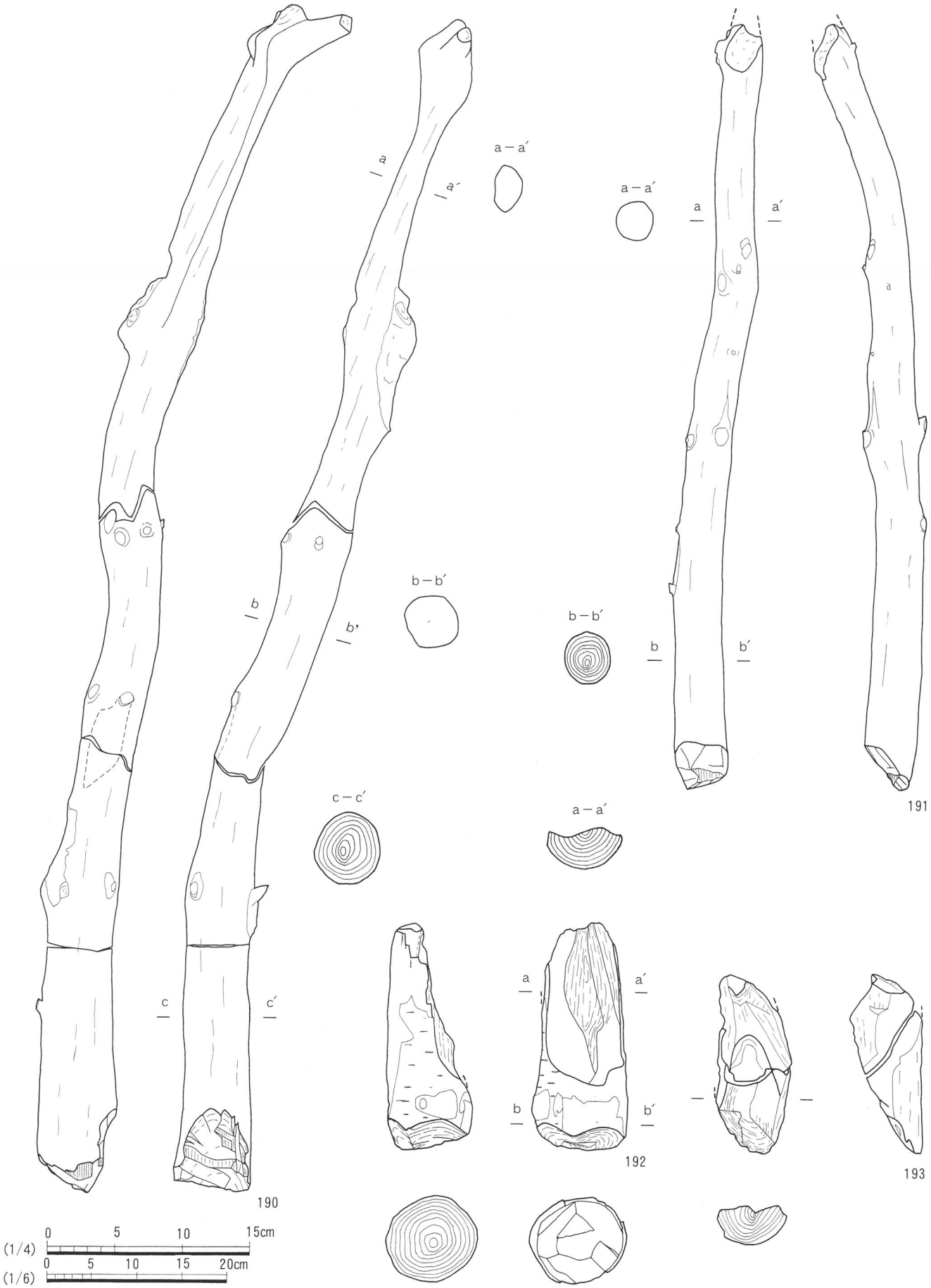
第26図　遺物実測図（８）　（126～128・134・135・141～147はＳ＝1/3，129～133・136～140はＳ＝1/4）



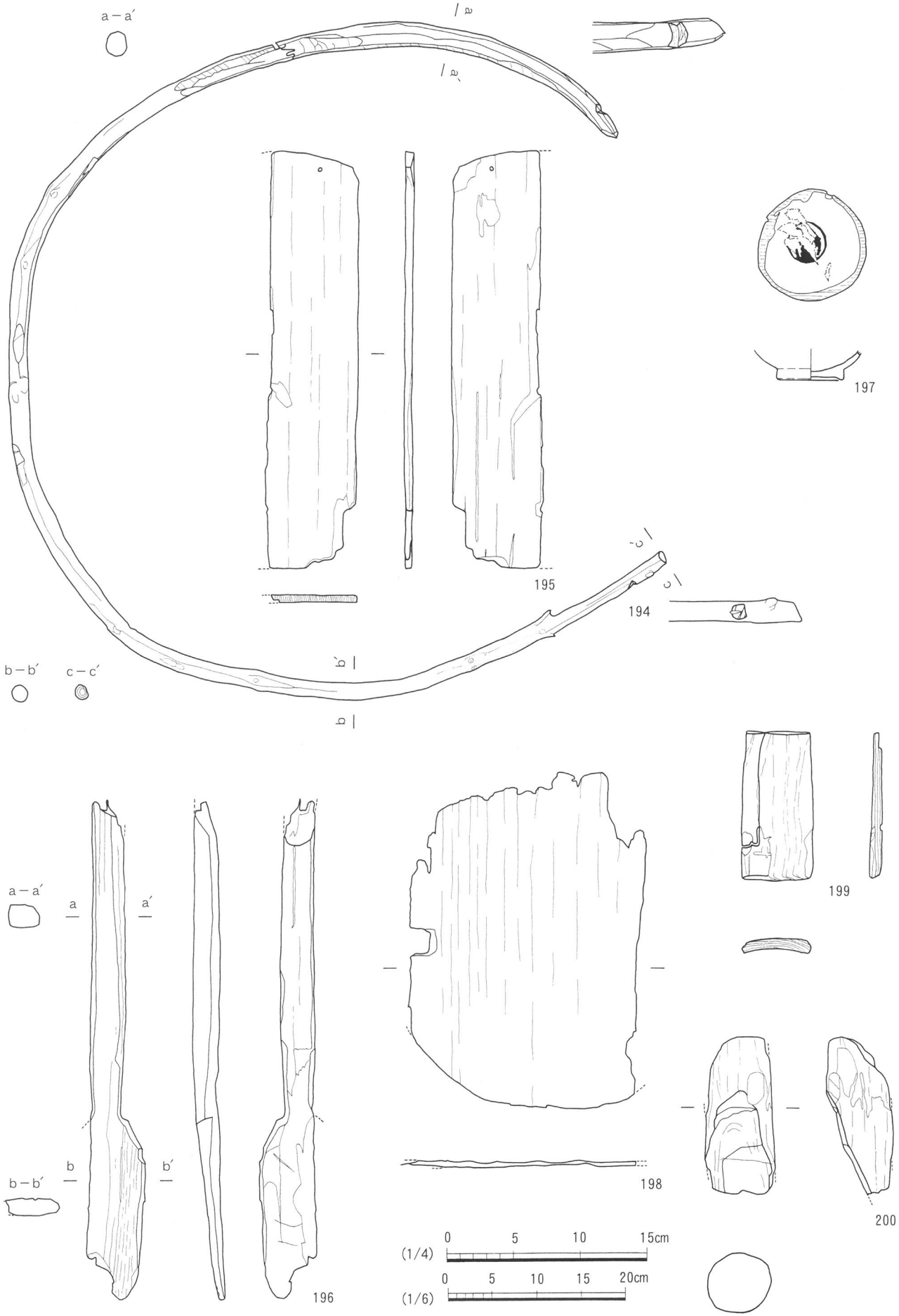
第27図　遺物実測図（９）　（148はＳ＝1/2，151・152はＳ＝1/4，その他はＳ＝1/3）



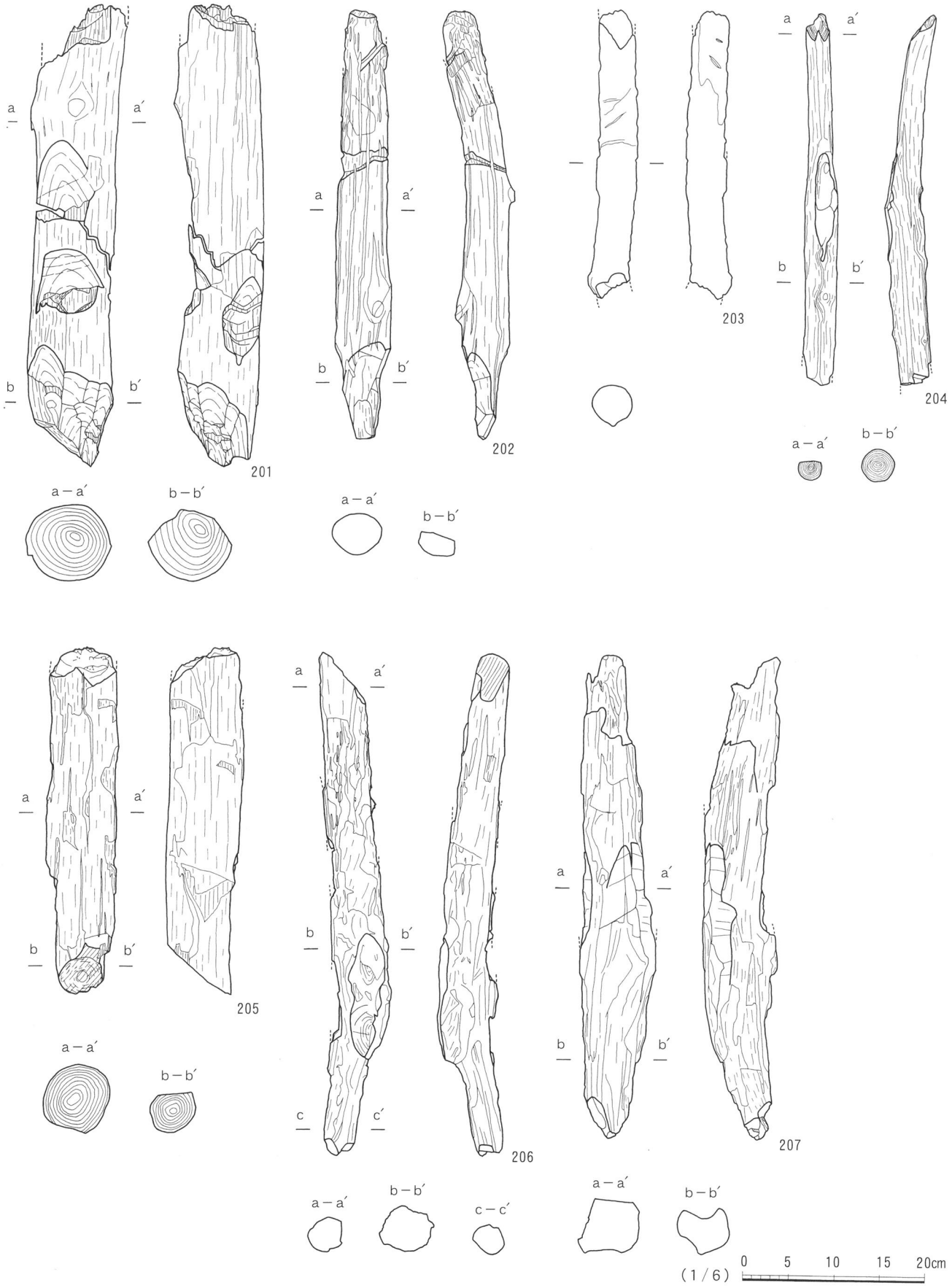
第28図　遺物実測図(10)　(166はＳ＝1/4, 177はＳ＝1/6, その他はＳ＝1/3)



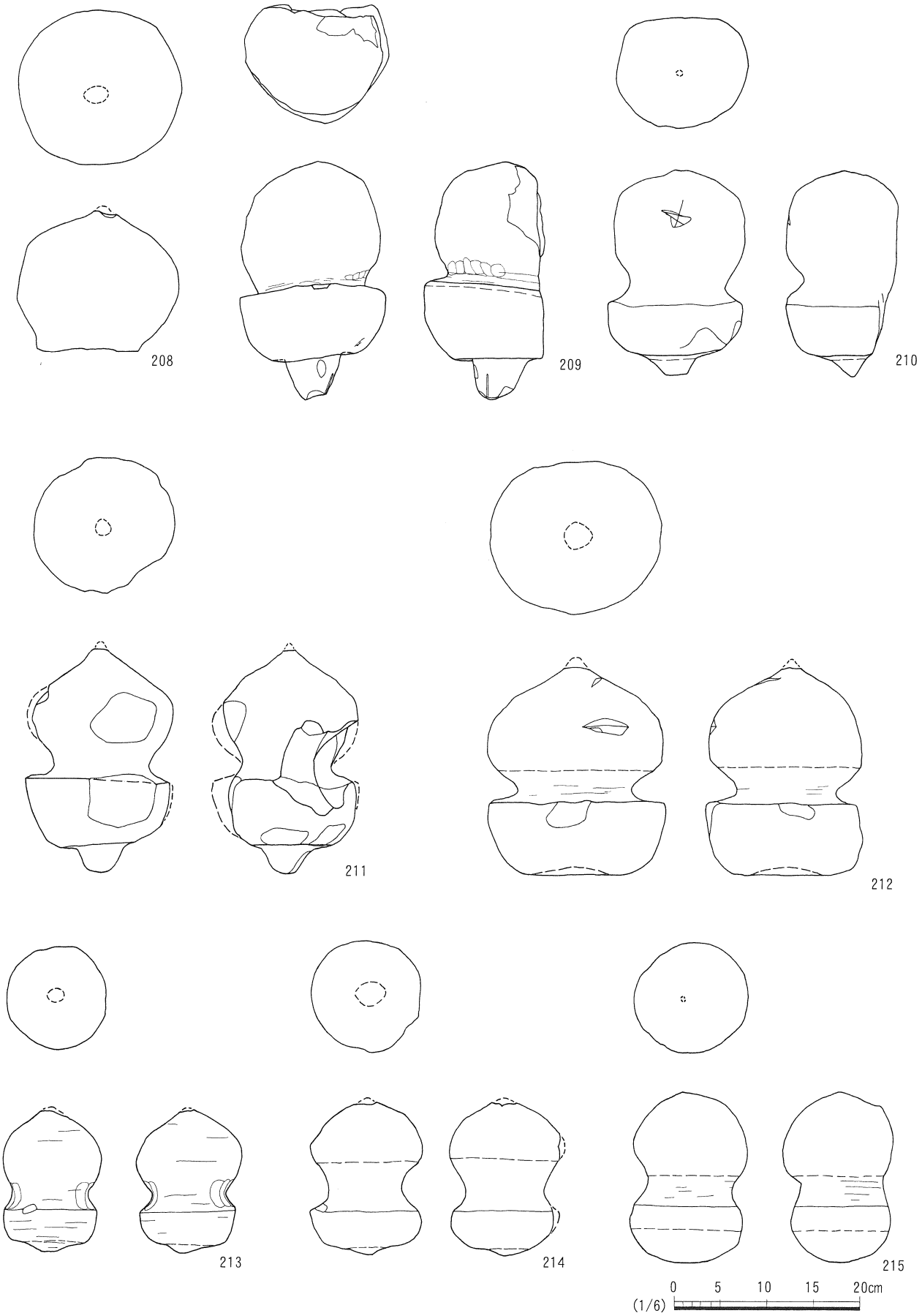
第29図　遺物実測図(11)　(192・193はS＝1/4, 190・191はS＝1/6)



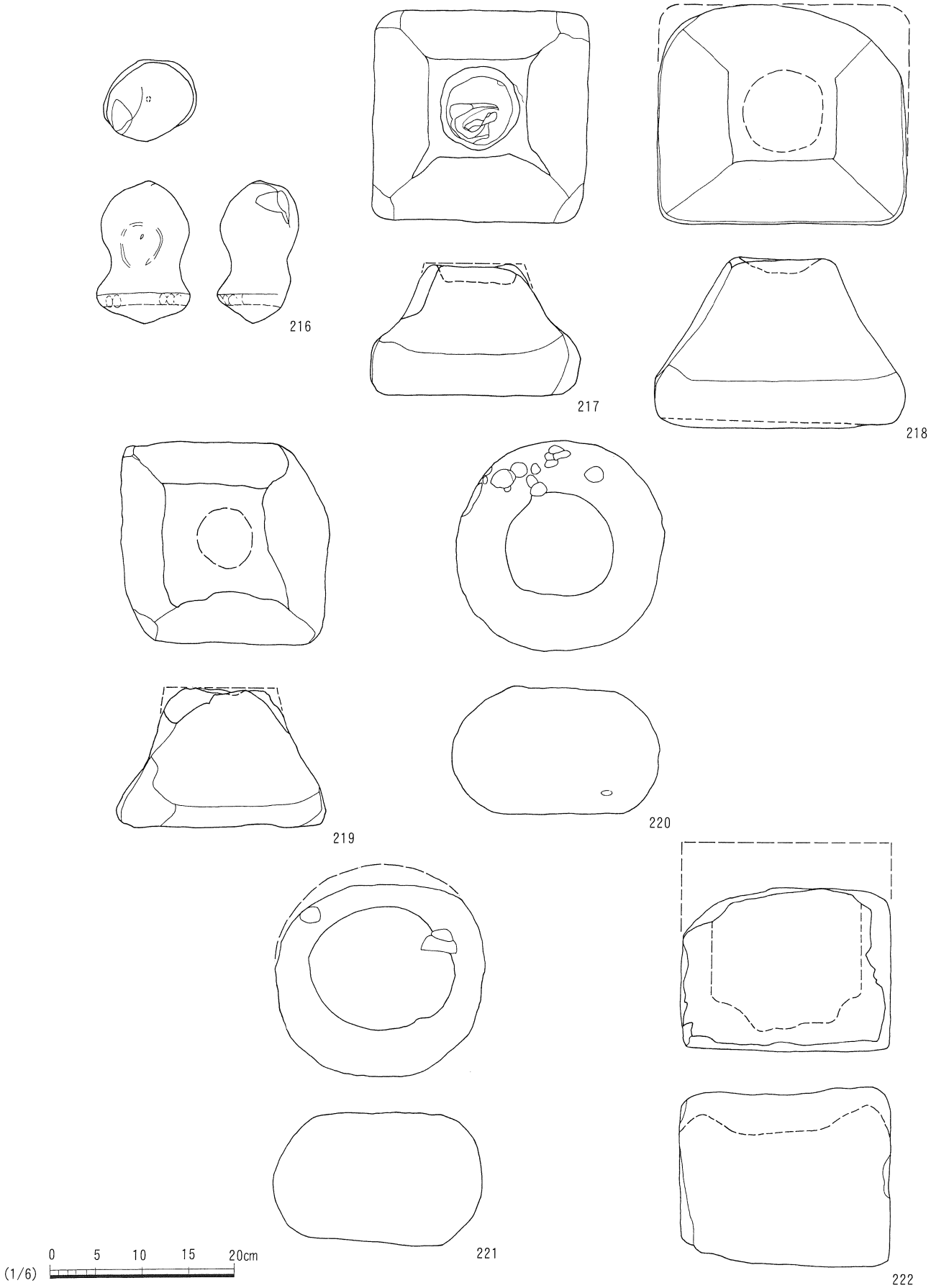
第30図　遺物実測図(12)　(194・196はＳ＝1/6, 194先端加工痕・その他はＳ＝1/4)



第31図　遺物実測図(13)　(S＝1/6)



第32図　遺物実測図(14)　(S＝1/6)



第33図　遺物実測図(15)　(S＝1/6)

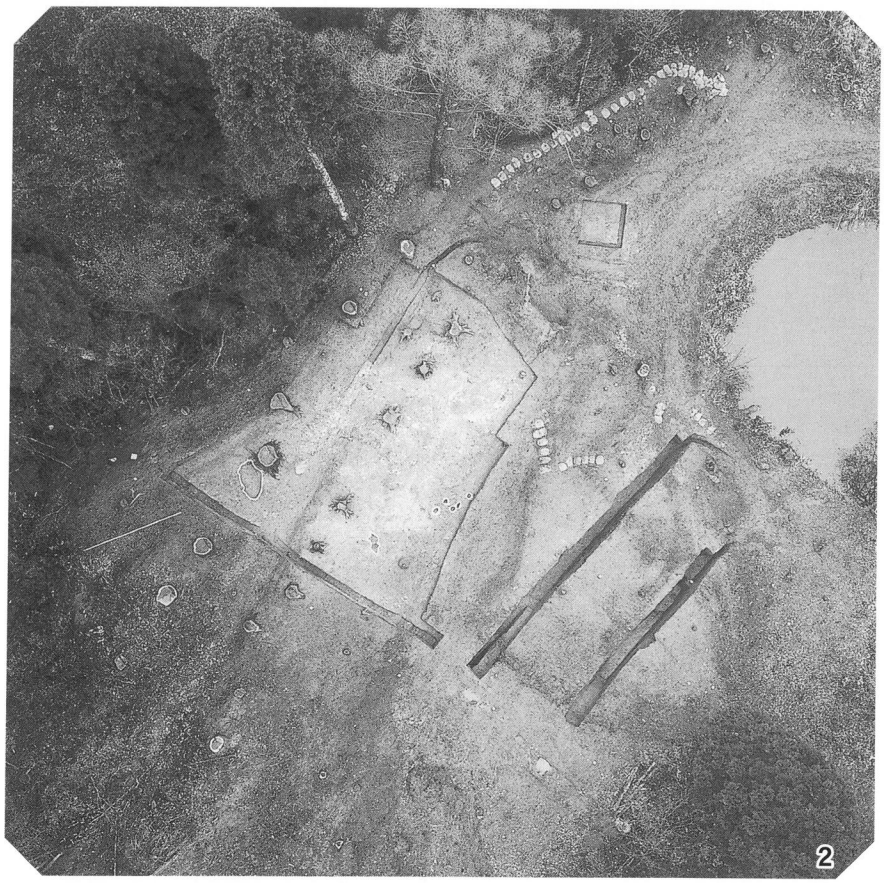
図版 1　遺跡周辺空中写真（1947年撮影）国土地理院

この写真は、国土地理院長の承認を得て、同院撮影の空中写真を複製したものである。（承認番号）平17　北複　第264号

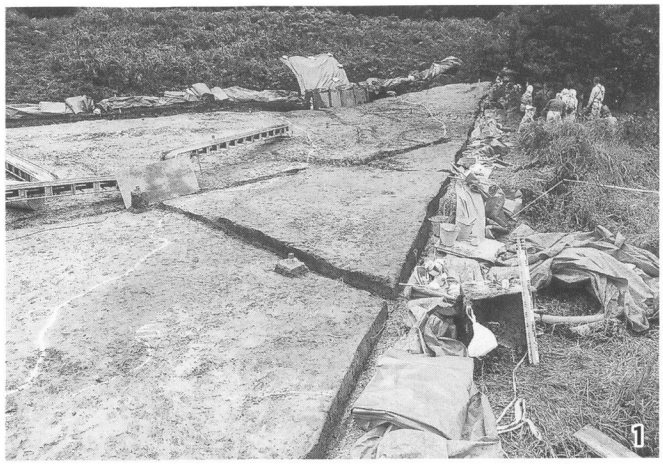
図版２　遺跡周辺空中写真（1975年撮影）国土地理院

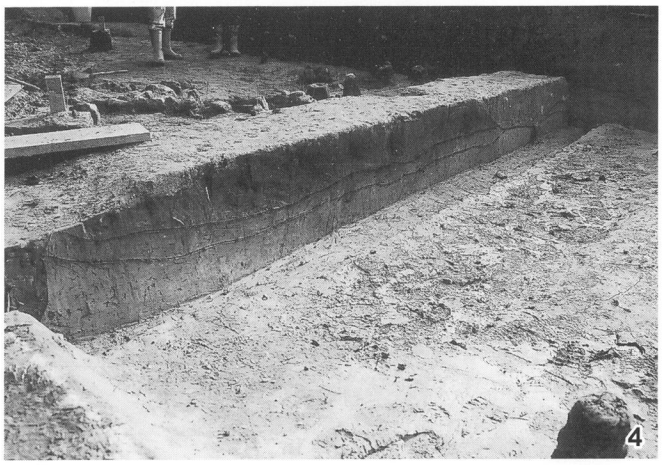
この写真は、国土地理院長の承認を得て、同院撮影の空中写真を複製したものである。（承認番号）平17　北複　第264号

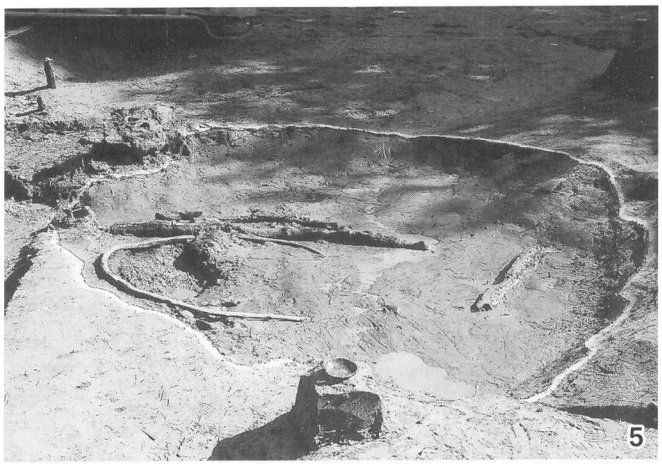
図版３　１．平成15年度調査後遠景　北西から
　　２．平成15年度調査前近景　北から

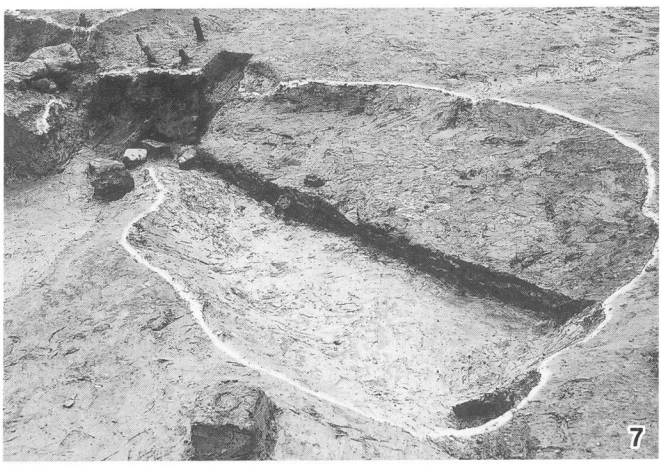


図版４　１．平成15年度Ⅰ・Ⅱ地区全景
２．平成15年度Ⅲ地区全景



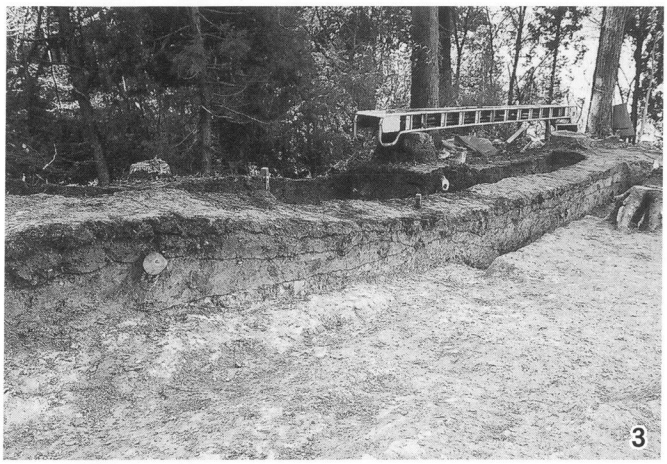
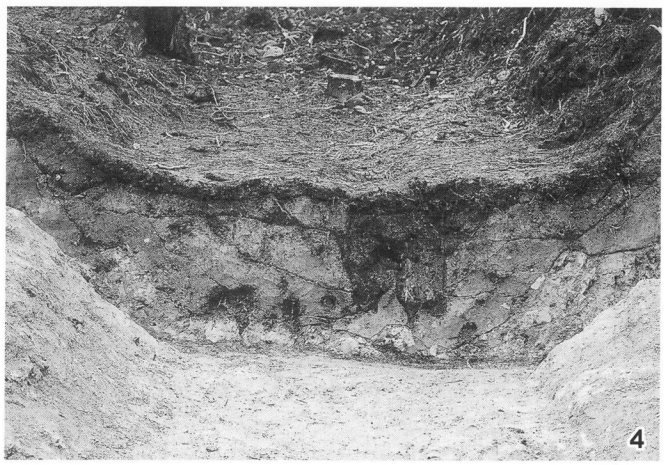
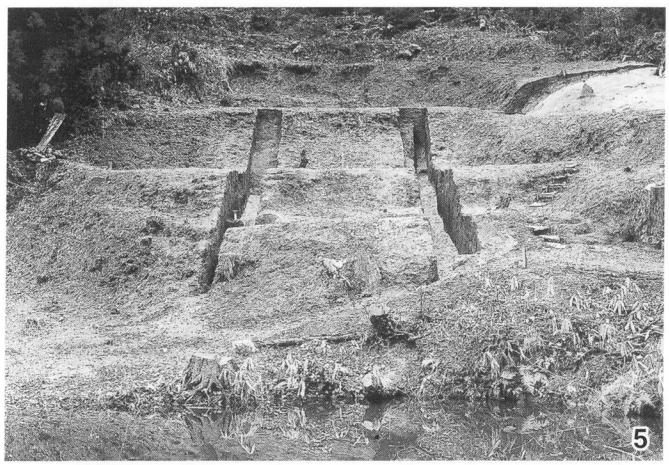
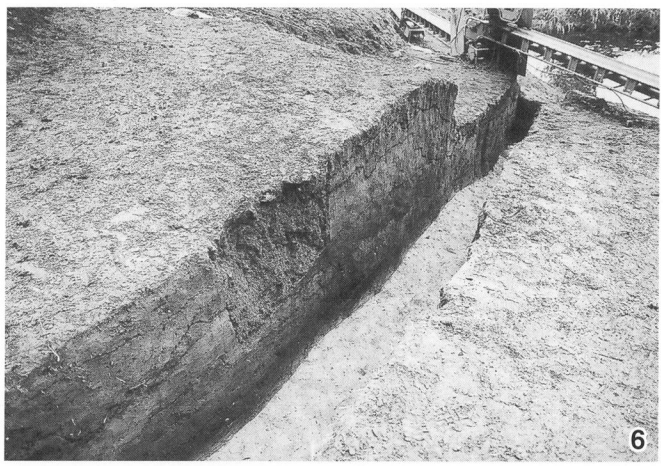






図版５　平成15年度調査区（１）

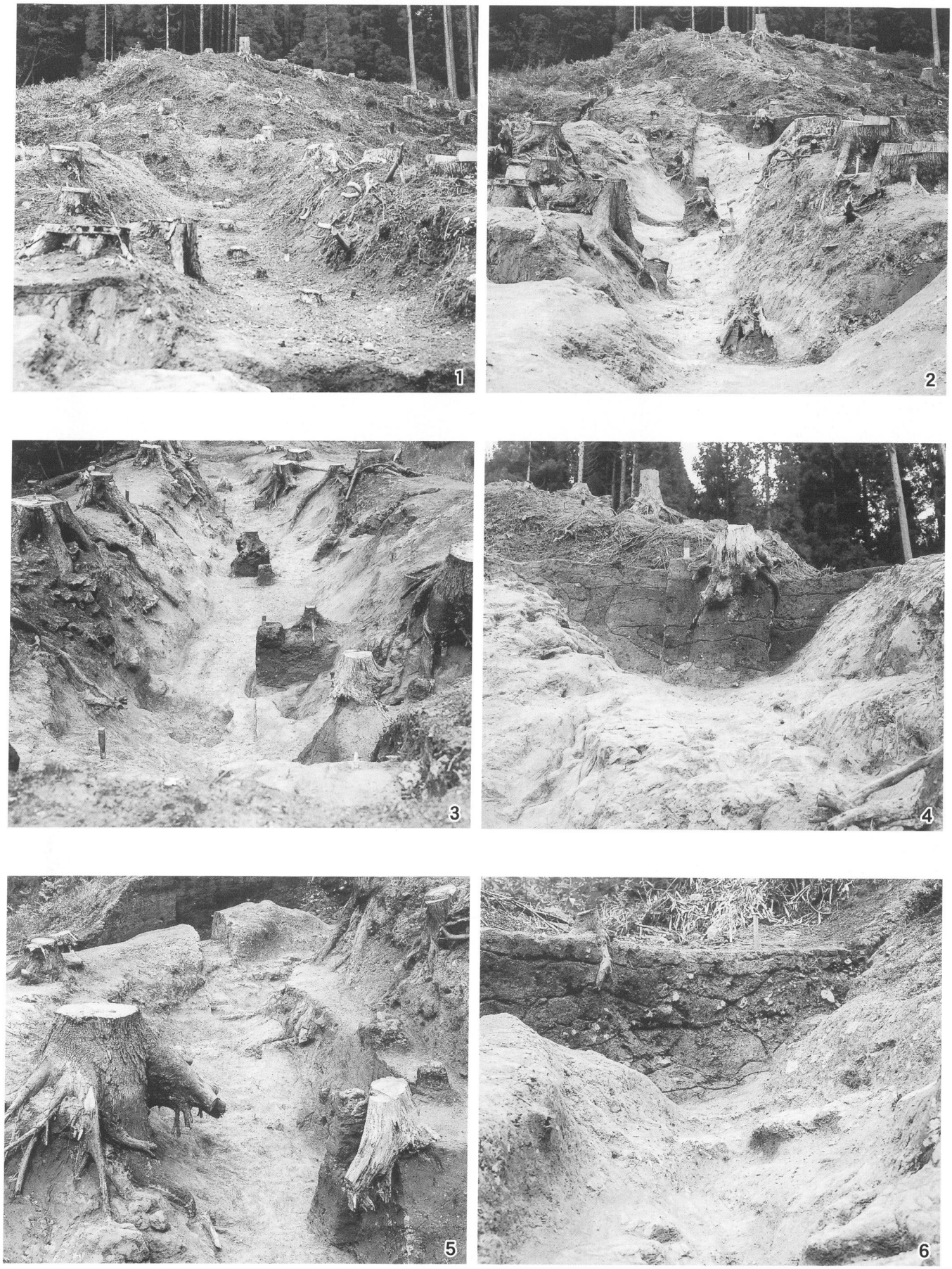
１．旧河道01検出状況　北西から
２．旧河道01完掘状況　北西から
３．旧河道01ｇ－ｇ'断面　西から
４．旧河道01ｈ－ｈ'断面　北から
５．Ｓ×05検出状況　北西から
６．Ｓ×05完掘状況　北西から
７．Ｓ×05半裁状況　北西から
８．Ｓ×05付近漆椀出土状況

図版６　平成15年度調査区（２）

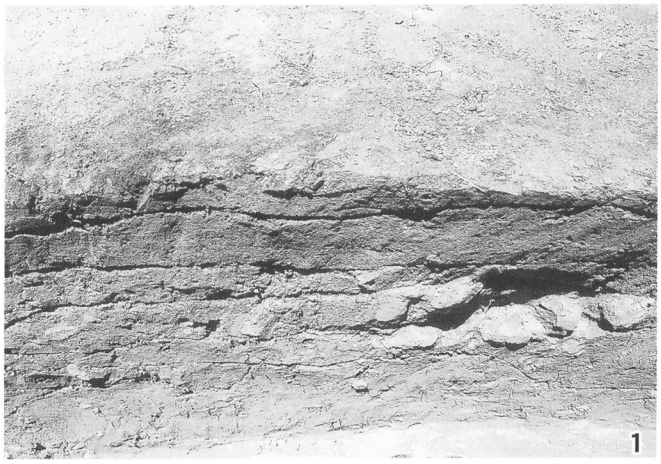
１．土墨状道調査前状況　北西から
２．土墨状道完掘状況　北西から
３．土墨状道縦断面　東から
４．土墨状道横断面　北西から
５．Ｔ５・６完掘状況　北西から
６．Ｔ５完掘状況　東から
７．五輪塔集積地　北西から
８．作業風景

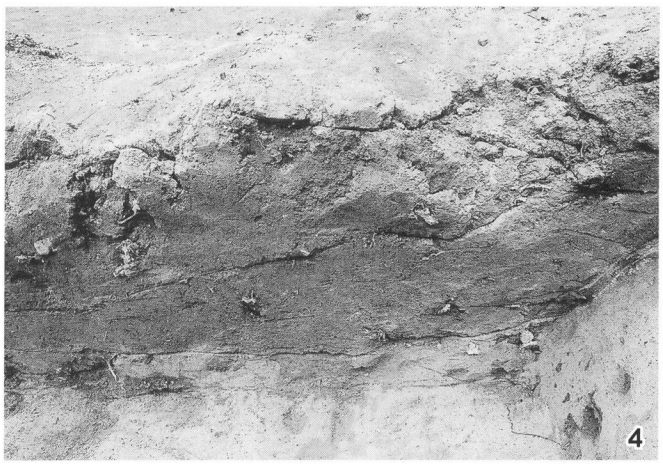
図版７　１．平成16年度調査区全景
２．平成16年度調査区（土塁状道）鳥瞰写真　北西から



図版８　平成16年度調査区（１）

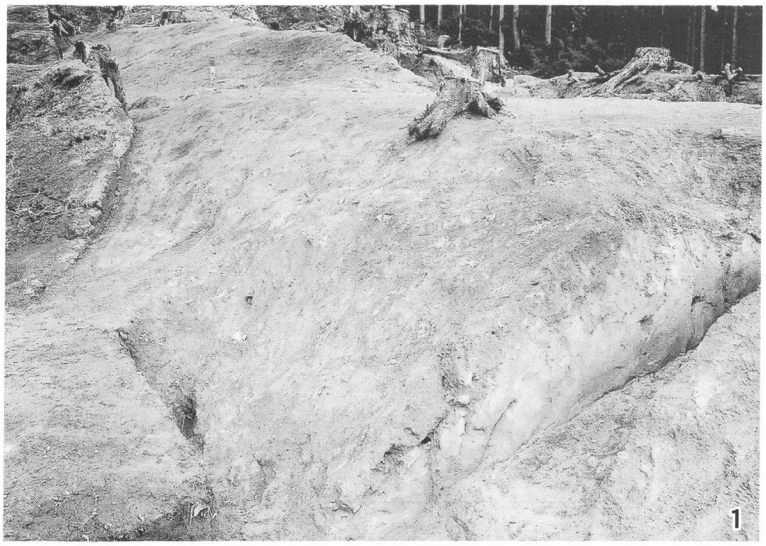
１．土墨状道調査前状況　北西から
２．土墨状道完掘状況　北西から
３．土墨状道完掘状況　南東から
４．土墨状道土層断面（Ｔ27拡張）　北西から
５．土墨状道クランク部完掘状況　南西から
６．土墨状道土層断面（Ｔ22）　西から





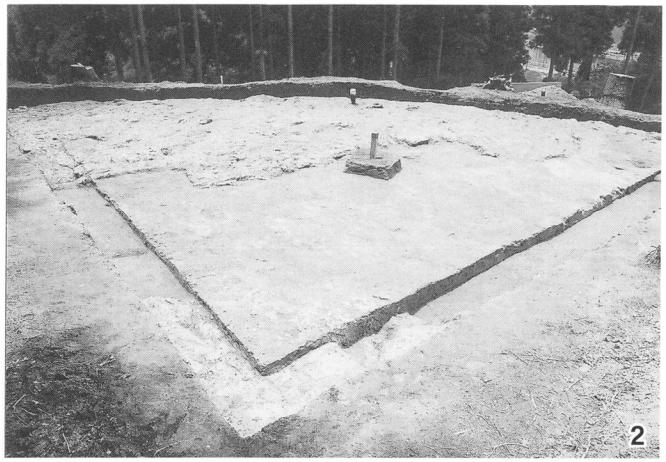
図版９　平成16年度調査区（２）

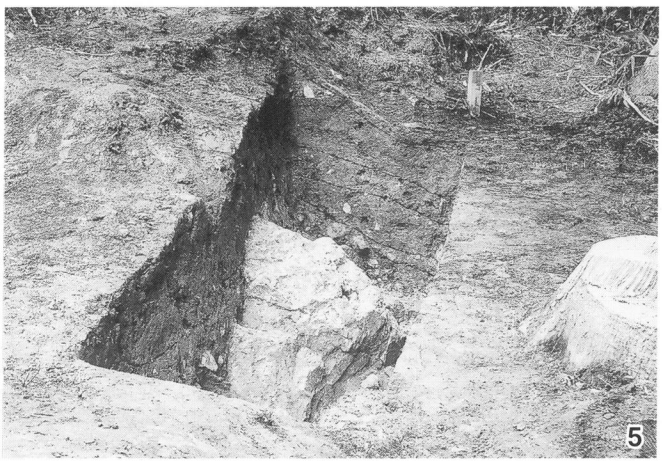
１．土塁状道ａ－ａ'断面（Ｔ24南西端）
２．土塁状道ｃ－ｃ'断面　西から（Ｔ27中央）
３．Ｔ28南東壁中央左（土塁状道横断面）
４．Ｔ28南東壁中央右（土塁状道横断面）
５．SK11完掘状況　南西から
６．SX11完掘状況　北から
７．Ｔ29遺物（174）出土状況
８．道直上遺物（163）出土状況



図版10　平成16年度調査区（3）

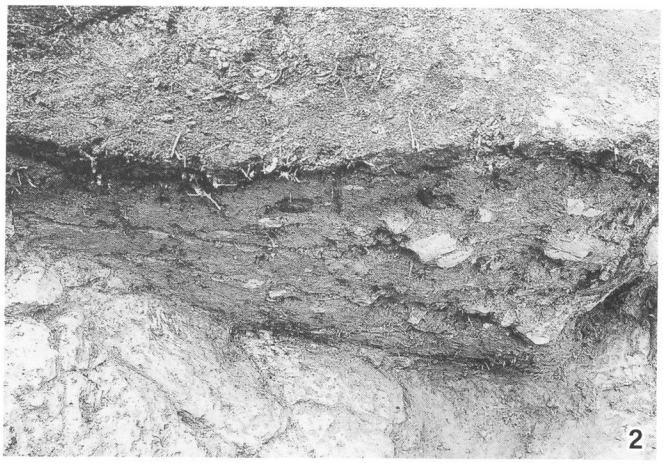
1．北側土塁完掘状況　北西から
2．T28南東壁（北東側土塁横断面）
3．T28南東壁（南西側土塁横断面）
4．南西側土塁完掘状況　西から
5．T30北壁（北東側土塁縦断面）
6．土塁直上遺物（170）出土状況

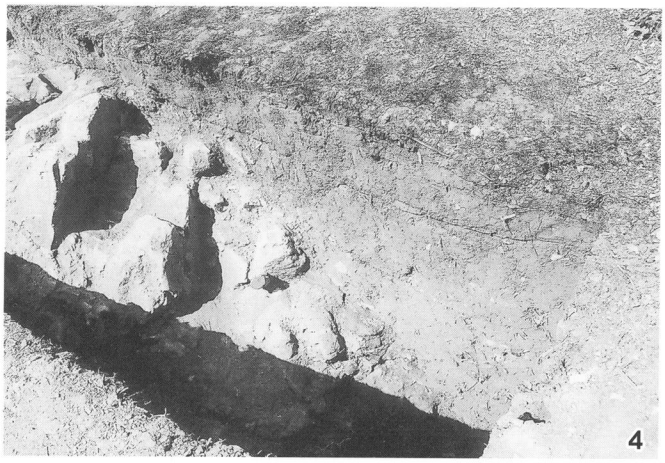




図版11　平成16年度調査区（4）

1．丘陵上平坦面調査前状況　東から
2．丘陵上平坦完掘状況　東から
3．丘陵上平坦面北東壁中央　北西から
4．丘陵上平坦面中央トレンチ北壁　南から
5．T13完掘状況　北から
6．T14完掘状況　東から
7．T15完掘状況　南東から
8．T17完掘状況　南東から





図版12　平成16年度調査区（5）

1．T21拡張トレンチ完掘状況　北から
2．T21拡張トレンチ南西壁　北東から
3．T22・23完掘状況　北から
4．T22北東壁南東端　南西から
5．T25南西壁南東端　北東から
6．T25完掘状況　北から
7．T26北西壁北東端　南東から

64

65

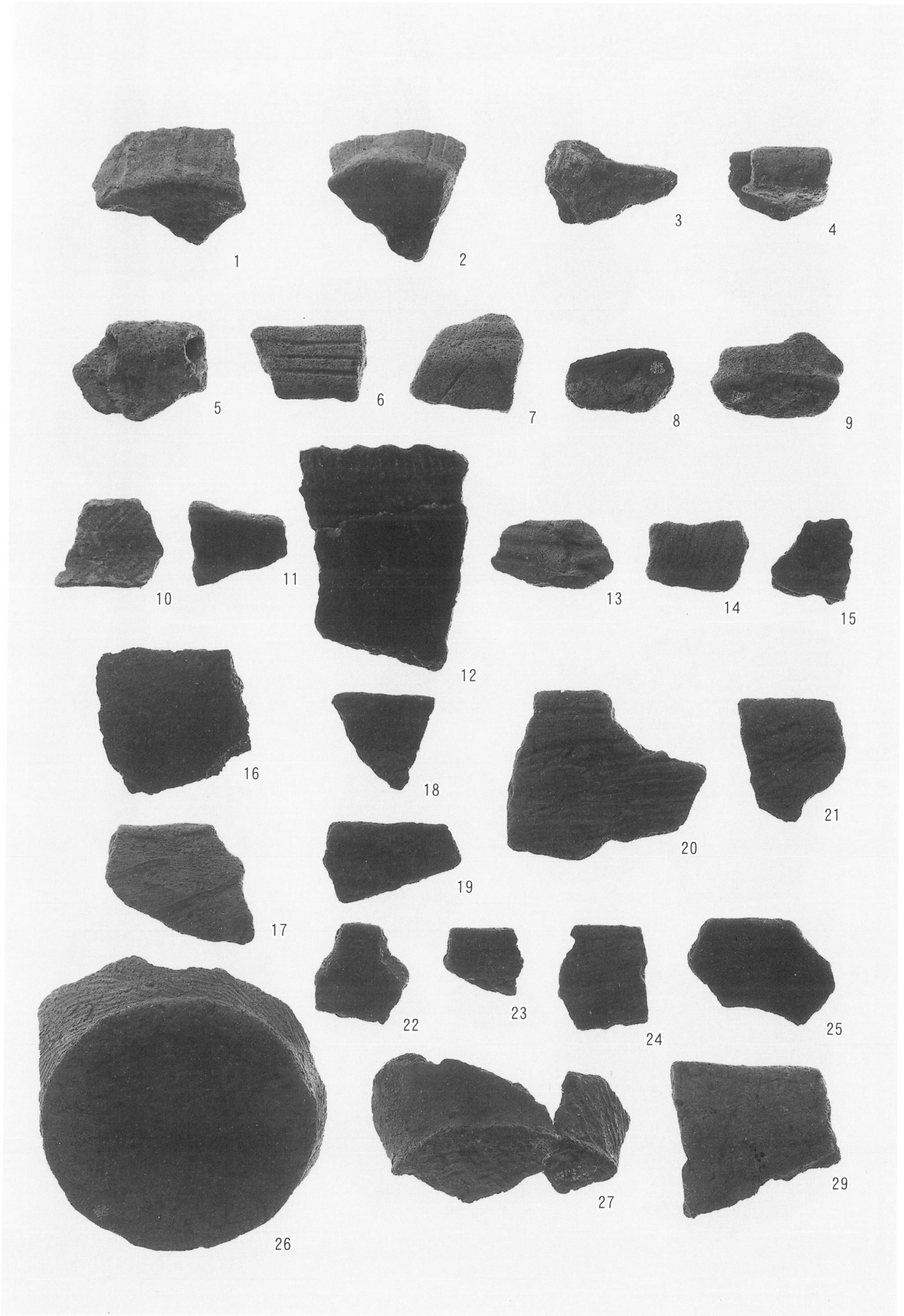
66

89

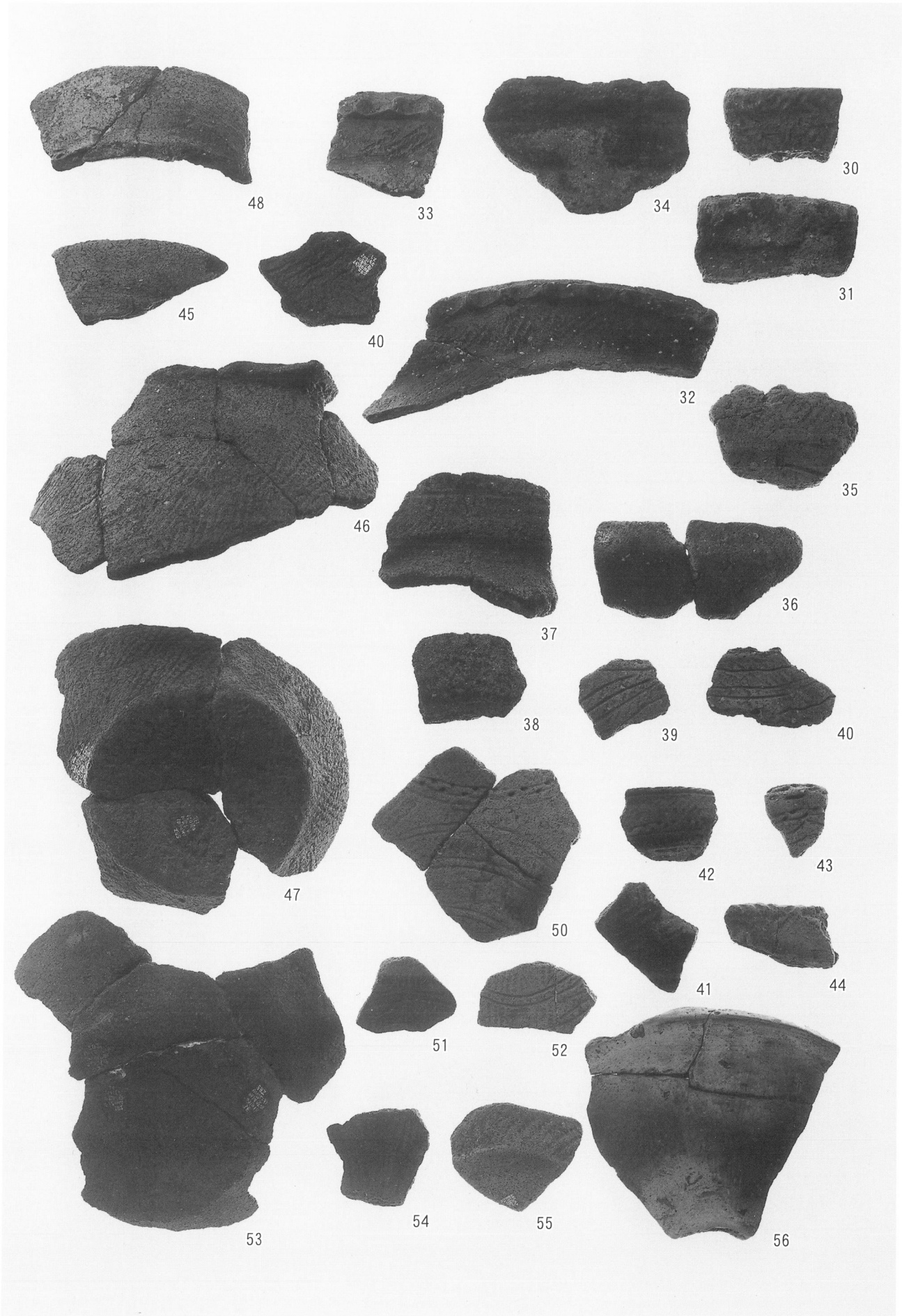
28

177

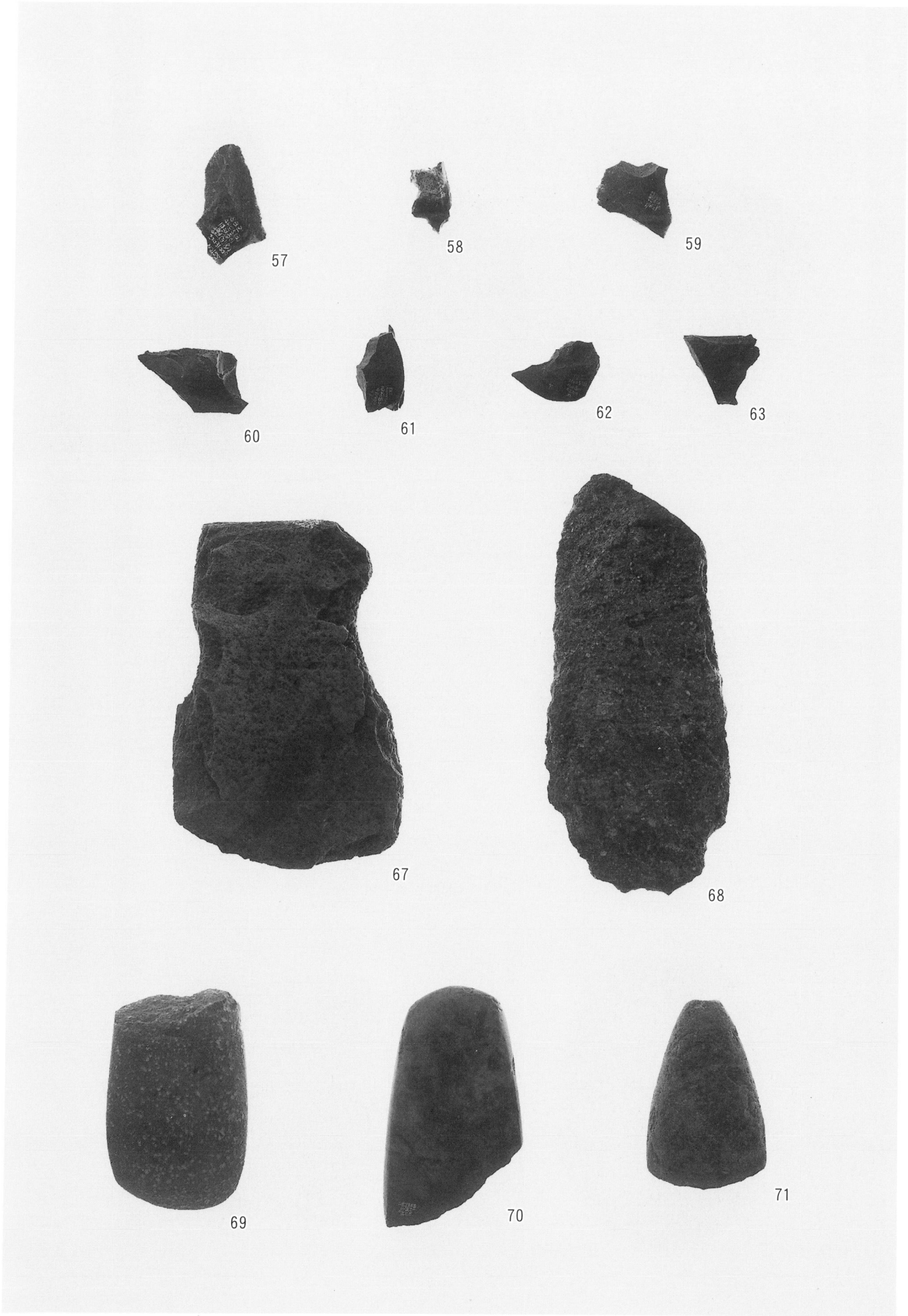
図版13　遺物写真（1）



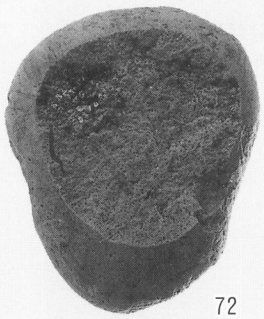
図版14　遺物写真（2）


48
33
34
30
31
45
40
32
35
46
37
36
38
39
40
47
42
43
50
41
44
51
52
53
54
55
56

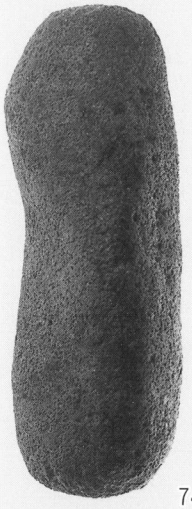
図版15　遺物写真（3）

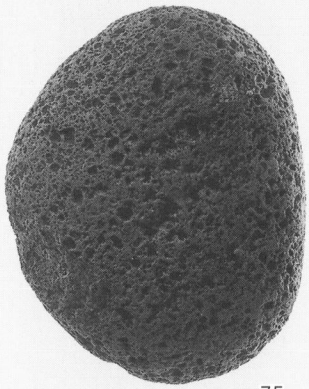


図版16　遺物写真（4）


72

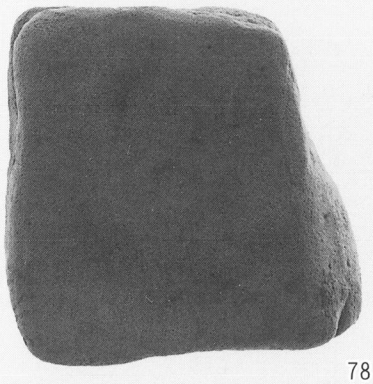
73


74


75

76

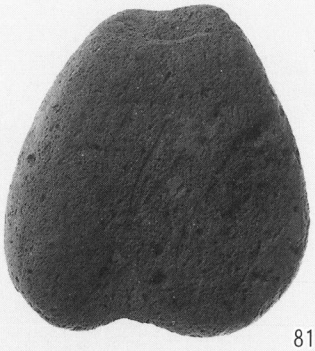
77


78

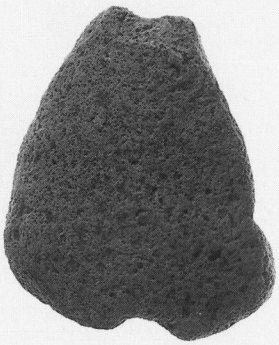
図版17　遺物写真（5）

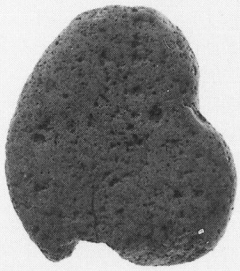
79

80

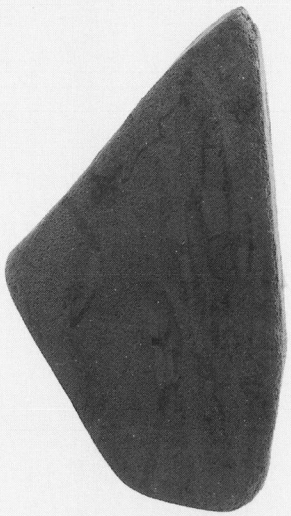

81

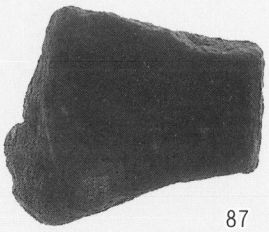
82


83


84

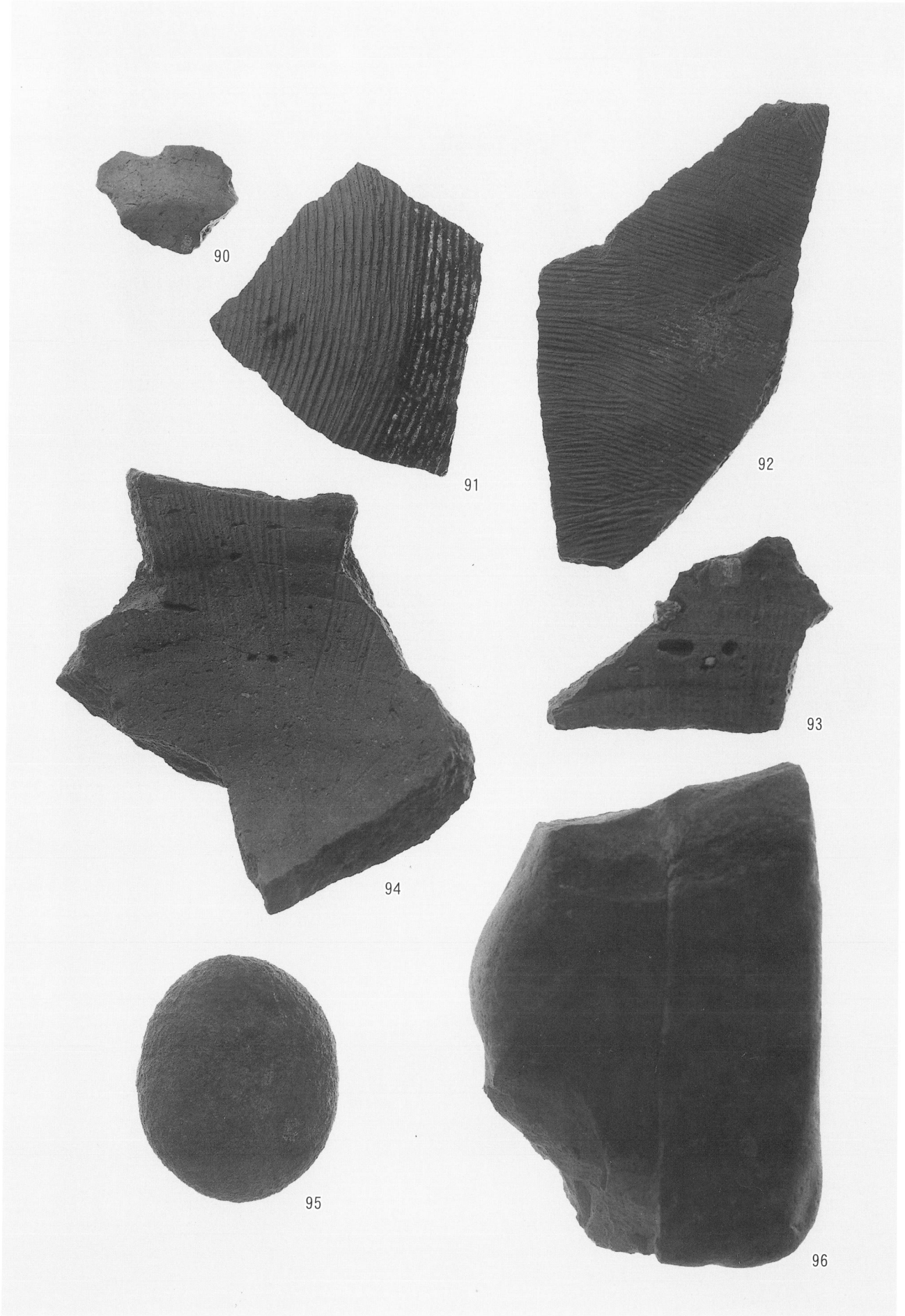
85


86

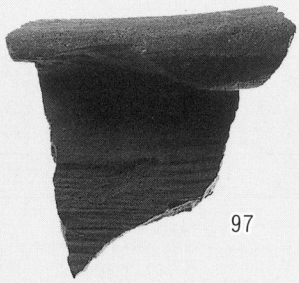

87

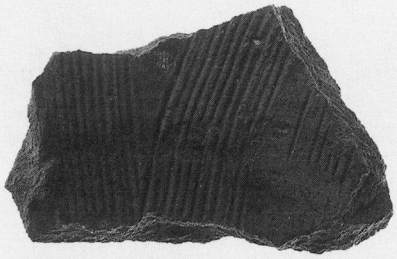
88

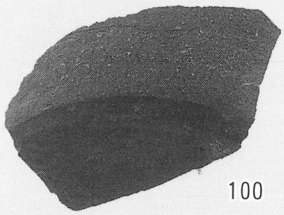
図版18　遺物写真（6）

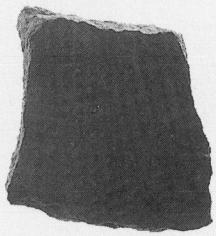


図版19　遺物写真（7）

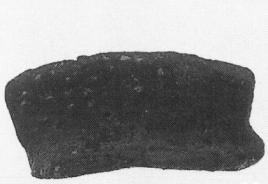


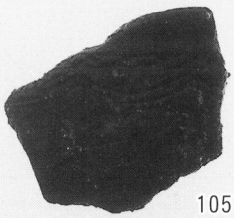


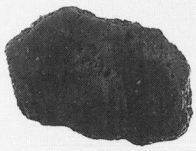


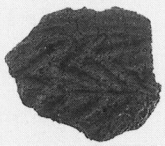


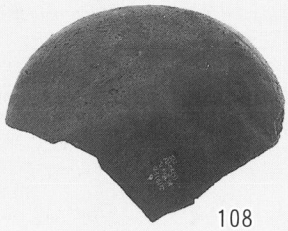
図版20　遺物写真（8）

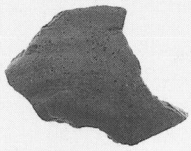


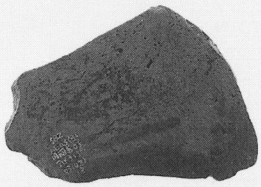


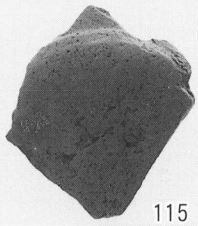




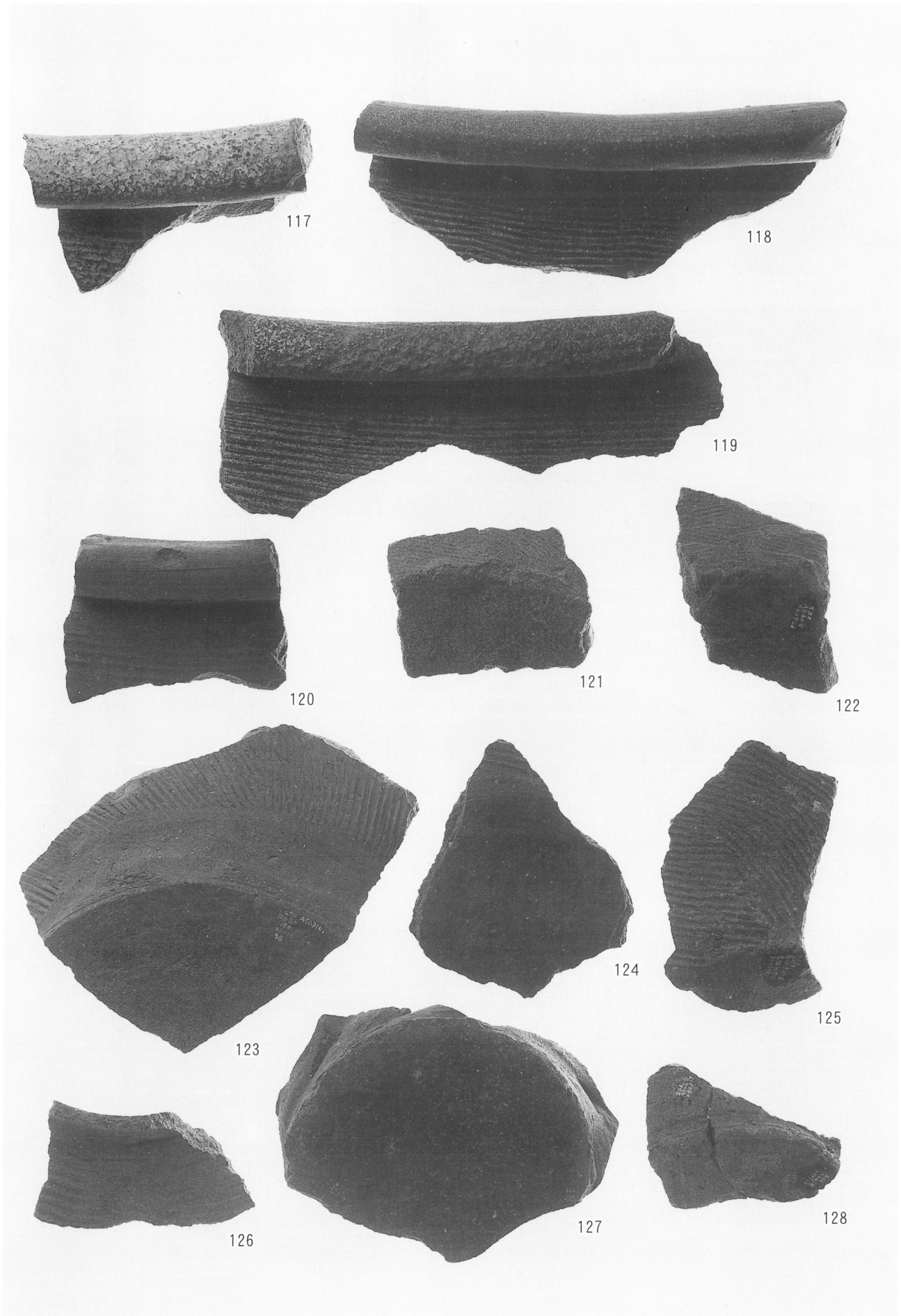




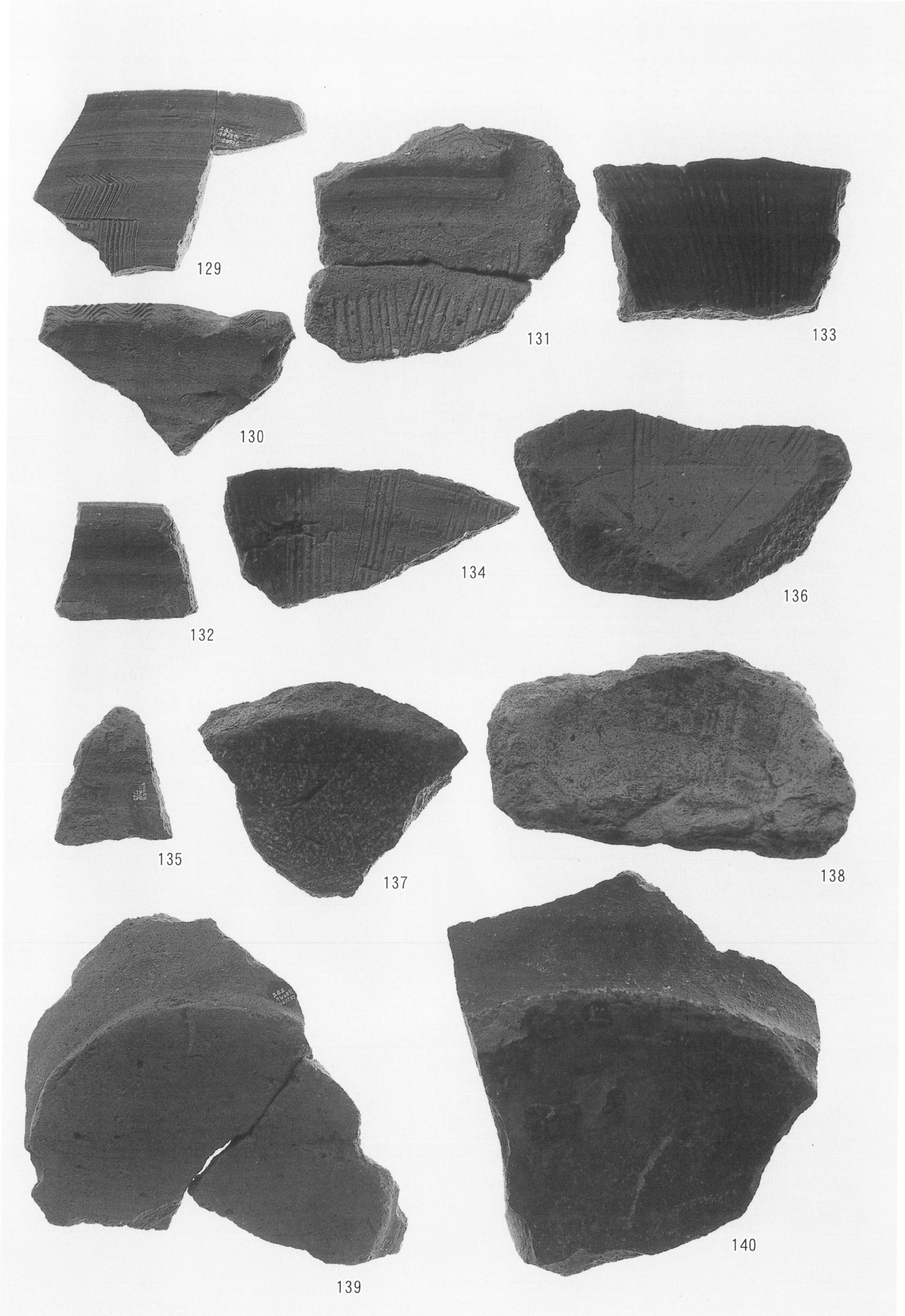




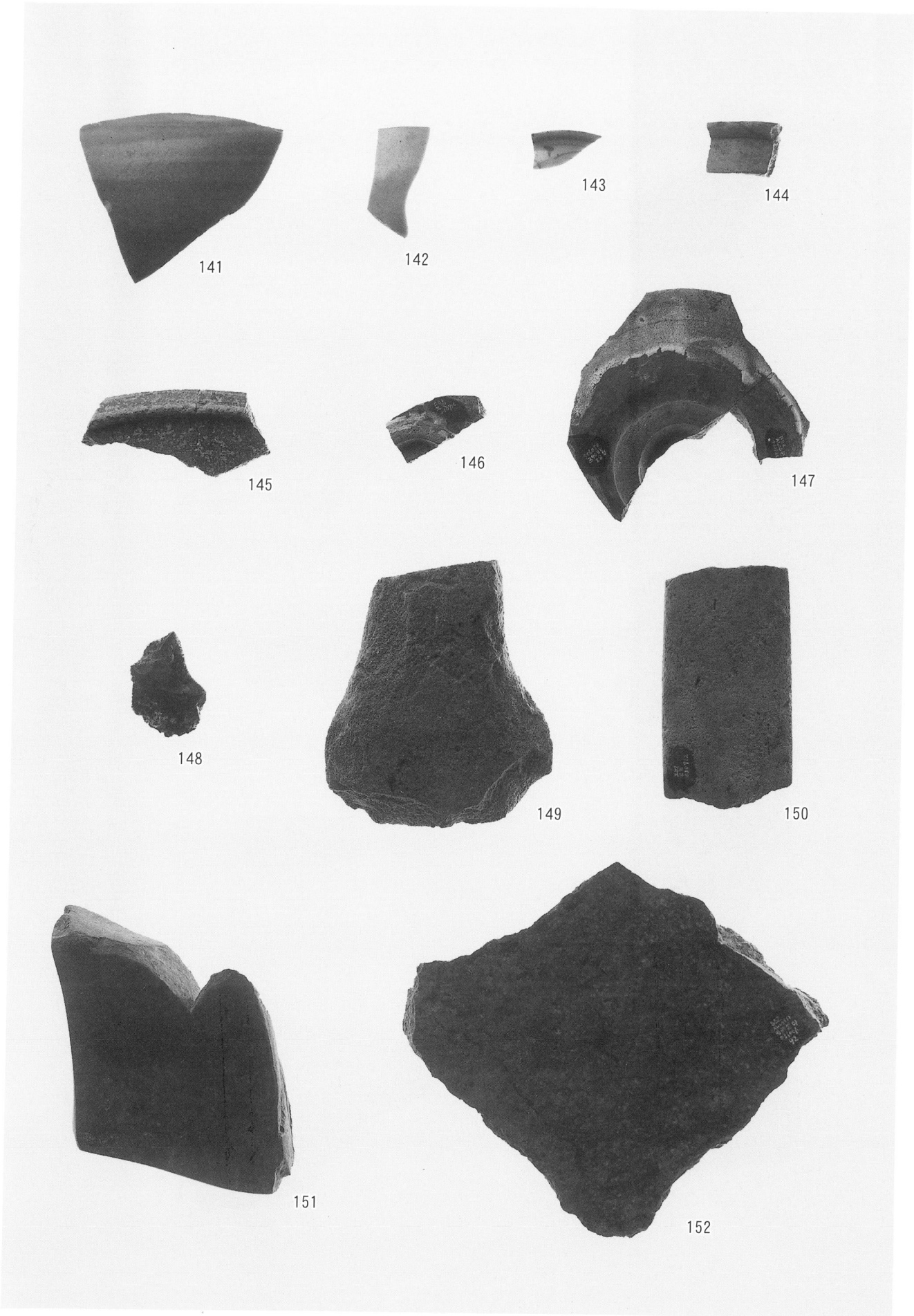
図版21　遺物写真（9）



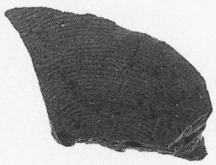
図版22　遺物写真（10）



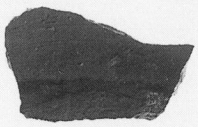
図版23　遺物写真（11）



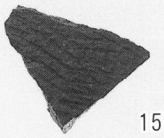
図版24　遺物写真（12）



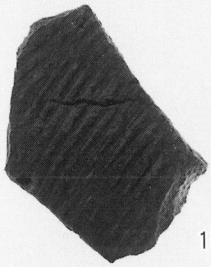
154



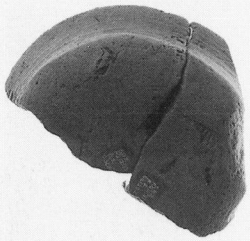
153



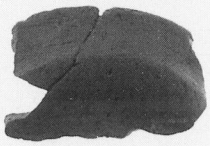
155



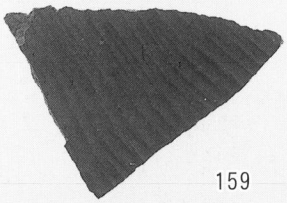
156



157

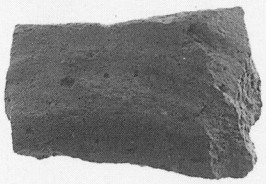


158

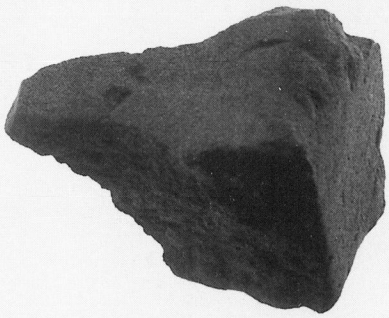


159

160

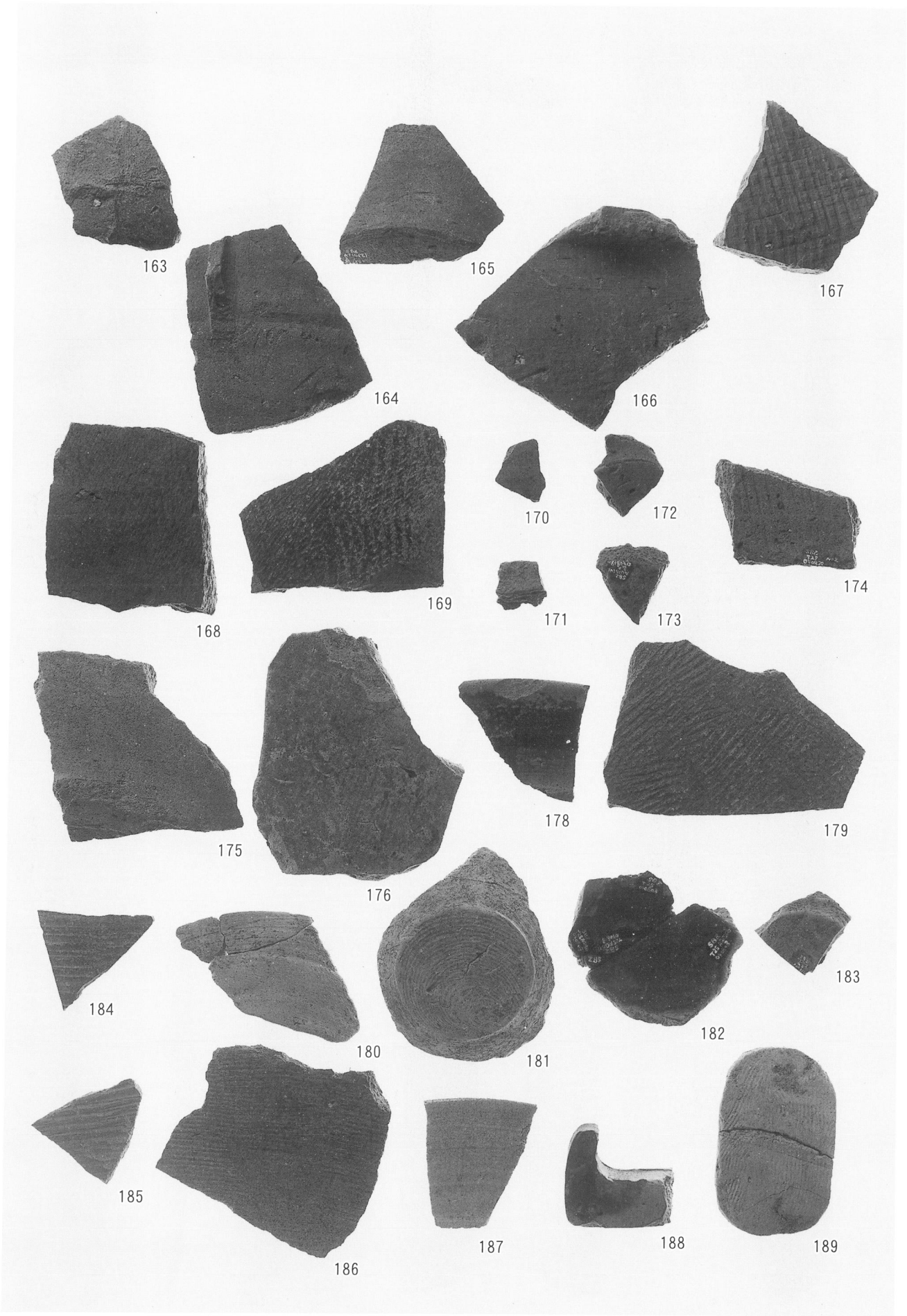


161

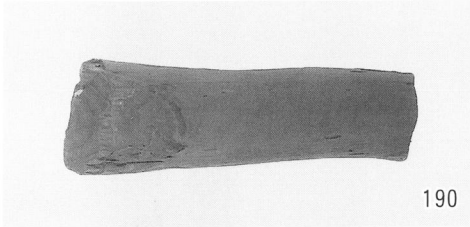


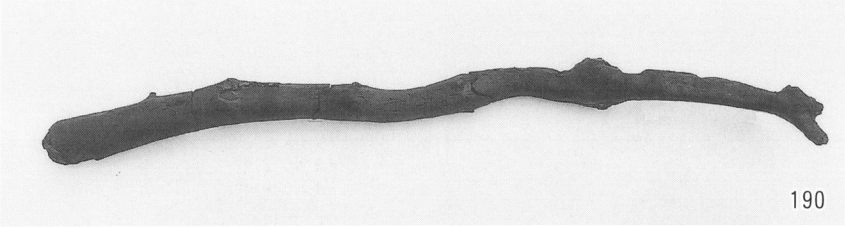
162

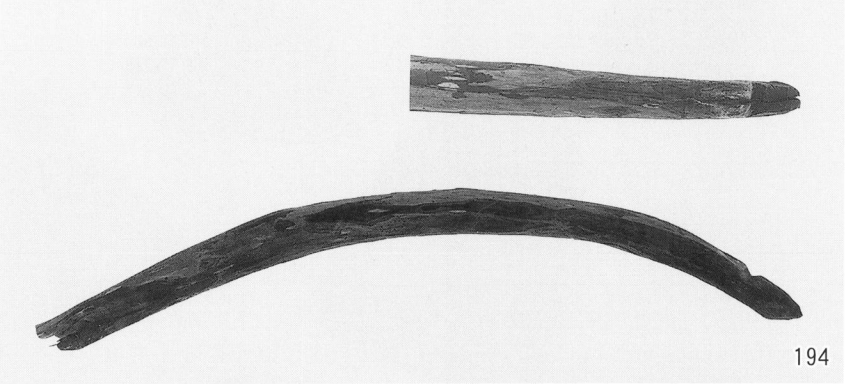
図版25　遺物写真（13）

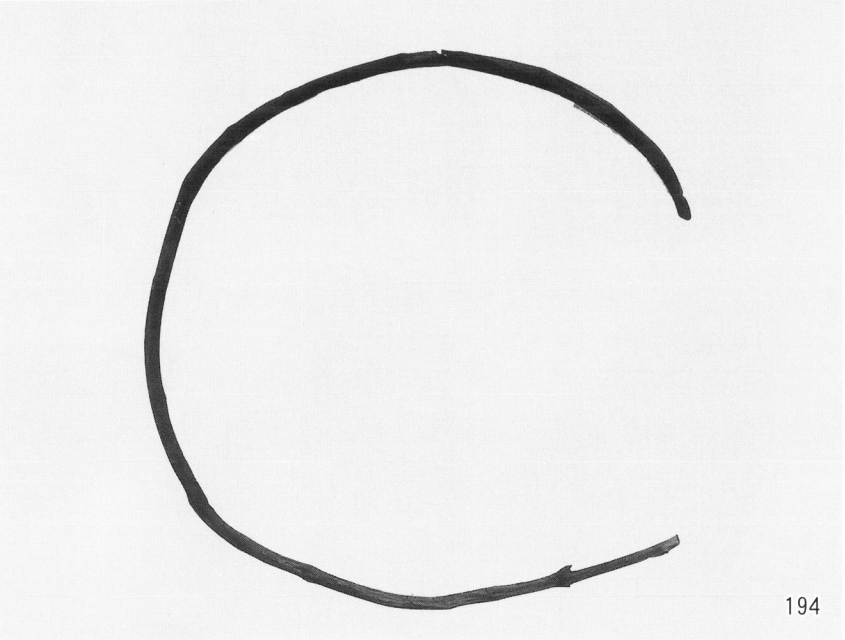

163
164
165
166
167
168
169
170
171
172
173
174
175
176
178
179
180
181
182
183
184
185
186
187
188
189

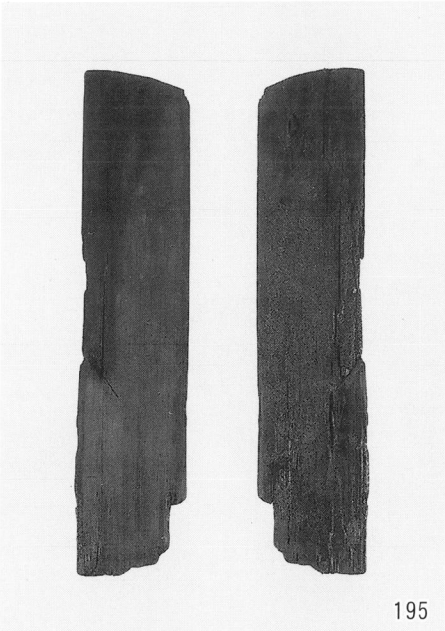
図版26　遺物写真（14）



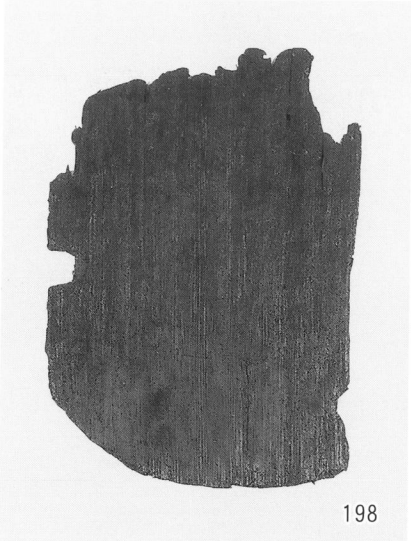


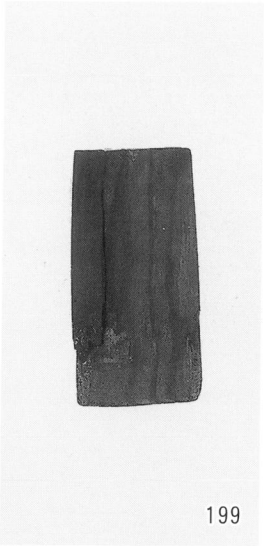


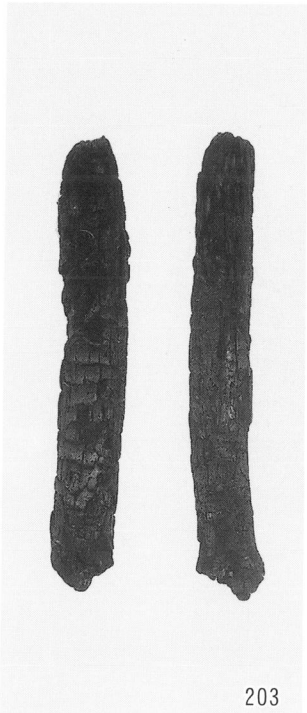


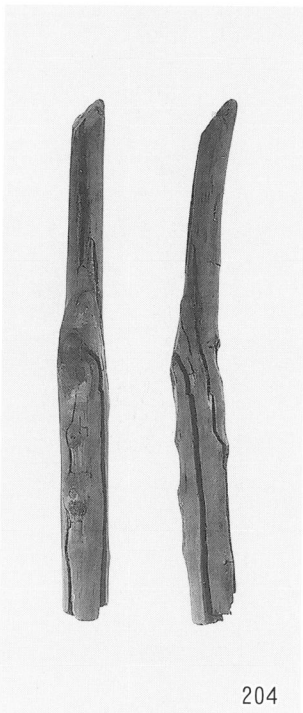


図版27　遺物写真（15）









図版28　遺物写真（16）

図版29　遺物写真（17）

図版30　遺物写真（18）

図版31　遺物写真（19）

報告書抄録

ふりがな	しょうぼうじいせき
書名	正保寺遺跡
副書名	能越自動車道建設に伴う発掘調査報告
巻次	Ⅰ
シリーズ名	氷見市埋蔵文化財調査報告
シリーズ番号	第46冊
編著者名	大嵩崎　泰明　、　河竹　明子
編集機関	氷見市教育委員会
所在地	〒935-0016　富山県氷見市本町4番9号　TEL0766（74）8215
発行年月日	2006年３月31日

ふりがな 所収遺跡	所在地	コード		北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
しょうぼうじ 正保寺 遺跡	富山県氷見市 飯久保	16205	235	36° 48′ 12″	136° 57′ 15″	20030825 ～ 20031217	約1,050 m²	道路建設
						20040601 ～ 20040910	約1,500 m²	

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
正保寺 遺跡	散布地 寺院	縄文～弥生 古代 中世 近世	流路 土坑・溝・道	縄文土器 縄文石器 弥生土器 須恵器 古代土師器 珠洲焼 中世土師器	天王山式系統土器が出土した。 中世寺院へ続くと見られる道路を検出した。

平成18年３月15日　印刷

平成18年３月31日　発行

正保寺Ａ遺跡

氷見市埋蔵文化財調査報告書第46冊

編集・発行　氷見市教育委員会
〒935-0016
富山県氷見市本町４番９号
☎0766(74)8215

印刷　有限会社 ひふみ印刷社